明日から史上最強の萌えキャラ

秋華

俺の彼女は萌えキャラ

　春爛漫、桜咲くこの季節に、この俺「神田久弥《かんだひさや》」は女を連れて、とある場所へと向かって歩いていた。
　と言ってもこの季節なら、誰もが今の俺と同じような経験をしているに違いない。
　そう、俺は新しい学び舎である、高校の入学式に赴くところだ。
　ただし、多くの男子の場合は、勝手な想像ながら、女連れなどありはしないだろう。
　いや、同中《おなちゅう》のメンバーで連れ立って登校する場合もあるから、もしかしたら女連れの可能性もあるかもしれない。
　でもそれも、俺の言っている意味とはわけが違う。
　俺が連れている女は、まぎれもなく「俺の彼女」なのである。
　普通の中学生なら、今から彼女なんていたら、高校で彼女を作る楽しみが無くなるではないかと、俺の事を狂ったように否定するだろう。
　しかしだ。
　きっと今の俺の立場にお前らがいたら、否定する以上の夢と希望に胸を膨らませ、学校に向かっているに違いないのだ。
　どうして俺が、そこまで断言できるか、普通の人ならきっと疑問に思う事だろう。
　だから教えてやろう。
　俺の彼女は、中学時代、「ゴミクズ」と呼ばれるくらい、バカで阿呆でボケまくりの、超ダメダメなドジ女だったからだ。
　ん？意味がわからない？
　そうだな、俺も言っていて意味が分からないからな。
　少し説明が必要かもしれない。
　つまりだ。
　中学時代、全然ダメダメだった俺の彼女、「九頭竜愛美《くずりゅういつみ》」は、誰もが彼女にしたくない女ナンバーワンだった。
　そんな女を俺が彼女にしたのにはわけがある。
　それは、この子はきっと高校生になると、「萌えキャラ」として評価されるに違いないと思ったからだ。
　中学では、評価するヤローも全て中学生だった。
　しかし高校生になれば、自分も含めて、評価する人はより大人になってゆく。
　そうなってくると、この愛美はきっと、評価される事疑いないのだ。
　要するに、俺は彼女の先物買いをして、迫るバブルに胸躍らせているというわけだ。
　うむ、これできっと、みんな分かってくれた事だろう。
　そんなわけで、俺は愛美と共に、意気揚々と登校するのだった。
「ねぇ久弥《ひさや》くん、さっきからニヤニヤしてるけど、どうしちゃったにょ？って、いててて。舌かんじゃっしゃ」
　今、隣を歩く愛美が俺に話しかけてきたわけだが、いきなり舌を噛んで見せた苦笑いに、おそらくお前らの十二パーセントが萌えたはずだ。
　中学の頃なら、皆ため息をつき、心配もしていないのに、「大丈夫？血、出てない？」なんて言わなければならなかった。
　心の中では、皆うんざりしていたのだ。
　だが、高校生になった俺の対応はこうなる。

「愛美、舌はなめときゃ治るさ」
　俺がそう言うと、愛美は舌で舌をなめようと必死に首をまげていた。
　どうだこの状況、萌えるだろう？
　ツッコミをいれたくなってきただろう。
　此処でエロい高校生なら、「自分でなめられないなら、俺がなめてやるよ」なんて言いたくなったんじゃないかな？
　中学生という者は、大人に憧れ、よりまっとうな人物が評価されるのだけれど、高校生ともなると、そろそろ大人の背中が見えてきて、バカだった頃が恋しくなってくるのだ。
　そして大学生、社会人とジョブチェンジを繰り返した先には、まっとうな人間なんて何処にでも転がっている。
　そうなると、ますます「萌え」は、人々に求められる貴重なものとなってゆくだろう。
　では、「萌え」とは何か。
　それは、大人なのに子供っぽい可愛さであると、俺は断言する。
　だいたい、子供が可愛いのなんて、当たり前なのだ。
　それを、子供を見て「萌え～」とか言っている奴らは、普通極まりないのだ。
　子供なんて、子供っぽくて当然なのだから。
　それが証拠に、萌えのレパートリーの中に、「ツンデレ」なるものがある。
　ツンデレは、高校生以上の女子ならば、「ホント、素直じゃないんだから！」なんて言って、萌えの対象になり得るが、相手が子供だったら、ただのクソガキだ。
　だから本当の萌えとは、高校生以上の大人にしか存在しないスキルなのだ。
　ちなにみ、「ツンデレ」が萌えであると言う人がいるけれど、俺は正直、あまり認めてはいない。
　たとえば彼女に、「ごめん、今手が放せないから、昼食のパンを買ってきて」なんて頼んでみたとしよう。
　するとツンデレの彼女なら、「ふん、どうせついでだから買ってきて上げるけど、今回だけなんだからね！別にあなたの為じゃないんだからね！」などと言われる事になる。
　これに萌えるだと？
　その考えが間違っている事を、俺の彼女を使って証明してやろう。
「愛美、ちょっとイチゴクリームパンが食べたくなったから、コンビニで買ってきてくれ」
「うん、分かったよ。久弥くんの為に、私、頑張っちゃうよ」
　見ろ、この素直な反応。
　そしてこのみなぎるやる気。
　そしてそれは、俺の為だと言う。
　バカだから、どうして自分が買いに行かなければならないのかとか、一緒に行けばいいんじゃないかとか、全く考える事もしない。
　なんの脈絡もなく頼もうとも、喜んで買いに行く彼女。
　どうだ萌えるだろう？
　おっと、萌えている間に、彼女が戻ってきたようだ。
「ただいま～うげぇ！‥‥てへへ、コケちゃった」
「だ、大丈夫か？」
　どうやら愛美は大丈夫だけれど、買ってきたパンは愛美の下敷きになって、ぐちゃぐちゃになってしまったようだ。
　ま、まあ、こんなハプニングも、大人だったらきっと萌えるはずだ。
　高校生の俺にとっては、かなり腹立たしい結果ではあるが。

　きっと高校三年生くらいになれば、「愛美はドジだなぁ。でもパンはぐちゃぐちゃでも、味は一緒だから大丈夫だよ」なんて、爽やかに言って許せるに違いないのだ。
　流石に今の俺には無理だけれど、二年後の俺はきっと、「萌え～」とか言って、有頂天になっているに違いない。
　俺は未来の俺に希望を抱きながら、ぐちゃぐちゃになったパンを頬張り、愛美と共に学校へと向かうのだった。

愛美と初登校

　俺の通う事になっている「萌芽《ほうが》高校」に行くには、まずは家から最寄駅である「夢見駅」まで歩く。
　それから、高校の最寄駅である「萌芽駅」まで、電車に揺られる。
　そして再び萌芽駅から、我が学び舎まで少しだけ歩く事になるわけだ。
　俺はまず、近所に住む彼女「愛美」を、家まで迎えに行く。
　当然の事ながら、一時間以上早い時間にだ。
　愛美と一緒に登校するとなると、当然すんなり学校まで行けるとは思えない。
　だから早めの行動は必須だ。
　まずは当然のように、愛美はそう簡単に家から出てくる事はない。
「迎えにくるのが早すぎるから」と、思う人もいるかもしれないが、これは十時よりも早い時間ならいつもの事だ。
　俺は家の前で十五分待たされる。
　するとようやく、家から愛美が出てきた。
「久弥くんおはよう～。爽やかな朝だねぇ」
　そう言って出てきた愛美を見て、俺は驚いた。
　何故頭に花が生けてあるのだ？
　何故下半身だけパジャマのままなのだ？
　そして何故、弟の雄太《ゆうた》をつれて出て来たんだ？
　つか、雄太鼻水たらしまくって、しかもパジャマのままだぞ？
　愛美、ボケるのも大概にしろよ。
　俺は愛美の手をとると、共に家の中へ入って行く。
　愛美の両親とはそれなりに面識があるので、俺は軽く挨拶をして、家に上がった。
　まずは、弟の雄太をつかむ手を放させる。
　それを両親のいるリビングに向けてリリースする。
　すると雄太は、自らの足で、ゆっくりとそちらに向かって行った。
　まずは一つ完了。
　次に頭に挿してある花を抜きとって、玄関にある花瓶に突き挿す。
　そして適当に髪の乱れを整えてやる。
　顔の素材は良いのだから、もう少ししっかり髪を整えてあげたいが、俺にそんなスキルがあるはずもない。
　俺はすぐに愛美の手を引き、愛美の部屋へと入って行った。
　するとベッドの上に、制服のスカートが残されていた。
　俺は、それをおもむろに掴み取ると、愛美の腰に適当に巻きつけ、一気にパジャマをずり下ろした。
　うむ、これでオッケーだろう。
　俺は愛美を一回りさせて、問題が無いか確認する。
「よし、ばっちりだ」
　すると愛美は、何かを思い出したかのように、俺の声にハッとした表情をした。
　俺に何か落ち度があったのだろうか。
　パジャマと一緒に、パンツまでずり下げてしまうようなミスはしていないはずだが。
　すると愛美がポツリと言った。
「あ、お母さんに餌あげるの忘れてた」

おいおい、なんだそれ？
愛美の家は、母親に餌を与えているのか？
そんなわけがないだろうが。
「大丈夫。お母さんは自力で餌とって食えるから」
俺がそういうと、愛美はプルプルと首を横に振る。
一体なんだっていうんだ？
「違うよ。金魚のピーちゃんのお母さんだよ」
色々ツッコミを入れたくなる発言だが、ここはツッコミを入れずにいよう。
一々ツッコミを入れていたのでは、きっと学校に行けなくなるからな。
「そっか。で、ピーちゃんはどこだ？」
「ピーちゃんは死んじゃったよ。ピーちゃんのお母さんだよ」
まったくややこしいな。
「じゃあピーちゃんのお母さんは何処かな？」
すると愛美は、俺を廊下へと連れ出し、廊下の隅を指差した。
そこには水槽が置かれ、中には金魚が泳いでいた。
俺は素早く水槽に近づくと、登校中に食おうと思って持っていたロールパンを、適当にちぎって、金魚に与えてやった。
よし、これで全てオッケーだろう。
「これで大丈夫。じゃあ行くよ愛美」
俺がそう言うと、愛美は笑顔で頷いた。
「わーい。久弥くんと新しい高校だぁ」
愛美との付き合いは、正直面倒な事が多いが、こういう表情を見せられると、萌え死にそうになる。
愛美の笑顔は最高なのだ。
俺は愛美の手をとると、両親に挨拶をして、早々に家を出る。
既に、残り一時間あった余裕は、三十五分くらいに減っていた。
まずは夢見駅まで歩く。
先ほど金魚にパンを与えてしまったので、とりあえず代わりのパンをなんとかしなければ、俺はきっと空腹で死んでしまう事だろう。
俺は何故だか分からないが、愛美にパンを買いに行かせた。
しばらくすると、愛美はパンを抱えて戻ってくる。
しかし目の前でコケて、パンを押しつぶしていた。
愛美に買いに行かせたら、こうなる事は分かっていたじゃないか。
どうして俺は買いに行かせてしまったのだろう。
後悔しながらも、俺はつぶれたパンを食べながら、夢見駅へと向かった。
駅につくと、通勤時間と重なる為、それなりに人が沢山いた。
中学までは徒歩通学だったから、電車での通学は当然初めてだ。
俺たちはドキドキしながら、改札を通る。
って、通れていなかった。
愛美は閉まる改札機の中でオロオロしていた。
見ると手には、ペンケースが握られていた。
俺は改札の中から愛美に声をかける。
「愛美！それペンケースだから！」

俺がそう言うと、愛美は舌を出して自らの頭をコツっと叩き、今度はちゃんと財布を取り出して、改札を通ってきた。
相変わらず、こいつのドジは治らないようだ。
しかし、治ってもらっても困る。
このまま成長したら、きっとこいつは、史上最強の萌えキャラになれるのだろうから。
俺はそれを期待して、愛美と付き合っているのだからな。
そんな事を考えながら、俺は愛美の手をとると、一緒に電車に乗り込む。
乗客がいっぱいで、一歩も見動きできない。
すると愛美が、真っ赤な顔で言ってきた。
「久弥くん、こんなところでお尻さわらないでよぉ」
なに！こんなところじゃなければ良いのか！
って、違った。
俺は触っていないぞ！
と言う事は、痴漢って奴だな。
俺は素早く愛美のお尻の辺りに手を入れて、そこにあった手を掴んだ。
「おら痴漢野郎、俺の彼女に何してやがる！」
そう言って掴んだ手を上げると、その手の持ち主は、かなりいかついおっさんだった。
俺は手を放し、一瞬たじろぐ。
でも、俺がちゃんとしないと、運命は俺たちを、深淵の底につれて行く事になるだろう。
即ち、どうなるかわからない。
そんな事を思って躊躇していると、愛美が何やらそのおっさんに話しかけていた。
「お客さん、おさわり禁止なんだよぉ。追加料金五万円いただきます」
おい愛美、一体何を言っている。
この微妙な状況を金で丸く収めるつもりか？
だけどこのいかついおっさんが、そんな金払うわけないだろうが。
って、いきなり財布取りだして、金出してるよ。
まあ、普通に考えれば、示談って奴だな。
しかもおっさん、ちょっと赤い顔して、愛美の萌えパワーに絆《ほだ》されていやがる。
やはりそうだ。
俺の彼女は、大人にとっては最強の萌えキャラなんだ。
おっさんは何かに取り憑かれたように、あっさりと五万円を愛美に渡した。
しかし、愛美と一緒にいて、物事が順調に進むなんて、そうそうある事ではない。
きっと何かが、これから起こるに違いない。
すると電車が、少し荒いブレーキ操作で、一気にスピードを緩めた。
乗客は前に体を持っていかれる。
俺はなんとか吊革を掴み、コケるのを回避したが、うっかり愛美と繋いでいた手を放してしまった。
「しまった！」
愛美の体は電車前方に飛ばされ、先ほどのおっさんに頭突きをかましていた。
「あ、大丈夫ですか。すみません。おでこ赤くなってますね」
愛美はそう言って、おっさんのおでこを、ハンカチか何かでさすり始めた。
するとおっさんのおでこから、血がダラダラと流れだす。
おい、何もってるんだ？

　ハンカチじゃないのか？
　俺が覗きこむと、手には生け花用の剣山が握られていた。
「おい愛美、それハンカチじゃねぇから！」
　俺がそう言うと、愛美は驚いて手元を確認する。
「あっ、間違えちゃったｗてへっ」
　って、そんなんで許されるわけないだろうが。
　おっさんが、悪役レスラーみたいに流血しまくりだっつぅの。
　結局、先ほど貰った五万円を、慰謝料として返す事で、なんとか許してもらえた。
　さっきまで頬を赤く染め、穏やかな表情をしていたおっさんも、別れる時には鬼がのりうつったような顔をしていた。

自己紹介

　萌芽駅に着くと、俺は愛美の手を引いて、無事改札を出た。
　今度は、手に持っているものをしっかり確認していたので大丈夫。
　それでも油断してはいけない。
　俺の彼女は、これだけツラが良いのに、誰もが付き合いたくないと言った女だ。
　このまま無事に、初めて通う高校にたどりつけるとも思えない。
　今更だけれど、よくもまあ受験に合格したものだ。
　当然、受験当日も、俺がタクシーで送り届けたわけだけど、それでも試験や面接では、色々とドジを繰り返した。
　まあ受かったのは、試験官や面接官が、大人であったからだろう。
　とにかく俺は、愛美の手を放さず、慎重に歩みを進めた。
　周りには、沢山の萌芽高校の生徒が、同じように登校している。
　と言っても、手を繋いで登校するような生徒はいない。
　今日は入学式なので、皆同じ一年生だから、当然と言えば当然か。
　入学式早々に、ラブラブ光線出して登校していたら、悪い意味で目立ってしまうからな。
　だけど俺たちからは、そんなものは出ていないはずだ。
　ある意味、愛美の飼い主である俺が、リードで繋いでいるようなものだから。
　しばらく歩くと、学校が見えてきた。
　どうやら今日は、無事にたどり着けそうだ。
　一時間の余裕を持って家を出たが、明日からはもう少し少なくても大丈夫かな。
　愛美もどうやら、高校生になって少しはマシになったみたいだ。
　喜んでいいのか、それともガッカリすればいいのか。
　なんにしても、今日のところは良かった。
　そう思って、俺は一瞬気が緩んでいたのかもしれない。
　気がつくと、繋いでいたはずの手に、愛美の手は握られていなかった。
　俺は驚いて辺りをキョロキョロと見回す。
　きっとこの時の俺の顔は、エロ本を買おうとしたら友達が周りにいて、どう言い訳しようか考えている時のようだったに違いない。
　そんな顔だったからか、それとも他に何か理由があったからなのか、そんな事は俺の知るところではないが、周りの生徒たちは、何故か俺から離れて歩いていた。
　そして道を開けるように、誰もいない先には、俺の彼女が草むらの中でしゃがんで、何かをしているようだった。
　まさか、ノグソか？
　あれほどノグソは駄目だと言っていたのに、（本当はそんな事、言ってはいないが）まったく、学校まで我慢できなかったのか。
　そう思って急いで近づいていくと、しゃがむ愛美の前に、何やら猫がいるのが見えた。
　なんだよ、脅かすなよ。
　俺は猫を脅かさないように近づいて、愛美の肩に手を乗せた。
　愛美は嬉しそうに振り返ると、小さな猫を一匹持ちあげて見せた。
　どうやら生まれて間もないようで、でかいドブネズミよりも小さな猫だった。
　この大きさだと、逆にネズミに食われそうだ。

まっ、人も生まれた時は小さいし、子供とはそんなものだ。
愛美は、そんな猫と一緒になって、転げまわって遊んでいた。
俺はしばらく、猫と戯れるそんな彼女を眺めていた。

結局、俺たちは入学式に少し遅れていた。
時間的にはギリギリ間に合っていたが、俺はウンコを踏んで臭かったし、愛美も制服が泥だらけで汚れていた。
俺が愛美を探してキョロキョロしていた時、みんなが俺を避けるように歩いていたのは、どうやら俺が、ウンコを踏んでいたからだったようだ。
顔が怖くて避けられていたわけではなかったので、ひとまず良かったと言うべきだろう。
そして愛美も、ノグソをせずに（本気でそんな心配をしていたわけではないが）、猫と泥だらけになって遊んでいただけだから、これから出会うクラスメイトから避けられるような事はないはずだ。
俺は踏んだウンコを念入りに落とし、愛美は泥をできる限り拭きとってから、入学式に参加した。
入学式の後、俺は掲示板に張られている、クラス割表を確認した。
俺と愛美は同じクラスだった。
なんとなくだが、俺は当然こうなると思っていた。
何故なら、愛美には俺が必要だから。
とにかく、俺は愛美の手を引いて、指定された一年梅組の教室へと入っていった。
って、梅組ってなんだよ。
幼稚園のクラスじゃないんだから、普通に数字かアルファベットにしておけよ。
俺はブツブツと喜びを口にしながら、教室に入っていった。
教室には、これからのクラスメイトが何人かいた。
だがまだ知らない人達だ。
挨拶もなく、俺と愛美は適当な席につく。
と言っても、適当に座ったわけではない。
なるべく後ろの方の席を選んだ。
理由は簡単だ。
愛美が前の方の席に座ったら、きっと何かしらのトラブルが起こるに違いないからだ。
「久弥くん、お弁当食べる？」
言ってる傍から、愛美は何故か持ってきていた弁当を食べていた。
「いや、俺は大丈夫だよ。さっきパン食ったから」
まったく、愛美の親は何をしているんだ？
今日は入学式とホームルームだけだって、知らないのだろうか。
弁当が必要なのは明後日からだろうが！
「そっか。そう言えばそうだね。私朝起きるの遅かったから、朝ごはん食べられなくて」
って、朝ごはんかい！
つか俺は、家の前で十五分も待たされたぞ。
もしかして、俺が迎えに行った時に起きたとかって話じゃないだろうな。
「朝ごはんね。でも流石に今弁当食べるのはマズイから、早く食っちまいな」
俺がそう言うと、愛美は首を傾げた。
「なんで？ご飯食べないと、人間死んじゃうし、ゆっくり噛まないと、消化に悪いんだよ？」
愛美とは、こういう奴なのである。

別に、空気が読めないわけでも、故意に人に迷惑をかけるわけでも、勉強ができないわけでもない。
ただ、バカで阿呆でボケまくりでどんくさくて、自分に素直なのだ。
まっ、その素直さを表に出すのは、俺に対してだけなわけだが。
冷静に考えてみれば、俺たちの生活には疑問が多い。
どうして、指定された時間以外に、教室で弁当を食べてはいけないのだろうか。
どうして、朝の決められた時間に登校して、時間通りスケジュールをこなさなければならないのか。
人間は本来、目が覚めたら活動を開始して、お腹がすいたら食べて、それで良いはずだ。
空腹を我慢すれば、お腹にガスがたまったり、胃液で胃の中を傷つけたり、健康に良くない。
社会に出れば、そういった我慢と戦わなければならないから、それを若いうちから学習する為とか言うけれど、まったくもって意味がわからない。
大人になったら、嫌でもそういった生活になるのなら、若い今の間だけでも、健康に気をつけた生活をさせて欲しいものだ。
反面、タバコや酒は、健康に良くないからと禁止する。
学校が、社会に出てからの予行演習ならば、タバコや酒の授業があってもいいはずだ。
本当に世の中は矛盾だらけだ。
「そうだな」と、俺は笑顔で、愛美にこたえていた。
それから間もなく、気がつくと全ての生徒がそろったようで、席は全て埋まっていた。
近くに座るクラスメイトと話をする者もいたが、多くはとりあえず、様子をうかがっているといったところか。
俺が他の生徒たちを観察していると、教室に、担任の先生らしき人が入ってきた。
三十代前半の独身に見える、ジャージ姿の先生だった。
「おいおい、今時ジャージは無いだろう」と思ったが、堅苦しい先生では無さそうだし、俺の見る第一印象は悪くない。
だが問題は、愛美と上手くやっていける先生かどうかだ。
愛美はまだ弁当を食べ続けている。
これに対して、どういう対応をとる？
俺が息をのんで見守っていると、先生が愛美の弁当に気がついた。
「ん？何やら美味そうな臭いがするが、弁当を食べている奴がいるな」
先生の第一声は悪くない。
いきなり否定するところから入ると、愛美は萎縮してしまうから。
だけど、言い方は嫌味にも取れる。
この後が肝心だ。
先生の言葉に、生徒たちの多くが、弁当を食べる愛美に注目した。
愛美は注目されてオロオロし始める。
俺の方を見て、どうしたらいいか助けを求めているようだ。
先生よ、早く何か言ってくれ。
「はいみんな注目～」
先生は、弁当を食べている愛美を、スルーする方向のようだ。
生徒たちもそれを悟って、視線を先生の方に戻す。
「まずはみんな、萌芽高校入学おめでとう」
先生が、挨拶を始めた。
まずは、俺としても、愛美にとっても、良い結果と言えるだろう。

愛美も先生の声に、弁当を食べるのを中断して話を聞いている。
人の話に注目しなければならない時に、愛美は食事ができる人間ではない。
ちゃんとわきまえている子なのだ。
だったら、「昼休みでもない時間に弁当食うなよ」って言う人もいるだろうが、その辺りは、人それぞれの価値感にある「誤差」というやつだ。
まあとにかく、この先生の此処までの行動は、上々の出来と言えるだろう。
横に座る愛美を見ると、先生に注目する目は、悪くなかった。
しばらく先生の話が続いた後、自己紹介タイムがやってきた。
出欠も此処で取るらしいから、どうやらばっくれる事はできないようだ。
俺もそうだが、愛美も人の視線の中で喋るのは苦手だし、自己紹介は正直気が重い。
「じゃあまず、有沢！」
先生の言葉に、愛美の向こう側、一番後ろの席に座る男が立ちあがった。
そして自己紹介を始める。
「俺の名前は有沢敏也《ありさわとしや》。地元の萌芽第一中学出身。風呂から出る時は、必ず右肩上がりを意識している。よろしく！」
出席番号の順番に、クラスメイトが自己紹介をしていく。
最初の有沢とかいう奴以外は、名前を言った後、「よろしくお願いします」だけを言って、座ってしまう奴ばかりだった。
高校の自己紹介なんて、普通こんなもんだろう。
最初の有沢ってのが、少し変わっていると言う事だ。
だが、大人の自己紹介だったら、決して名前だけでは終わらないはずだ。
そう考えると、此処までは、有沢だけが大人で、他は子供だと言う事もできる。
それは、本当の萌えを理解できるのもまた、有沢だけど言う事だ。
「じゃあ次は、神田！」
俺の名前が呼ばれた。
俺はゆっくりと立ち上がる。
さて、どういう自己紹介をするべきだろうか。
もしかしたら、これから一年、或いは高校での三年間が、此処で決まると言っても過言ではないだろう。
此処は一切の手抜きができるところではない。
俺は意を決して、自己紹介を始めた。
「俺は、神田ひしゃや‥‥」
噛んだ‥‥
台詞を噛んでしまった。
「神田だけに、噛んだというわけか」
先生がそう言うと、冷たい笑いが教室内に湧き起こる。
こら先公、一々オヤジギャグで説明するな！
恥ずかしいだろうがコノヤロー。
しかし此処で動揺してはいけない。
俺はなんとか自己紹介を続けようとした。
すると隣で愛美が、笑顔で暴言、いや、応援をしてくれた。
「頑張れ～久弥く～んｗ」
今の俺には、それは応援になっていないのだよ。

少しイラっときた。
俺はまだ、愛美のこういうところに、萌える事ができないようだ。
それは、俺がまだまだ子供な証拠でもある。
だから、これ以上の自己紹介も必要あるまい。
「神田久弥です。よろしくです」
俺は素早くそう言いなおして、俯き加減に席についた。
ふぅ～これくらいなら、みんなそのうち忘れる事だろう。
俺の高校ライフは、この時点では、きっと致命的な傷は負っていないはずだ。
俺がそう安心して顔を上げると、先生が次の生徒の名前を言おうとしていた。
「では次は‥‥クズ‥‥クズ、タツアイミさん？」
おいおいだれだよそれ。
教え子の名前くらい、しっかり頭にいれて来いよ。
この給料泥棒教師が。
俺はゆっくりと、隣を見た。
愛美がニコニコしながら、ゆっくりと立ち上がった。
何やら時間の流れがゆっくりに感じる。
愛美は心の中で、本当は少し悲しんでいるのだろう。
だけどその表情には、そういった感情は微塵も無い。
強いなと俺は思った。
「くず、くず、くず‥‥です‥‥」
っておい！本人あがりまくりだった。
俺は咄嗟に、愛美を助ける為に立ちあがった。
「あ、この子、九頭竜愛美《くずりゅういつみ》って言います」
しまった！ついうっかりやっちまった。
俺は少し動揺しながら、再び俯き加減で席に着いた。
こんな事をすると、きっとこれから、からかわれるネタにされるに違いない。
すると愛美が、俺の心に追い打ちをかけてきた。
「あ、はい。今のが私の彼氏です」
愛美はそう言いながら、俺を指差して赤くなっていた。
俺は照れくさい気持ちと同時に、正直少し腹が立った。
こういう事を、平気で言える女の子は、今の俺には許容できないからだ。
きっと大人の男なら、嬉しい事を言ってくれると喜べるのかもしれない。
そういう人なら、愛美は萌えの対象になり得るのだろう。
高校生になったら、いきなり大人になれるとは思っていなかったが、自分自身にも、俺は少し腹が立っていた。
でも、俺がこの時どう思おうとも、愛美がどういう気持ちだったとしても、クラスメイトからみれば、ただのバカップルだ。
こうして、俺と愛美の関係は、入学式早々、クラス全員の知るところとなった。

クラスメイト有沢

　ホームルームが終わり、最後の礼をして、皆それぞれに家路に向かう。
　結局、どんなクラスメイトがいたのか、教師の名前すらも、俺は覚えていなかった。
　そんな中、唯一名前を覚えていたクラスメイト、有沢が俺に話しかけてきた。
「やっほぃ！お前どこ中から来たんだ？」
　さっきは唯一の大人かと思っていたが、こういう声のかけ方は、やはり同年代か。
　大人の方が良いと思う反面、やはり本音としてはこちらの方が安心するな。
「ああ俺か、俺は夢見中だ」
　俺がそう言うと、有沢の表情が笑顔に変わった。
「うほ！知ってる知ってる。サッカーの試合で、一回行った事あるわ」
　まあ同じ学区だから、部活の試合か何かで来たのだろう。
　俺は帰宅部だったから、他校の生徒との交流はなかったが。
「そっか。まあよろしく」
　俺は、中学時代から、特に友達が多かったわけでもないし、誰とでも仲良くできるほど器用でもない。
　ぶっちゃけて言えば、普通だ。
　だから話しかけられても、特に話す事が無い相手とは、話が弾む事はない。
　相手もどうやら同じで、特に俺には興味が無さそうだった。
　なるほど、本当の目的は、愛美か。
　有沢は、食べ終わっていなかった弁当を、再び食べ始めていた愛美を見ながら、再度話しかけてきた。
　って愛美、まだ食ってるんかい！
「彼女、可愛いね。恋人と同じ高校に行くなんて、仲いいんだな」
　有沢がそう言うと、愛美は食事を続けながら、少し照れた様子で会話に参加する。
「久弥くん、私可愛いって言われちゃった」
　愛美の口の中には、沢山のご飯が入っていたが、喋ったおかげで、少しだけブツが口からこぼれ出ていた。
「愛美、口の中の物が無くなってから喋ると、再び口に入れなくていいから楽だぞ」
　俺がそう言うと、愛美は「久弥くん天才」とか言って、再び食べるのに集中していた。
「ふ～ん、仲が良いって言うか、なんか家族みたいだな」
　有沢の言葉から察するに、おそらく恋人ってよりも、妹みたいに見えるとか、そういった事が言いたかったのだろう。
　確かに、俺と愛美は、どちらかというとそんな感じだ。
　それはきっと、俺が愛美の事を本気で好きではないからだろう。
　いや、好きなのは好きだ。
　好きじゃなければ、いくら先物買いとか言っても、付き合っていく事はできないと思う。
　そうだな、先物買いの意味を正確に表すなら、俺はこれから、ドンドン愛美の事を好きになっていくって事かもな。
　俺は無意識のうちに愛美を抱きしめ、「やらんぞ！」と、有沢に言っていた。
　俺の愛が、いずれ恋に変わる事は、確実だから。
　俺の行動に、有沢は苦笑いしていた。
　そらそうか。
　目の前でいちゃいちゃされたら、対応策は苦笑いくらいしかあるまい。
　それにしても、有沢が話しかけてきた真意はどこにあるのだろうか。

　別に、俺たちがいちゃいちゃするところを見たかったわけでもないだろうし、愛美とお近づきになりたかったわけでもなさそうだ。
　俺が疑問の目で有沢を見ていると、有沢は、話しかけてきた真意らしき事を話し始めた。
「その弁当美味そうだな」
　って、もう一つ関係無い話を挟んでくるとは、有沢はなかなかやるな。
「あ、食べる？」
　愛美が笑顔で、有沢に弁当を勧めていた。
　すると有沢は、少し顔が引きつっていた。
　そらそうだろうな。
　さっき愛美が口に入れた米が、色々なところに飛び散っていたからな。
　そんな思ってもいない事を言った、有沢が悪い。
　でも仕方ないなぁ〜、助けてやるか。
　俺は愛美が差し出していた弁当を受け取り、適当に口に放り込んだ。
「うん、美味い」
　まっ、俺の彼女だし、さっき言われた通り、家族みたいなもんだからな。
　俺は全く気にならない。
　それを見た有沢は、ようやく無駄話の愚かさを悟ったようで、話しかけてきた本題らしき事を口にだした。
「神田、というか彼女の方、九頭竜さんは、どうしてこの高校に来たんだ？」
　ふむ、この質問は、どう判断したら良いのだろうか。
　俺たちが超賢そうに見えるのに、萌芽高校という超平均的な高校に来た事が不思議だとでも思ったのだろうか。
　確かに、俺にしても愛美にしても、ここ萌芽高校は、学力相応の高校ではない。
　俺は内申書も含めて、トップクラスの高校に行く事も可能だったし、学力だけなら愛美は俺以上だ。
　ただ、愛美は内申点が悪かった。
　テストでもドジを繰り返し、実際の知識相応の点数は、ほとんど取った事がない。
　そんな愛美が、それなりの余裕を持って合格できそうな高校が、たまたま萌芽高校だったわけだ。
　俺は、そんな愛美に合わせて、この高校を受験した。
　中学の時の教師も、両親も、マジでビックリしていたな。
　もったいないと、必死に説得されたりしたが、勉強なんて何処の高校でもできる。
　要はやる気があればいいだけだ。
　そんなわけで、どうしてと聞かれても、その程度の理由しかなかった。
　俺は素直にそう言った。
「二人で合格できそうな高校だったからだよ」
　すると有沢は、気味が悪いくらいに、ニヤッと笑みを浮かべた。
　なんだ？何かあるのか？
　俺はドキドキしながら有沢を見つめていたが、有沢は、俺のこたえに対する返事をするつもりはないようだった。
　その代わりに言った言葉は、
「この高校の名前は、萌芽だよな」
　この一言だけだった。
　これが何を意味しているのか、俺に分かるはずもない。
　実はこの学校名に、何か意味があるのだろうか。

ただ単に地名からつけた名前だと思うが、仮に意味があると考えれば、萌えを目指す若き人々の集う所とか、そんな意味だろうか。
そんな高校あるわけがない、俺は苦笑いした。
しかしこの考えが、あながち間違いではなかった事を、後日俺は知る事になる。
そして俺たちのやり取りを、廊下からひそかに見ている人物がいる事を、この時の俺が気づく由も無かった。
有沢は、軽く手を挙げて、「じゃあな」と言って、教室から出ていった。
愛美はようやく、朝食である弁当を食べ終えていた。
時計はそろそろ、十二時になろうとしていた。

二度目の登校、おかしな愛美

四月九日の月曜日、俺たちは気分を新たに、萌芽高校を目指して出発していた。
今日は実に順調で、此処まで大きなトラブルはない。
愛美を迎えに行くと、愛美は既に家の前で待っていた。
何故か弟の雄太が、愛美の隣にパンツ一丁で立っていたが、問題はそれだけだった。
俺は、すぐに雄太を家の中にリリースすると、愛美と手を繋いで夢見駅へと向かった。
今日からは、学校の購買部も学食も機能しているはずで、特に何も買う必要はない。
家を出る時間も、入学式の日より三十分近く遅いので、朝食も食べてきている。
それなりのお金も持ってきているので、何かあっても対応できるだろう。
俺は、繋ぐ手を大きく振って、駅までの道のりを歩いていった。
夢見駅につくまで、会話も無かったが、トラブルも無かった。
会話があまり無いのはいつもの事だが、トラブルが無い事は珍しい。
お互い、無言のコミュニケーションをしていた事が良かったのかもしれない。
俺は無言で、歩く愛美の笑顔を見ていた。
そんな俺に気がついて、愛美は終始笑顔だった。
たったそれだけのコミュニケーションが、愛美の他への行動を抑えていたのだろうか。
なんにしても、普通にしている愛美との登校は、普通に青春といった感じだった。
電車の中でも、俺たちは無言で、そしてトラブルも無かった。
ここまで来ると、どういうわけか、俺は不安になってきた。
トラブルが無い事は喜ぶべき事だと思うが、反面萌える事もない。
ただ、普通に可愛い彼女と登校しているだけだ。
いや、普通じゃない気がする。
そうだ、俺たちは此処まで、一言も言葉をかわしていない。
普通の恋人同士の登校なら、多少なりとも会話があるだろう。
俺たちも、先日までは当然そうだった。
確かに会話は少ないが、全く喋らないなんて事は無かったはずだ。
俺は疑問に思い、愛美に尋ねた。
「愛美、今日はなんだか、いつもよりも大人しいね」
すると愛美は、少し苦笑いのような笑顔を浮かべるだけだった。
やはり、これは何かある。
俺は、精一杯の優しい笑顔を作って、愛美に言った。
「もし何かあったら、俺には言っていいんだよ。大丈夫。俺はどんな時も、愛美の味方だからね」
すると愛美は、一粒涙を流して、俺を見つめて言った。
「やっぱり、こんなの私じゃないよね。久弥くん、嫌だよね」
正直、つつましい古き日本の女性ってのも、俺は悪くないと思っている。
だけどそれは、本人がそう望み、無理が無い場合だ。
トラブルが起こらず、ドジやボケも少ない今日の愛美は、確かにつつましい可愛い女性に見えなくはないが、これが決して本質ではない。
それにやはり、萌えは捨てがたい。
とにかく、理由をハッキリ聞かない事には。
もし本人が望んでいるなら、協力もやぶさかではないから。

まあおそらく、違うだろうけれど。
「俺は、愛美が愛美で、そうしたいってなら、否定しないし受け入れるよ。だけどきっと、愛美はそうじゃないよね。だって泣いてるし、今日の愛美はなんだか辛そうだから」
俺がそう言うと、愛美は俺の胸に顔を埋めてきた。
満員電車の中なので、最初からそれに近い状態ではあったが、俺は焦った。
心《しん》の臓《ぞう》が、ドキドキと鳴いている。
ぶっちゃけ、家族のような付き合いをしているから、これくらいどうって事も無いのだが、状況が俺を盛り上げていた。
だが、俺の臨戦態勢も、すぐに解除される事になる。
愛美がマシンガントークを始めたから。
「あのね、入学式の日にね、担任の田中先生からね、うちに電話があったみたいなの。それでね、ホームルーム中にお弁当食べていた事をね、お母さんに言ったらしいの。でね、お母さんにね、どうしてそんな事したの？って聞かれて、朝ごはんだから食べたのっていったら、それはちゃんと食べないといけないよねって、お母さんも納得したの。でもね、先生にとってはね、それは面白くない行為だから、やめて欲しいとか言うの。更にね、あなたの娘さんは、ちょっと頭が弱いところがあるから、そのあたり治さないといけないとか言われたらしいの。でね、お母さんもそんな事知ってるから、治せるもんなら治しているわよって言い返したらしいの。そしたらね、治す良い方法があるからって言われたみたいなの。でね、その方法がね、とにかく喋るなって事だったの‥‥」
なるほど、確かに愛美は、喋った時にこそ、色々とドジをかます。
現に、今喋りまくってる間、隣の人の足を踏んでいた事にも気がつかなかったもんな。
隣の人、ちょっと怒って愛美の事睨んでいるし。
俺は軽く、その人に頭を下げた。
それにしても、担任の田中だったか、よくあれだけの時間に、愛美の本質を見抜いたな。
喋らなければ、八割がた問題を抑え込む事ができる事、どうして分かった？
俺ですら、言われて納得した感じなのに。
流石に先生といったところか。
いやしかし、中学時代の先生には、何も分からなかった気がする。
俺はなんとなく、昨日有沢が言っていた「萌芽だよな」という一言を思い出していた。
この後結局、愛美はいつもの愛美に戻っていた。
それでも、初日よりは順調に学校についた。
電車のドアに挟まれ、通学路で二回転びそうになり、街路樹にぶつかりそうになっただけで済んだ。
その全てにおいて、俺が助けたり、未然に防いだわけだけれど。
つか俺がいなかった時、愛美はどうやって生きてきたのだろうか。
まあ一人だったら、そうそうドジもしないのかな。
誰とも喋る事がないから。
だけどそれって、どうなんだろうか。
一人っきりで、問題無く過ごす毎日と、ドジやボケがあっても、誰かと一緒に過ごす日々。
どちらがいいのか分からないが、少なくとも、愛美は俺と一緒の方がいい。
いや違うな。
俺は、愛美と一緒がいい。
今はまだ、ムカつく事も多いけれど、それでもこれだけ、愛美が好きだから。
そんな事を考え、ニヤニヤしながら、俺は愛美と共に教室に入った。

愛美との出会い

俺と愛美の出会いは、中学一年生の入学式の日だった。
その日講堂に並べられた椅子を、盛大に倒しまくっている女がいた。
三年前の愛美だ。
苦笑いを浮かべながら、「ごめんなさい、ごめんなさい」と、みんなに謝っていた。
その姿を見た時、こんな可愛い子がいるんだと、嬉しい気持ちになったのを覚えている。
中学は、四つの小学校の生徒が集まる公立中学。
愛美は別の小学校出身で、近所に住んでいながら、全く知らない子だった。
クラス割表を見て教室に行くと、そこに愛美が座っていた。
俺は心の中でガッツポーズをした。
だけど次の瞬間、何か違和感を覚えた。
その原因は、一番後ろの席に座る愛美の周りに、誰も生徒が座っていない事だと、すぐに分かった。
それでも俺は、むしろラッキーだと思って、愛美の隣の席に座った。
その瞬間、隣から筆箱が飛んできた。
どうしたら、筆箱を飛ばす事ができるのか、俺には理解できない。
でも確かに、筆箱が飛んできたのだ。
俺は筆箱の直撃を受けて、頭に激痛が走り、目の前には星が沢山見えた。
そんな俺を見て、半分くらいの生徒が、ニヤニヤとしていたのが目に入った。
隣で愛美が、俺に必死になって謝っていた。
ああ、なるほど。
そういう事なのだと、俺は悟った。
この子がドジで、周りにいるとそのとばっちりをくらう事を、同じ小学校出身の人たちは知っていたのだと。
中学生の頃くらいまでは、人の意見や考えに影響される事が多い。
それは、実際に中学三年間を過ごしたばかりの俺には、ハッキリと言える。
友達が嫌いだと言えば、自分も嫌いだと言い、みんなから人気のある女子は、みんな好きだと言う。
俺もきっと、その例外ではなかっただろう。
だけどこの時、俺は愛美が嫌われているなんて思いもしなかった。
そこまで酷いドジっ子だとも、考えていなかった。
だから俺は、「大丈夫だよ。俺、神田久弥。君の名前は？」って、聞いていた。
すると愛美は、とびきりの笑顔で、「九頭竜愛美、デス」とか言って、俺を殺す勢いの頭突きをかましてきた。
ただ単に、立ちあがった勢いでつまずいて、こちらに倒れてきただけなんだけど、一瞬マジでデスられるのかと思ったよ。
その後、男女出席番号順に席を移動させられたけれど、俺と愛美は隣同士だった。
当然、その日以降も、俺は愛美のドジやボケのとばっちりをくらいまくった。
ある時はバケツの水をかぶり、ある時は弁当を無駄にした。
正直何度も、関わるんじゃなかったと思った事もあったけれど、謝ってくる愛美の顔を見ていたら、今日だけは我慢するかという気持ちになっていた。
そんな事が続いて、いつの間にか俺は、愛美のドジやボケになれてきていた。
と言うか、いくらか対処の仕方も覚えて、愛美も俺の前なら、ドジをしそうになっても、助けてくれるから大丈夫だと、感じているようだった。

　そんなある日、上級生から俺は呼び出しをくらった。
　行ってみると、どうやら俺と愛美が仲良くしているのが、面白くないようだった。
　要するに、愛美の事を気にいっているから、お前は手を引けと、脅しをかけられたわけだ。
　まあ別に、俺は愛美と付き合っているわけでもないし、嫌いじゃないけど問題も多かったから、俺は関係を否定して、先輩を安心させてあげた。
　するとそれから間もなく、先輩は愛美をデートに誘った。
　俺は勝手に、愛美は絶対にデートなんか行かないと思っていたので、なんだか漠然とショックだった。
　後から聞いた話によれば、俺の名前を出して、うまく誘いだしたようだったが、この時の俺が知るはずも無かった。
　で、後日そのデートが、失敗に終わった事を聞いて、俺は安心していた。
　それは俺が、愛美の事を好きになっているのだと、自覚させられるものであった。
　だけど、決して付き合いたいとか、そんな感情はわかなかった。
　理由は、当然ながら、面倒くさい事になりそうだったから。
　他人のバカは許せるけれど、身内のバカは許せない、そんな気持ちだった。
　そうは言っても、気にかけていたら、いつの間にかできの悪い妹を助けるように、俺は色々とフォローしていた。
　そして愛美も俺に、心を開いてくれるようになっていた。
　中学三年になった時、友達が俺に言ってきた。
「ゴミクズってさ、ホントムカつくよね」
　ゴミクズってのは、誰が付けたのか分からないが、愛美のあだ名である。
「愛美《いつみ》」を別の漢字にすると「五美《いつみ》」になり、それをゴミと読んで、九頭竜のクズを合わせた仇名だった。
「あいつアレでも中学生か？神田も大変だろｗなんだか知らないけど、いつも迷惑かけられて。神田、ゴミクズまみれってか！ははは！」
　友達は知らなかった。
　俺が、嫌な気持ちだけで、愛美のフォローをしているわけじゃない事を。
　そして、その友達の言葉と笑いは、俺を凄く嫌な気持ちにした。
　友達が、俺の好きな子を、軽蔑したから。
　俺は決心した。
　中学で彼女とか、からかわれる原因にもなるし、正直はずかしい。
　それでも、友達が愛美の事を悪く言うのを聞くよりはマシだと。
　俺は放課後、愛美を近くの公園に連れていった。
　この頃の俺たちは、二人で行動するくらいは普通にあったので、何も問題は無かった。
　そこで俺は言った。
「愛美、俺、お前の事、たぶん好きだ。今は、たぶんとしか言えない。俺自身、よく分からないから。だけど一つだけ絶対言える事がある。お前が笑ってるのを見るのは大好きだし、高校生になったら、きっと好きになると思うし、大人になったら、もっと好きになると思う。だから、俺の彼女になってくれ」
　一つだけと言いながら、全然一つではなかったけれど、俺はこの時の自分の気持ちを、包み隠さずぶちまけた。
　すると愛美は、泣いていた。
「私、みんなから嫌われて友達いないし、いつもドジばかりでみんなに迷惑かけてるし、それを神田くんがいつも助けてくれて‥‥私は、神田くんの事、大好きだよ。でも付き合ったりすると、もっともっといっぱい迷惑か

けちゃうし、きっと私バカだから、それに気づかないかもしれないし、それが怖いよ」
　俺はこの時思った。
　愛美は、愛美なりに、当然苦しんでいたんだなと。
「気にするな。大人になれば、ドジな女もドジっ子属性とか言って、萌えの対象になるんだ。お前は萌えっ子の超優良株なんだよ。俺はお前の将来を「ゴミクズ」と呼ばれている超安値の今、買っておきたいんだよ。その為には、多少のリスクも背負わなければならないのが投資ってもんだ。俺は全てを納得している。安心しろ」
　今考えると、俺もわけのわからない事を言ったと思うが、こんな適当発言に、納得してしまう愛美も愛美だ。
「うん、分かったよ。将来は立派なドジっ子になるよ」
　愛美はそう言って、俺の彼女になった。

ツンデレ？雪村冷子

　朝のホームルーム、俺は担任の田中を睨み続けていた。
　いくらドジやボケを治すとは言っても、喋るなってのは無いだろう。
　母親が納得しようとも、それは先生の言う事ではない。
　その子の良いところを認め、個性を尊重し、教育するのが先生のはずだ。
　そう思って先生を見ていたわけだけれど、先生は俺の視線を気にする事もなく、すぐにホームルームを終了していた。
　昨日、悪い先生ではないと思わせた事を考えても、もしかしたら田中は、ただ者ではないのかもしれない。
　俺は恐怖に打ち震えながら、出ていく田中を見送った。
　すると直後、一番廊下側の一番後ろの席に座る、少し面倒くさそうな女子が、俺に話しかけてきた。
「あの、隣に座る神田くん、ちょっと話があるんだけど。あ、一応言っておくけど、別にあなたと話がしたいから、話しかけてるんじゃないんだからね」
　‥‥えっと‥‥ツンデレの委員長でも目指しているのだろうか。
　だとしたら、この女はまだまだだな。
　ぶっちゃけ、全く萌えない。
「ああ、何？俺も別に話したいとは思わないけど」
　俺は嘘がつけないから、正直に対応する。
「あら、私のツンデレに萌えないなんて、あなた人間じゃないわね」
　おいおい、もしお前の言う事が正しかったら、世の中の九割以上は、人間じゃない事になると思うぞ。
「お前のどの辺りに萌えればいいか、説明を希望するよ」
　ツンデレなんてそもそも認めてはいないが、最悪ツンデレを萌えとして認めたとしても、こいつのはありえない。
「私の事をお前と呼ぶなんて、やけに馴れなれしいわね。私には、雪村冷子《ゆきむられいこ》って名前があるのよ。ちゃんと冷子って呼んでくれるかしら」
　なんだこの女、ツッコミどころ満載だな。
　どこにでもいるバッタモンのツンデレかと思いきや、属性はボケ属性だったか。
「じゃあ、お前のどの辺に萌えればいいか、説明を頼む」
「そうね。あえて言えば、この足かしら」
　こいつ、なかなかやる。
　性格的なところに萌え要素があるような事を言っておきながら、肉体的なところをアピールしてくるとは。
　しかも足って、かなりマニアックだぞ。
　普通の人なら、足というよりは、太ももとか、絶対領域を指定してくるはずだ。
　しかしこいつが指差しているのは、膝小僧。
　少しすりむいていて、バンソウコウが張ってある。
　張っているバンソウコウも、百円ショップで買ってきたような、なんの飾り気もない普通のものだ。
　くっ、確かに、少し萌えを感じてしまった。
　そして極めつけは、結局俺が「お前」という言葉を使っているにも関わらず、何事も無かったようにスルーするボケ、こいつは本物と言わざるを得ない。
「わ、分かった。確かにお前は萌え要素を持っていると言えるだろう。話を聞こうではないか」
「分かってもらえればいいのよ。と言うか、最初からちゃんと聞きなさいよね」
　またスルーした。

もしかして天然だろうか。
「一応言っておくけど、天然ものより、養殖ものの方が、冷子は好きなのよ」
ほう、この女、遠まわしに冷子と呼ぶようにアピールすると同時に、わざと「お前」、と言っている俺の事を、好きだと言いやがった。
ふっ、面白い女だ。
「ふぇ～シャーペンちゃん待って～うわっ！私の席だけジェットコースターだぁ～」
俺の後ろで、さっきからペンが落ちたり、椅子が倒れたり、愛美がドジをかましている気配がするが、今はこの冷子とかいう女との対決中だ。
愛美よ、悪いがもう少し堪えていてくれ。
「俺は天然ものも、養殖ものも、味に違いなんてわからないよ。ただ言える事は、お前の事は嫌いじゃない」
俺がそう言ってニヤリと笑うと、教室におっさんが入ってきた。
「どうやら、話は次の休み時間に持ち越しのようね」
冷子の言う事を理解すると、教室に入ってきたおっさんは先生のようだ。
要するに、一時間目の授業が始まる。
俺は一言「そのようだな」と言って体勢を前に向け、授業を受ける態勢をとった。
すると視界の隅に、オロオロしている愛美の姿が目に入ってきた。
愛美の方を向くと、なんだか色々と凄い事になっていた。
「どうしたんだ愛美！？」
俺は愛美を助ける為に、すぐに一緒に散らかっている物を拾った。
まったく、少し目を放すとこれだ。
でも、なんだか安心している自分に、俺は苦笑いした。
同じタイミングで、後ろでは冷子が冷笑しているようだった。
まさか、これは冷子の狙いだったのか？
だが此処で振り返って何か言ったら、俺の負けな気がする。
俺は愛美を慰めながら、次の休み時間の勝利を誓うのだった。

高校生最初の授業は、先生の自己紹介から始まった。
俺は成績は良かったけれど、授業を受けるのが決して好きなわけではない。
得意教科も、得意ではあるが、勉強なんて正直まっぴらゴメンだ。
だから、最初の授業にあるこういった自己紹介や、これからの事について話す、規定の授業以外の時間は、なるべく長く続いて欲しいといつも思う。
中学時代の話だけれど、中には一時間全てを使って、授業と違う話をする先生もいた。
俺はそれを期待しながら、なんとなく先生の話を聞いていた。
「我が校の理念は、時代の風潮に流されない、確固たる紳士淑女を育てる事である」
意味がわからんな。
紳士淑女なんてものは、時代の流れや文化によって、変わるものではないのだろうか。
なんとなくだが、古き良き日本人像を目指しているように感じる。
男は男らしく、女は女らしく。
ある意味、時代に逆行しようしている学校なのかもしれない。
ただ、分からなくはない。
人とのつながりが希薄化していると言われる今、大人たちはそれを、取り戻したいのではないのだろうか。
まっ、俺は一緒にいたい人が、傍にいてくれればそれでいいけどな。

俺は愛美を見た。
愛美は俺の顔を見て、美味しそうな食べ物を見るような笑顔をしていた。
俺は少しだけ、恐怖を感じた。
その後出席をとって、二十分ほどの授業が始まった。
俺も愛美も、授業は真面目に受ける。
だけど今日の授業は、聞いていても、テストに必要の無い話ばかりだった。
日本語の乱れが嘆かわしいとか、ぶっちゃけ先生の愚痴だった。
日本人なら正しい日本語を、なんて言っていたが、パソコンのキーボードは、全部アルファベットだ。
だいたい日本語は効率が悪いし、覚える文字が多すぎるんだよ。
先生もさ、愚痴ばっかり言っていないで、日本語の良いところだけではなく、悪いところも認めて、より良い進化を推進する活動でもすればいいのに。
と言う俺も、実は日本語は大好きだけどな。
この複雑さの中に、ひらがなだけを覚えればなんとかなる効率の良さもある。
ただ、頭ごなしに素晴らしいとか言われると、なんとなく反抗したくなるんだよね。
そんな事を考えてしまう、実りの無い授業はつつがなく終了した。

一限目の授業の後は、今日最初の休憩時間である。
俺は愛美を膝の上に座らせ、冷子と向かい合っていた。
「どうして九頭竜さんが、膝の上に座っているの？」
もっともな疑問だが、そんななんのひねりもない質問には、俺もストレートにこたえる。
「愛美を野放しにしておくと、俺が萌え死ぬからな。まあ悪の組織の頭《ヘッド》が、高そうな猫を膝の上に乗せて、なでているようなものだと思って、気にしないでくれ」
俺は心の中で、うまいこと言ったとほくそ笑んでいたが、決して表情には出さなかった。
「まあいいわ。話の続きをしましょう」
冷子は意味も無く、ほくそ笑んでいた。
相変わらず、わけのわからない女だ。
「と言っても、まだなんの話もしていないと思うのだが。聞きたい事があるならさっさと聞くがよかろう」
俺は雰囲気を出す為に、普段使わないキャラを演じてみた。
当然、愛美の頭をなでながらだ。
そんな俺を見て、流石に冷子も平常心ではいられなかったようだ。
目が点になっていた。
そんな冷子を見て、「惚れられたかな？」と俺は思った。
我に返った冷子は、ようやく本題を話し始める。
「九頭竜さんにも関係ある話だから、一緒に話せるならそれでいいわ。と言うか、むしろ九頭竜さんと話がしたかったのよ」
いや、本題はまだのようだ。
つか、だったら、最初から愛美に話しかけろよ。
俺はいい加減面倒くさくなってきていたが、大阪人の会話は、本題を話すまでに、その十倍はどうでもいい話をすると言う。
彼らに言わせれば、それがコミュニケーションなんだそうだ。
もしそれが真実ならば、俺はコミュニケーションなんて取りたくない。
なんて思う反面、実は結構楽しんでいる部分もある。

怖いけれど、ジェットコースターに乗りたくなるようなものだ。
俺は今しばらく、冷子との会話を楽しむ事にした。
「そうだろうと思っていたさ。某組織から、そんな情報が回ってきていたからな」
俺は愛美の手を取り、ワイングラスを揺らす仕草をして、雰囲気を出し続けた。
それにどんな意味があるのか、よく考えれば俺にも分からないのだが、なんとなくこれは、必要な行為だと思えた。
さて、冷子は愛美の目をじっと見ていた。
これほどまっすぐに、愛美の目を見る他人を見るのも、かなり久しぶりだ。
中学生の頃は、みんな愛美から目を反らしていたからな。
いずれこの女も、そのうちそうなるのだろうか。
希望的観測も入っているが、冷子の顔を見ていると、そうはならないような気がした。
そんな冷子が、最初に愛美に発した言葉は、何処かで聞いた事のある質問だった。
「九頭竜さん、あなたはどうして、この萌芽高校に来たの？」
昨日、有沢にされた質問と同じか。
俺は振り返って有沢を見た。
すると有沢は、俺のすぐ後ろに立っていた。
ふむ、そろそろ俺も、真剣に話を聞く必要があるのかもしれない。
俺がそう思って冷子の方に向き直ると、愛美が質問にこたえていた。
「特に、理由は‥‥ないよ。私が合格できそうな公立高校が‥‥ここだっただけ‥‥」
愛美は少し挙動不審に動いて、座っている俺の膝から落ちそうになった。
しかし当然の事ながら、俺が支えているから、特にどんくさいところを披露する事はなかった。
「それは俺も昨日聞いたよ。冷子」
有沢は俺の後ろから、当然のように話に入ってきた。
どうやら、二人は友達のようだ。
「あらそう。ではこの学校の事は話したのかしら？」
「いや、少し様子をみようかと思ってな。話してはいない」
二人の会話は、なんだか色々気になる。
二人はどういう関係なのかとか、どこまでいっているのかとか。
って、そうじゃない。
この学校に何かあるのか？
そしてそれに、愛美が関わっているのか？
俺は少し心配になってきた。
「様子を見るまでもなく、九頭竜さんはきっと大丈夫よ。どう見てもバカだもの」
「いやしかし、彼氏がいるってのは、ギリギリセーフな可能性もあるだろう？」
「それはないわ。彼氏もバカだもの。だから大丈夫。問題ないわ」
「確かに言われてみれば彼氏もバカだな。よし、全てを話そうではないか」
有沢は喋りながら俺の前方に移動し、最後は手を広げて、笑顔で俺を見ていた。
そんな笑顔で見られても、散々バカと言われた屈辱は消えないのだが。
そう思って、俺は少しジト目で有沢を見ていた。
すると愛美が、マシンガントークで反論を始めた。
「久弥くんの事、バカとか言ってほしくないの。だって久弥くんは、何処の高校でも合格できるだけの学力があったのに、私の為に受験高校のレベルを下げてくれたんだよ。きっと最初の定期テストでバカじゃないって分か

ると思うけど、本当にバカじゃないんだよ。もしもバカに見えるとしたら、きっと‥‥私のせいだ‥‥」
　愛美は、今にも泣きだしそうな顔をしていた。
　それを見ると、有沢たちにバカにされた屈辱など、どこかに吹き飛んでいた。
　だから俺は言った。
「愛美、俺はさ、愛美さえ分かってくれていれば、誰にバカと言われようとも気にしないよ。それにさ、バカって言う奴がバカだって言うじゃないか」
　俺はそう言って、愛美の目からひとしずく流れ出る涙を、人差し指ですくい取るようにして拭きとった。
　すると愛美は少し照れたように言った。
「久弥くんのバカ‥‥」
　愛美と俺の間に、ラブラブフィールドが展開されていた。
　つか、愛美にもバカと言われているわけだが、もしかして俺って、本当はバカなのだろうか。
　気がつくと、休憩時間の終了を告げるチャイムが鳴っていた。
　有沢は既に目の前にはおらず、冷子も俺たちを無視して、次の授業の準備をしていた。
　まったく、いつになったら話が進むのか。
　俺は愛美を元の席に座らせ、やれやれといった感じで、二限目の授業に挑むのだった。

萌えの同士

　二限目の授業が終わると、俺と愛美を取り囲むように、有沢と冷子が立っていた。
　なんだ？どうしたんだ？
　俺と愛美がキョロキョロしていると、いきなり有沢が話し始めた。
「実はこの萌芽高校は、萌えの芽を摘む高校として有名なんだ」
「そうなのよ。オタクが名前だけでこの高校を選ぶようになり、学力は一気に上がったんだけれど、気持ちの悪い高校として、世間に認知されるようになった」
「だから、校長は危機感を抱き、評判を良くする為に、萌えとオタクを徹底教育によって、排除しようと躍起になった」
「そんなわけで、萌えの属性を持つ九頭竜さんが、どうしてこの高校を選んだのか、気になったわけなのよ。、まさか、大和撫子教育を、受けにきたわけじゃないわよね」
　おいおい、長々と時間を費やして話を脱線させてきたのに、今度はいきなり話すんだな。
　だが、疑問はだいたい解消された。
　担任の田中が、電話で愛美のドジを封じ込めようとしたのは、やはりプロの仕事、大和撫子教育とか言うやつだったというわけか。
　それにしても、えらい高校に入ってしまったものだ。
　俺は愛美の、いつか認められるであろう萌えを期待していたのに、それを無くすように教育されては、たまったものではない。
　だいたい、萌えを無くそうとする高校とは、時代錯誤にも程がある。
　大和撫子を否定はしないが、萌えを認めないなんて、学校教師のする事ではあるまい。
　よくも愛美を、大和撫子に改造しようとしたな。
　許すまじ先公ども。
「俺がみたところ、九頭竜さんは、萌え目、天然科、ドジっ子属性の、「天然ボケのドジっ子」のようだが、どうだろうか？」
　当たっている。
　有沢、お前はいったい何者なんだ！
　って、普通に見れば、すぐにわかる事だがな。
「ああ、その通りだ。で、それがどうかしたのか？」
　‥‥？‥‥
「いや、ちょっと言ってみたかっただけだ」
　有沢、お前がオタクだって事は分かったから、そろそろこの話を俺たちにした意味を、教えてもらいたいものだ。
　ぶっちゃけ、こんな話を聞いても、俺たちは別に、何も動じる事はない。
　愛美も俺も、何も変えようとは思っていないのだから。
　有沢は、何やらショックだったようで、膝をついて、自分の顔をアイアンクローするような感じで、手を顔にかざしていた。
　駄目だな、そう思って俺は冷子の方を見た。
　すると冷子は、やれやれと言った仕草をして、ゆっくりと話し始めた。
「私は、萌え目、養殖科、ツンデレ属性の、「ボケツンデレっ子」よ」
　‥‥‥‥
　いや、そんな事が聞きたいわけじゃないんだけどね。

つか、お前のキャラは、明らかに天然だと思うぞ。
それにそもそも、萌える要素なんて、一切ないからな。
「で、俺たちにそんな話をした理由はなんだ？」
俺がそう言うと、冷子はパッと表情を輝かせて手を打った。
「それはな、お前たちが俺たちの同士だと思ったからだ」
いきなり有沢が復活して、話に入ってきた。
可哀相に、冷子はバカみたいな顔で固まってしまっていた。
「ほう～同士？と言うと、有沢、お前は天才で、冷子は萌えキャラだと言いたいのか？」
俺がそう言うと、愛美が椅子を倒してコケていた。
おいおい、そこはコケるところじゃないぞ愛美。
どうせコケるなら、さっき冷子が、自分で自分の事を萌えキャラだと言ったところでコケるべきだったな。
俺はなれたもんで、軽く愛美を救出していた。
って、なんだか表現が色々とおかしいが、まあいいか。
俺は救出した愛美を、膝の上に座らせた。
此処が一番安心できる。
で、有沢は話の腰を折られ、ツッコミを入れるタイミングを逃したようだ。
仕方がないな。
「もう一度言うが、お前は天才で、冷子はバカなんだな？」
「ああ、その通りだ」
ようやく全てが見えてきた。
要するに、有沢の望むところは、学校側の企みを挫く為に共に手を取って、一丸となって、「ジーク萌え！」と唱えたいと、そういうわけか。
「よし分かった。共に萌えを追求しようではないか！」
俺はそう言うと、有沢に右手を差し出した。
すると有沢は、間髪いれずに握手してきた。
そんなに萌えの同士が欲しかったのか？
なんだか有沢の事が、可哀相になってきた。
横を見ると、冷子が愛美に握手を求めていた。
どう考えても、冷子に萌える要素は一切ないが、かなり変わった奴である事は確かだ。
こいつとなら、愛美は友達になれるかもしれない。
流石高校だな‥‥
俺は少し嬉しい気持ちで、愛美と冷子が握手しようとしているのを見守っていた。
って、油断していたが、こんなにうまく愛美に友達ができるわけがない。
俺がそう思った時には、時既に遅しだった。
見ると、愛美は握手を求められた事に驚いて、慌てて手をさし出そうとして、持っていたシャーペンを、冷子の手に突き刺していた。
やっちまったか‥‥
俺は手で顔を覆った。
しかし、冷子の反応は、俺の予想とは違っていた。
「甘いわね。私の皮膚は、ドラゴンの鱗よりも硬いのよ」
そう言う冷子をよく見ると、爪でシャーペンの攻撃をガードしていた。
俺はホッと胸をなでおろした。

なかなかやるなこいつ。
俺は再び、嬉しい気持ちになった。
こうして、俺と愛美は、有沢と冷子と、萌えを追求する同士となった。

　同士になったからと言って、特に何かをするわけではない。
　ただ趣味の合う者同士、仲良くしようってだけの話だ。
　それはある意味、友達への第一歩なのかもしれない。
　まあぶっちゃけ、俺はどうでもいいんだけれど、冷子が愛美の友達になってくれるなら、俺としては凄く嬉しい。
　なんだかもう本当に、できの悪い娘を持った父親気分だ。
　この歳で父親気分ってのもどうかと思うが、それでも俺は、この状況にこの上なく満足していた。
　そんな気分に浸って、昼休みは共に食事を楽しんだ。
　愛美のドジを抑え込む為に、俺は常に神経をとがらせてはいたが、いつもよりはかなり気の抜ける、第三者のいる食事だった。
　食事を終えて満足感に浸っていると、突然有沢と冷子が、俺たちについてくるよう要求してきた。
「じゃあそろそろ行くか」
「そうね。あなたたちを地獄の三丁目に案内するから、ついていらっしゃい」
　いきなりそんな事を言われても、俺には意味が分からなかった。
　だけどまあ、ついてこいと言うのなら、ついていってみるか。
　俺は愛美の手を取ると、立ちあがって、有沢たちの後ろを付いて歩いていった。
「なあ、何処に行くんだ？俺はいいんだが、下手に動くと、愛美がデススペルを唱える事になるぞ」
　俺がそう言うと、有沢と冷子は、何を寝ぼけているんだと言わんばかりの表情で、俺の顔を振り返って見ていた。
「神田は、俺の同士になると言ったじゃないか」
「そうよ。地獄の四丁目に案内するって言ったじゃない。今更やめると言っても遅いのよ。後の葬式よ」
　いや、確かに言ったが、それとどういう関係があるんだ？
　それに冷子よ、祭りを葬式というのは、いくら地獄行きといっても、人道的に反感をかう恐れがあるから、やめた方がいいぞ。
　そうは思っていても、普通に「三丁目が四丁目にかわっとるやんけ」とツッコミを入れると俺の負けな気がするので、俺はあえてひねくれた返事をする。
「なるほど。愛する俺を連れていくのだから、地獄とは素晴らしい所のようだな」
　俺がそういうと、横で愛美が「地獄に行くの初めてだぁ～」なんて言って喜んでいた。
　このメンバーで会話をしていると、全く話がまともな方向に進まないな。
「もちろん、期待してくれていいぞ。俺はこの時を、半年以上も前から待ち望んでいたのだからな」
「そうね、期待してくれてもいいわ。変態の神田くんなら、きっと大喜びする事間違いなしよ」
　なんだかだんだん、俺の修飾が酷くなっている気がするのだが。
　まあバカも変態も対して変わらないか。
　俺は諦めて、愛美とルンルン気分を演出して、二人の後について行った。
　二人に連れてこられた先は、空き教室が並ぶ本校舎の端だった。
　一昔前までは活躍していたのであろうその場所は、今では少子化の波にのまれ、こうやって放置された状態になっているようだ。
　有沢は、そんな空き教室の前で立ち止まると、おもむろにドアを解放した。
　そして迷わず、教室の中に入っていった。
　続いて、冷子も入っていく。

　直後二人が、誰かに挨拶する声が聞こえた。
「ちーっす」
「お久しぶりです。リカちゃん」
　どうやら教室の中に、誰かがいるようだ。
　愛美は、特に人見知りでは無いが、普通にコミュ能力が劣っている。
　まだ有沢や冷子にすら心を開いていないのに、いきなり他の人を紹介されてもねぇ。
　とにかく此処まできたら仕方がない。
　俺は愛美の手を引いて、教室の中に入っていった。
　すると中には、子供がいた。
　だが、この高校の制服を着ているのだから、一応高校生なのだろう。
　だけどこんな天然のボケを、体いっぱいに表現している女の子を見て、俺にスルーする選択肢なぞ、ありはしなかった。
「おい誰だ？小学生を高校に連れ込んだ腐れ外道は？大丈夫でちゅかぁ～？怖かったでちゅかぁ～？お兄ちゃんが来たから、もう安心でちゅよぉ～」
　俺がそう言うと、有沢と冷子が、白い目で俺を見ていた。
「全然安心できんは！」
「そうね。むしろリカちゃんが、まんざらでもなさそうなのが心配ね」
　俺は二人の言葉に、無意識に頭をなでていた、リカちゃんと呼ばれるその子供を見た。
　すると、リカちゃんとやらは頬を赤く染めて
「お兄ちゃんおかえり」
　と上目づかいで祈るように言ってきた。
　なんだこの破壊力は。
　小学生が可愛いのは当然だが、この子は、少なくとも高校生のはずだ。
　こ、これが、本物の萌えという奴なのか！
　ヤバイ、なでる手を止められない。
「久弥く～ん、私もなでたい‥‥」
　すると愛美が、やきもちをやくどころか、一緒になでたいと、これまた破壊力抜群な上目づかいで、俺に懇願してきた。
　おいおい、君たちは俺を萌え殺すつもりか。
「おう、なでていいぞ」
　俺の言葉に、愛美もリカちゃんをなで始めた。
　不思議な事だが、愛美のドジは、可愛いものに対しては、あまり発動しない。
　小猫と戯れていても、踏みつぶしてしまったりしないのはその為だ。
　そしてそれは、このリカちゃんにも適応されているようだった。
「リカ、可愛いお姉ちゃん好き～」
　リカちゃんのその発言に、愛美はパッと顔を輝かせた。
「私も、リカちゃん大好き～」
　愛美が、俺以外の人間を、大好きだと言った。
　俺は正直驚いた。
　高校とは、なんと素晴らしいところなのだろうか。
　俺は、涙が出るのを我慢するのに必死だった。
　そんな和やかな時間が流れる教室は、時の流れすら拒絶する雰囲気に包まれていた。

しかしそんな空間が、存在するわけもなかった。
どうやら俺の後ろのドアから、誰かが入ってきたようだ。
有沢と冷子が、その対象に向けて挨拶をする。
「あ、ツバサ先輩！お久しぶりでございます」
「ふん、別にあなたがいるから、この高校に来たわけじゃないんだからね」
俺は、リカちゃんをなでる手を止めて振り返った。
するとそこには、おそらく上級生であろう、少し病み上がりっぽい女子と、メガネの奥から怪しい眼光を放つ男子が立っていた。
そしてその後ろには、十人ほどの女子の姿が見えた。
「あ～有沢じゃん。一年も待ったぞ。来るのが遅いよ」
「すみません。年齢という壁は、思った以上に高くて、お待たせしてしまいました」
この、少しいっちゃってそうな女生徒は、有沢との会話から、どうやら二年生のようだ。
「とうとう来てしまったのか冷子。あれほどお前の事は嫌いだと言ったのに」
「だから来たのよ。真嶋光一《まじまこういち》先輩に、嫌がらせをしようと思ってね」
おいおい、さっき冷子は、あなたがいるからこの高校に来たわけじゃない、とか言っていなかったか？
まあこいつにいちいちツッコミをいれていたら、切りが無いだろうが。
で、この状況から察するに、俺たちが此処に連れてこられた理由は、先輩方を紹介、或いは俺たちを、先輩方に紹介する為か。
要するに、此処に集まっている人たちは、萌えを推進する同士という事か。
「よし、まずはみんな席につけ。久しぶりの再会を喜びたいところだが、昼休みも残り時間が少ない。ちゃっちゃと顔合わせするぞ」
どうやら、この真嶋っていうメガネの先輩が、このグループのリーダーのようだ。
俺は言われた通り、とりあえず席につこうとした。
しかしこの教室には、机も椅子もなかった。
当然だが、愛美はエア椅子に座ろうとして、尻もちをついていた。
「いてて。久弥くん、席がないよ」
いや、そんな事は見ればすぐに分かると思うが。
「そうだな」
俺はとりあえず、みんながどうするのか、観察する事にした。
すると廊下にいた女子たちは当然とばかりに、教室に入るとまっすぐ、参観日にきた保護者のように、一番後ろに並んだ。
教壇の上には、真嶋先輩、ツバサ先輩、そしてリカちゃんが立っていた。
有沢と冷子は、窓際の壁にもたれて立っていた。
となると、俺たちの位置は‥‥
俺は愛美の手を引くと、廊下側の壁の前に移動した。
どうやらそれは正解だったようで、真嶋先輩が偉そうに頷いた。
「うむ、よろしい。ではこれより、本年度最初の、萌え萌え委員会を始める」
こりゃまた、えらく恥ずかしいネーミングの委員会だな。
そんな委員会に参加しちまっている自分が、なんだか無性に恥ずかしくなってきた。
「では、新人もいる事だし、まずは自己紹介と挨拶を行う」
また自己紹介かよ。
俺はクラスでの自己紹介に失敗してるんだ。

　そう、トラウマになりかけているんだよ。
　だから自己紹介はやめてくれよ。
　俺はそう思ってかなりブルーが入っていたが、自己紹介が始まると、なんだかどうでもよくなっていた。
「トップバッターは、萌え目《もく》、天然科、妹属性の先輩からお願いします」
「分かった～ｗ三年鈴組の、香川《かがわ》リカです。お兄ちゃん、お姉ちゃん、可愛がってくれると嬉しいです」
　ああ、そうだな、お兄ちゃん可愛がっちゃうよ。
　って、違う違う。
　なんだこのオーラは。
　三年って、二つも年上じゃねぇか。
　なのにこの妹っぷりはどういう事だ。
　これが本物の、妹属性って奴なのか。
　さっきも、気がついたら無意識に頭をなでていたし、愛美のドジっ子砲も発動しない。
　俺は今まで、安易に愛美を萌えッ子とか言っていたが、リカちゃんに比べれば赤子も同然という事か。
「そうそう、一応言っておくが、リカちゃん先輩は、学年は三年生だが、閏年《うるうどし》生まれの為、歳はまだ四歳だ。みんなお兄さんお姉さんとして、しっかり面倒みるように」
　なんて真嶋先輩は言っているが、そんなわけないだろうが。
　つかリカちゃん、メッサ納得してホクホク顔じゃねぇか。
「ちょっ」
　俺はこの状況に、ツッコミを入れずにはいられなかった。
　しかし、すぐに有沢に止められる。
「神田、お前は自分の欲望の為に、多くの人達の笑顔を奪うつもりか」
　俺は有沢に言われて、思いとどまった。
　確かに有沢の言うとおりだ。
　うまくいっている時の選手交代は、サッカーの世界では愚行とされている。
　ありがとう有沢。
　俺は愚か者にならなくてすんだぜ。
「では、次は僕だ。二年星組真嶋光一。好きな萌えは、委員長風ツンデレだ」
　真嶋先輩の自己紹介を、冷子は目力で殺しそうな勢いで見つめていた。
　なるほどな。
　冷子は真嶋先輩が好きだから、ツンデレをやろうとしていたのか。
　それはつまり、冷子はやはりただのボケ属性って事だ。
「では次は、萌え目、天然科、ヤンデレ属性の美剣くんだ」
　今度はヤンデレか。
　ヤンデレとは、病んだところのある、ギャルゲーでは第六の女として重宝されている属性である。
　ギャルゲーでの定番は、ボケ属性、ドジっ子属性、妹属性、ツンデレ属性、制服属性の五種類だ。
　他にも、子供属性、委員長属性、お嬢様属性、ロボ属性とあったりするが、それらは色々な属性と兼任していて、五人のヒロインの中に組み入れられる事が多い。
　で、六人目はと考えた時に、第一に上がるのがヤンデレだ。
　正に、「萌えの名脇役」と言ったところだろうか。
「俺が今紹介された、ヤンデレ属性、二年桃組の美剣《みつるぎ》ツバサだ！趣味は喧嘩とツーリング。後は有沢敏也を踏みつける事だ。四露死苦！」

おいおい、四露死苦とか言って、ヤンデレって、ヤンキーがデレデレの方かい！
「ツバサ先輩、踏みつけてぇ～」
有沢はそう言って、美剣先輩の前に出て、四つん這いになっていた。
すると嬉しそうに、美剣先輩は有沢を踏みつけた。
踏みつけられる有沢は、よだれを垂らして一層嬉しそうだった。
訂正する、ヤンデレは、ヤンキーに、デレデレだったようだ。
まあお互いそれでいいのなら、俺は何も言うまい。
「では次、新人を紹介してもらおうか。有沢くん、よろしく」
真嶋先輩がそう言うと、有沢はそのままの体勢で自己紹介を始めた。
愛美は凄く悲しい目で、その様子を見ていた。
愛美の中では、有沢は終わったな‥‥そう思った。
「有沢敏也です。一年梅組です。好きな萌えは当然ヤンデレです」
いや、言わなくてももう分かっていたよ。
「では次は、冷子‥‥だな」
「あら、私の事になるとやけにおざなりね。まあいいわ。愛の証だと思っておくわよ」
こちらはどうやら、相思相愛とはいかないようだ。
「私は、一年梅組の雪村冷子。萌え目、養殖科、ツンデレ属性よ」
冷子は、髪をかきあげ、ツンとした顔でツンデレをアピールしていた。
「なに？冷子は、養殖科なのか？もしそれが本当なら、あちらの列に加わってもらう事になるが？」
そういって真嶋先輩が指差したのは、教室の後ろに並ぶ女子たちだった。
最初からずっと無言でいるこの女子たちは、いったい何者なのだろうかと、気にはなっていたが、今の真嶋先輩の発言から、養殖科の者が、天然科と区別されているのだと理解できた。
「えっ、そんな‥‥それでは光一先輩に嫌がらせができないじゃないの」
冗談めかして言ってはいるが、冷子の発言にはキレがなかった。
どうやら冷子は、その他大勢キャラにはなりたくないようだ。
仕方がない、助けてやるか。
「真嶋先輩、冷子は養殖科のツンデレかもしれませんが、天然科のボケ属性でもあります。だから天然科として扱うべきです」
俺がそうフォローすると、何を血迷ったか、冷子は意義をとなえてきた。
「何を言っているの。私はどう考えてもボケ属性ではなくってよ。私を陥れるような事は言わないでいただけるかしら、変態の神田くん」
人がせっかく助けてやろうとしているのに、なんだこいつは。
天然のボケ属性じゃなくて、天然のヴォケ属性だったようだな。
「分かった。君の意見は正しい。冷子は天然科に分類する事にしよう」
真嶋先輩の言葉に、冷子もどうやら俺のフォローの意図するところを悟ったようで、少し顔を赤くしていた。
「神田くん、助けてやったとか思わないでね。感謝なんてしてないんだからね。ありがとう‥‥」
最後の「ありがとう」は、ほとんど聞こえなかったが、冷子は意外に、この先輩に真剣なんだなと思えて、何だか可愛く感じた。
もしかしたら、マジでツンデレなのかもしれないとも思った。
「では次はキミの番だ。新人君、自己紹介してくれたまえ」
俺は真嶋先輩に指名され、どうしてこんな事になっているのか、疑問を持つ事も忘れて、自己紹介を始めた。
「俺は一年梅組の、神田久弥です。萌えをこよなく愛し、ドジっ子属性に恋する勇者です」

俺が自己紹介をすると、愛美が隣で拍手していた。
「わぁ～久弥くんって、ドジっ子属性に恋してたんだぁ～」
おい、愛美はいったい、自分の事をどう思っているんだ？
お前は既に、ドジっ子属性全開だろうが。
まあ、ドジっ子属性に隠れてはいるが、かなりのボケ属性でもあるんだよな。
つか、隠れてないか。
俺は穏やかな目で、愛美の頭をなでた。
「では、次はその、ドジっ子属性のキミ、自己紹介してくれたまえ」
さていよいよ、愛美の番だ。
果たしてすんなり、自己紹介できるのだろうか。
「えっと、九頭竜愛美っ」
愛美がそこまで喋った時に、昼休み終了の予鈴が鳴った。
愛美と、後ろに並ぶ女子の一人が、ずっこけていた。
ああ、なるほど。
養殖科に、ずっこけ担当の子がいるんだな。
「時間切れだ。続きは放課後、この教室で行う事にする。では、一時解散」
真嶋先輩はそう言うと、逃げるように走って教室を出ていった。
当然それを追うように、冷子も走って出ていった。
その後他のメンバーも、二人につられて、慌てて教室を出ていった。
まったく騒がしいメンバーだな。
だけど、意外と楽しい高校生活になるかもしれない。
俺は湧きあがる期待に、微妙な笑いがこみ上げてくるのを、抑える事はできなかった。
「ぐへへへへ～」
「お兄ちゃん、私の教室何処だっけ？」
何故か目の前に、小動物のような子供先輩が、目をウルウルさせて泣きそうだった。

委員会活動始動

　放課後、再び俺たちは、空き教室に集まっていた。
　まったく、昼休みはリカちゃんのおかげで、授業に遅れてしまったではないか。
　まあ、愛美が一緒だったから、どっちにしても遅れた気はするが、やはり萌えの裏には、闇の部分もあるのだな。
　俺は萌えを推進する立場として、気を引き締めなければならないと思った。
　いつのまにか、俺は完全に洗脳されていた。
　しかしそれを自覚しながらも、もう抗う事はできなかった。
「こいつは九頭竜愛美。一年梅組の萌え目、天然科、ドジっ子属性。他にもボケ属性とか、若干子供属性も持っている、将来有望な萌えッ子だ」
　俺の言葉を聞き、真嶋先輩は軽く頷くと、何故かつけていたマントを翻《ひるがえ》した。
「よし、これで我が萌え萌え推進委員会のメンバーは揃った。後ろに並ぶ、養殖科萌え部隊の面々を含めて、僕たちの目的はただ一つ。教師達に、萌えを認めさせる事だ。その為に、文化祭の女子生徒人気投票で、僕たちの誰かが優勝をものにする。そして、僕たち委員会のメンバーは、必ず全てのテストで、学年一ケタ順位を確保するのだ。さすれば、嫌でも教師達は、萌えを認めざるを得ないだろう」
　真嶋先輩の言葉に、俺は意味不明に、盛り上がっていた。
「ジーク萌え！」
　俺が叫ぶと、みんな続いた。
「ジーク萌え！ジーク萌え！」
　怪しい宗教団体のようだった。
「では、新人も入った事だし、今からみんなに支持を出す」
　いきなり真嶋先輩がそんな事を口走ったが、確かに何もせずに、萌えを推進できるとも思えない。
　だけど正直、何かをするのも面倒くさいと思った。
　俺は少し、ヤバイ洗脳から、目を覚ましつつあった。
「まず僕は、生徒会の監視の目を盗んで、生徒たちを洗脳してゆく」
　えっ？やっぱりこの人、洗脳しているのか。
　つか生徒会ってどういう事だ？
　もしかすると、生徒会は学校側の勢力って事か。
「次に美剣くん！キミは今のまま、問題児としてみんなの注意を引きつけておいてくれ」
「任しておけ。先生も生徒会も、全て俺の虜にしてやろう」
　全然話が通じていないようだが、美剣先輩もまた、ボケ属性を持っているって事か。
　まあ、萌えの中心になるのは、やはりボケだからな。
「リカちゃん先輩は、全てのお兄ちゃんお姉ちゃんに、可愛がってもらいなさい」
「分かったよお兄ちゃん。立派な手のかかる妹になるよ」
　いや、そんな努力をしなくても、十分目標は達成されるはずだよ。
　だいたい、この子がいれば、文化祭の人気投票で、一位とれるんじゃねぇか。
　話しによれば、昨年の萌芽高校美少女コンテストで、グランプリを取ったらしいし。
「有沢くんは、萌えの素質を持った者を、引き続き捜索してくれ」
「任せてください」
　これはもしかして、愛美を見つけてきた実績を、認められたという事か。
「冷子は、とにかく僕から離れて、その辺のおっさんと遊んでおいてくれ」

「了解したわ。光一先輩をストーキングして、写メ撮ってネットにアップすればいいのね」
　俺は、こんな冷子の事を、嫌いではない。
「そして新人の君たちだが‥‥神田くんは九頭竜くんをフォローしまくっているようだね。ドジっ子属性は、ドジをしてなんぼのキャラだ。もっと自由に、九頭竜くんをはばたかせておあげなさい」
　おお〜、なんだか分からないが、俺は感動していた。
　今まで周りにいた人たちは、皆ドジを恐れて、愛美から逃げようとしたり、ドジを封じようとしてきた。
　それなのに、もっとドジをしろとは。
　俺は愛美を抱きしめ、意味も無く溢れるやる気を抑えきれなかった。

　そんなわけで、とりあえず愛美のドジを未然に防ぐ努力をしなくなったら、こめかみ辺りにしまってある堪忍袋の緒が、途端に切れまくった。
「くそっ！なんだか騙されたぜ！」
　確かに、愛美を自由にはばたかせろとか、一見良さ気に聞こえたわけだが、被害を被るのはすべて俺じゃねぇか！
「ごめんね。私のドジで、家につくまでに久弥くん死んじゃうかも」
　本当だよまったく。
　だけど、俺が気にかけなかったら、マジでこいつはヤバイな。
　此処まで怪我人が出ていないのが不思議なくらいだ。
　愛美が振って歩く鞄から、コンパスが飛んできて俺の胸を刺した時には、一瞬死んだかと思ったぞ。
　だいたいどうしたら、コンパスを飛ばす事ができるんだ？
　生徒手帳のおかげで、ギリギリ命は救われたが。
　もしかすると、俺が気にかけて守ってきた事で、愛美のドジは進化してしまったのではないだろうか。
　萌えを守ると言うのなら、俺のやってきた事は正しかったのかもしれない。
　しかし、この苛立ちはなんだろうか。
　萌えないのはどういうわけだろうか。
　その答えは分からないが、俺は言われた通りやるしかなかった。
　次の日の朝は、当然遅刻した。
　授業は、当然何度も中断した。
　休み時間は、当然休めなかった。
　昼休みは弁当が亡き物となって、仕方なく食堂に行ったら、出てきたのは好きなカレーライスではなく、嫌いなイクラ丼だった。
　もういやだぁー！！
　こんな気持ちになる為に、愛美と一緒の高校に来たわけじゃないぞ！
　俺は心の中で叫んだ。
　しかし、それを声に出すわけにはいかない。
　なんせそんな事をしたら、ますます愛美が悲しむからな。
　だけど正直、俺は限界だった。
　そんな気持ちは、どうやら愛美にも伝わっているようだった。
　ふと横をみると、そこには中学時代と同じ、愛美の寂しそうな顔があった。
　そうだ、俺はこんな顔が見たくなくて、必死にフォローして、ドジも萌えだと言いはって、励ましてきたんだ。
　結局、俺は高校生になっても、ドジをする愛美には、腹を立てる事の方が多いのか。

いや、違うかもしれない。
ただ単にドジだった頃は、失敗しても、愛美はこれほど寂しそうな顔はしていなかった。
だから俺は、愛美の事が放っておけなくなったんだ。
もしかして、俺のせいか。
ドジっ子萌えを目指そうとか言っておきながら、そのドジを一番認めていなかったのは、この俺だったんじゃないだろうか。
よし、こうなったら、愛美がドジをする度に、笑ってやる。
心の中ではイライラしていても、愛美をもっとあおってやる。
「もう愛美に寂しい顔はさせない」と、俺は心に誓った。
この日の午後の授業から、俺は死ぬ気で愛美と向き合った。
愛美がいつものように筆箱を落としても、俺は笑顔で、一緒に散らばった中身を拾った。
「いいぞ愛美。みんな授業が中断されて喜んでいるに違いない」
俺はそう言って笑顔を作った。
すると最初は戸惑っていた愛美だったが、すぐに笑顔で「うんっ」と頷いた。
下校中には、愛美の躓《つまづ》いた石が、前を歩くおっさんの後頭部に直撃した。
俺は素早く愛美の手を取ると、一目散に逃げ出した。
「愛美の攻撃、おっさんは百八のダメージを食らった」
俺はそう言って笑った。
「久弥くん、そんな事言っちゃダメだよぉ～」
愛美はそう言っていたが、顔は笑っていた。
なんとなくだが、俺は楽しさを感じていたし、愛美も同じ気持ちのようだった。
ドジを乗り越えて、なんとか愛美の家の前まで帰ってきた。
玄関の前で少し話をして、名残惜しげに手を振った。
「バイバイ！」
すると愛美は、こちらに気を取られて、玄関のドアに頭をぶつけた。
俺は容赦なく笑ってやった。
そして言った。
「ははは！愛美、ちょっと楽しくなってきたぞ。俺は少し大人になったみたいだ」
それは俺が、愛美の事を、今までよりも好きになったって事を意味する。
「私も久弥くんのおかげで、少しだけ大人になった気がする」
それは愛美が、ドジを萌えに変換できる能力がアップしたって事だ。
少しだけ気がついて、少しだけ気合を入れて、少しだけ相手の事を考えただけで、俺たちの見るものは、明るい方向へと変わっていた。
「笑う門には福来る」とどっかの偉いおっさんが言っていたらしいが、俺は本当なんだなと実感した。

クラス委員長と副委員長

　愛美のドジっ子を解放してから、一週間が過ぎた。
　俺はなんとか生存競争に勝利し、ようやく愛美のドジも落ち着き始めていた。
　と言うか、感じとしては、いつも苦笑いしていた、中学校入学当初のような感じか。
　でも、愛美のドジ自体も、本当の意味で、笑って許せる範囲に落ち着いていた。
　だけどそうなってくると、逆にクラスメイトにとっては見過ごせないのか、それとも、萌えに反対する組織の陰謀か、委員長と副委員長が、俺たちに話しかけてきた。
「君たちに、話があるんだな」
「主に、九頭竜さんに‥‥話が‥‥あるんだけど‥‥ふふ」
　‥‥なんだろうか‥‥これまたキャラの強い二人だな‥‥
　最初に話しかけてきた委員長は、世間一般ではオタクと呼ばれている、正に漢《おとこ》の風体をしている。
　喋り方もそれにふさわしいものだ。
　そして副委員長は、ヤバイ世界の住人である事がすぐに分かる、それはもう異質のオーラを纏った女だった。
　要するに、どちらかと言うと、同類かと思われた。
　だから、「友達になろう」とでも言う流れの方が、ぶっちゃけしっくりくるはずなのだが、二人から発せられる気配は、それとは真逆に感じた。
　俺は居住まいを正して、二人を迎え撃つ事にした。
「なんだ？愛美のサインが欲しいなら、一昨日の十二時に受付は終了したが？」
　俺がそう言うと、委員長は一瞬ハッとした顔をしたが、すぐに元の崩れた顔に戻した。
「別にサインが欲しいわけじゃないんだな。今日は君たちに注意しにきたんだな」
　やはりそうか。
「授業中に、カナブンに釣り糸をくくりつけて飛ばしていたのは、流石にまずかったか」
　俺がそう言って茶化すと、委員長は少しムッとした顔をした。
　だけど副委員長は全く表情を変えず、俺のボケに対応してくる。
「それは‥‥聞き捨てならない‥‥犯罪ね。動物愛護管理法に‥‥抵触する‥‥恐れが‥‥あるわ‥‥ふふふ」
　ふむ、この副委員長、名前は忘れたが、なかなかいい線いっているじゃないか。
　バッタモンのヤンデレ、美剣先輩よりは、圧倒的に萌え系だ。
　俺は横の席に座る愛美を見る。
　すると愛美は、モジモジと俯いていた。
　でもまあ、愛美にはかなわないな。
　俺は心の中でノロケてから、再び二人に相対する。
「そうか。実はカナブンを釣り糸にくくりつけて遊んでいたのは、山田なんだがな」
　俺は適当に、聞いた事のある苗字の奴に、存在しない事実からの罪をなすりつけた。
　するといきなり、委員長がツッコミをいれてきた。
「僕はそんな事してないんだな！」
「なんだ、お前が山田だったのか」
　言われてみれば、山田って顔をしてるわ。
　すると何故か、副委員長が先ほどにも増して、クスクスと笑っている。
　ここはとりあえず、一層笑っている事に、ツッコミを入れておかないとな。
「何か面白い事でもあるのか？」
　俺は副委員長に尋ねた。

　すると副委員長は、意気揚々と、死んだ魚のような目で、ダラダラと話し始めた。
「山田の名前‥‥ウケル‥‥美沙太郎《みさたろう》だって‥‥プッ‥‥ふふふふ」
「仕方ないんだな！女の子が生まれると言われていたから、女の子の名前を考えていたんだな」
　こいつはなんだか、山田が可哀相になってくる話だな。
　女の子が生まれてくると言われていたから、美沙って名前を考えていたら、男が生まれてきたから、それに太郎と付けただけかよ。
　トンデモな親だが、逆に尊敬もしたくなる。
　いやちょっと待て。
　今は子供が生まれてくる前に、性別を調べる事ができる。
　なのになんで、女の子が生まれてくると言われていたのに、こいつが生まれてきたんだ？
　俺は疑問に感じて、山田に尋ねてみた。
「いくらお腹の中でも、女と間違えられるって、何かあったのか？」
　すると山田は、顔をタコのように真っ赤にして、何やら怒っているようだった。
　そして相変わらず副委員長は、笑いがこらえられないといった感じだ。
　俺が疑問に感じていると、隣の愛美がコッソリと言ってきた。
「久弥くん、きっと‥‥小さすぎたんだよ‥‥」
「何が？」
　俺は自分でそうこたえて、納得した。
　ああなるほど、ナニが小さすぎたのか。
　山田、色々な意味で可哀相な奴だな。
　俺はなんだか哀れになってきたので、そろそろ話を聞いてやろうと思った。
　だが、俺が聞く態勢になったのに、副委員長は、俺と愛美の会話が聞こえていたようで、一人爆笑していた。
「ふはははは〜ふふふはははは〜」
　なんだろうか、俺はこの副委員長、嫌いではない。
「まあとにかく話を聞こうではないか。注意とはいったいどのような事だ？」
　俺は笑う副委員長は放っておいて、山田に尋ねた。
　すると山田は、ようやく平静を取り戻し、少し偉そうに何やら言ってきた。
「まず九頭竜さんなんだな。色々と人に迷惑をかけて、注意力が足りないんだな。そして神田くんは、九頭竜さんや他の人達を、あおっているように見えるんだな。だから僕が言いたいのは、二人とも、自重しろって事なんだな」
　ふむ、なんだかこの微妙な物言いで言われると、ムカつくと言うか、爆笑だな。
「ふはははは！山田お前、普通に喋れないのか！ははははは！」
　俺はとりあえず、指を差して笑ってやった。
　すると副委員長も、俺の笑いにのっかるように、ますます笑っていた。
　山田は撃沈していた。
　残るは、この意味不明の副委員長だけだ。
　ボケ属性は無いが、なかなかどうして、侮れない奴だ。
「と言うわけで、お前の相棒の山田は、バミューダ海峡に沈んだぞ。どうするんだ？」
　俺がそう言うと、パタッと笑いをやめ、俺の顔を舐めるように見てきた。
　本当なら、こんな事をされると恐怖を感じるところだが、漂ってくるいい香りと、意外と整った顔に、俺は照れてしまった。
　しかし、それを表情に出しては負けだと思い、俺はダンディな男を演じて、「フッ」と笑みを浮かべた。

　するとどうやら副委員長は、俺の格好良さに絆されて、動きを止めて頬を赤く染めた。
　この勝負も、これで俺の勝ちのようだ。
　いったい何時から勝負をしているのかとか、そもそもなんの勝負なのかは分からないが、俺はとりあえず、勝利を確信した。
「えっと‥‥あなた方は問題児です‥‥みんなに‥‥迷惑かけないように‥‥ポッ」
「はい‥‥」
　あ、負けた‥‥
　結局正論には勝てないんだなと、世の中の理不尽さを、俺は思い知る事になった。

新たな仲間

　副委員長の名前を知る事もなく、俺は彼女の要求を聞くしかなかった。
　だがしかし、注意すればするほど、愛美がドジをする頻度は増す。
　くっくっくっ、彼奴《きゃつ》らは自分で自分の首を絞めたのだ。
　ようやく分かってきたんだが、愛美は元々ドジな子だから、当然ドジはするんだけれど、ドジしないように気をつけると、余計にドジが増すようだ。
　そして更に、ドジをした時に嫌な顔を直接向けると、愛美はそれをしばらく引きずるので、それもまたドジを増やす要因になっていると思われる。
　愛美のドジを減らす方法は三つ。
　一つは、喋らない事、と言うか、自分を抑える事。
　しかしこれをやると、愛美が愛美らしくなくなって、愛美の幸せにはつながらない。
　それに授業中に関して言えば、それほどの効果は望めない。
　次に、俺が長きにわたってやってきた、徹底的に俺が注意して、未然にドジを防ぐ方法。
　これは、ドジをしそうになっても、俺が助けてくれるという安心感も与えるので効果はあったが、俺がいないところではますます自分を出せなくなるという、副作用もあった。
　そこで最近やっていたのが、ドジをしてもいいんだと思ってもらえるように、そういった環境を作る事だ。
　本質がドジっ子だからドジは無くならないが、致命的なドジはしなくなってきたし、ドジをしても、ドジった本人が笑顔だから、周りも嫌な気持ちにはなりにくい。
　そしてこれを完全マスターした時、萌えるドジっ子が完成するのだと、俺は気がついた。
　とは言え、そんな事を知らない二人は、放課後に再び、俺たちの元にやってきた。
「迷惑をかけないように言ったんだな」
「ふふふ‥‥呪われている私が言った‥‥から‥‥余計に酷くなった‥‥」
　山田は少し苛立ちを見せていたが、副委員長は、余計に酷くなっているのが、自分たちが余計な事を言ったからだと悟っているみたいだ。
　この副委員長、意外とまともだ。
　そのうえで、この女はいくらかの萌え要素を持っている。
　それに山田も、オタクかどうかは分からないが、立派なオタクの素質有りと見た。
　ならばきっと、当然萌えを推進する側の人間だ。
　俺は二人を仲間に引き入れる事ができないかと思い、現状を含めて、少し話をする事にした。
「そもそも、お前たちに言われるまでもなく、俺たちは俺たちなりに、最善と思われる行動をしていたのだ。この九頭竜愛美は、筋金入りのドジっ子だからな。そんなに簡単にはいかない。そこで目指していたのが、ドジをしてもなるべく軽く、そして笑って許せるような状況をつくる事。即ち、こいつを、史上最強の萌えッ子にするつもりで頑張っていたわけだ。そこでだ。今しばらく俺たちのやり方を、暖かい目で見守っていてはくれないだろうか？だいたい山田、お前はどう見てもオタクだろうが。萌えを目指す人を応援する義務があると思うが？それに副委員長、お前は明らかに萌えの素質を持っている。素質という名の資産を持っていて、使わないとかあり得ない。固定資産税だけが重くのしかかってくる事になるぞ。俺が指導してやる。愛美と共に萌えッ子を目指そうではないか！」
　実はこの時、後から知った事実だが、山田はオタクではなかった。
　しかし俺が当然のようにオタクだと言った事で、山田は自分がオタクだと思いこんだ。
「そうだったんだな。僕が間違っていたんだな。分かったんだな。もう何も言わずに、君たちを応援するんだな」

「よし山田、よく言った。これは俺からのプレゼントだ。受け取ってくれ」
　俺はそう言って、さっきトイレで拾った、エロアニメ雑誌を山田に渡した。
　すると山田は、今まで心の奥底に封じ込めていた欲望を解放し、素早くエロアニメ雑誌にかぶりつくと、「ウウー」とうなり声をあげてから、素早く教室を出ていった。
　その迷い無き行動に、俺は感動した。
　だけどあの雑誌、トイレの床に落ちてたんだけどねぇ。
　ちょっと濡れてたりもしてたんだけどねぇ。
　俺はきっと、これから山田の事を、汚物としか見られないかもしれない。
　それでも、お前は立派な漢《おとこ》だった！
　きっと萌えの神様が助けてくれるさ。
　俺は心の中で、山田の明るい未来を、ただ、祈るのだった。
　で、山田の事はどうでもいいとして、問題はこの副委員長だ。
　どうも反応が読めない。
　だが、俺には前に進むしかない。
　俺は、ニヤニヤと不気味に笑う、その女にもう一度話しかけた。
「で、お前はどうするんだ。お前のその、いかした不気味を生かした人生、きっと面白いものになると思うのだが」
　すると副委員長は、少し顔を赤くしてこたえた。
「‥‥そもそも、私は‥‥どうでも‥‥いい‥‥ただ先生が‥‥注意しろって‥‥ふっ」
　なるほどそういう事か。
　愛美に「喋るな」と言った、あの‥‥
「モテない三十代前半独身教師の差し金だったか！」
　俺がそう言うと、教室の外で、少し「ガタッ」と音がした。
　すぐに視線をそちらにやったが、そこには特に人の気配はなかった。
　しかし俺は、誰かがそこにいたと確信できた。
　何故なら、俺は幽霊や超常現象を信じないからだ。
　なんて冗談は置いといて、廊下に出て音のしたあたりを見てみると、そこにはジャージが脱ぎ捨てられていた。
　ジャージのタグには、田中とマジックで書かれてある。
　まあ書かれていなかったとしても、すぐに誰のだか分かる物ではあったが。
　って、うちのクラスの担任、一体此処で何をしていたのだろうか。
　ジャージを脱いで‥‥しかもそのまま逃げるって‥‥
　なんだか深く考えると、怖い事を想像してしまいそうなので、俺は考えるのをやめた。
「とりあえず副委員長、お前に奥ゆかしい日本人女性は似合わない。俺たちと共にこい！」
　俺は教室に戻りながらそう言うと、副委員長の前に右手を差し出した。
　副委員長は、垂れる前髪の隙間からのぞくつぶらな瞳で俺を見つめながら、俺の手を両手で握り締めてきた。
　そして何故か、飴玉を一つ握らされた。
「えっ？施し？」なんて思ったが、きっとこれは了解の気持ちを表しているのだろう。
　俺は少し恐怖を感じたので、勝手にそう思う事にした。
　教室の外の景色は、既に少し赤みがかっていた。
「愛美、じゃあ帰るか」
　俺は愛美の方に視線をやった。

　大人しいと思っていたら、愛美は机に突っ伏して寝ていた。
　俺は少し笑みがこぼれた。
　隙間からのぞく愛美の顔が、とても無防備だったから。
　俺は少しその顔を見つめた後、肩を叩いて愛美を起こした。
「船が出るぞぉ〜」
「ちょっと待って‥‥お肉は最後に入れてよぉ‥‥」
　愛美って、鍋奉行だったのか？
　その後俺は、寝ぼける愛美をなんとか起こし、何故か教室の後ろにある、掃除用ロッカーから出てきた有沢に副委員長を引き渡すと、とてもすがすがしい気持ちで、学校を後にした。
　有沢が掃除用ロッカーの中にいた事は、なんら疑問に思わなかった。

担任田中の陰謀

　萌え萌え委員会は、山田と副委員長を仲間に加え、ますます盛り上がっていた。
「山田なんだな。可愛い子がいっぱいで嬉しいんだな」
　山田はここ数日で、すっかり人が変わったように、立派な漢《おとこ》になっていた。
　ちなみにここで言う漢というのは、「他人からどう思われようとも、カミングアウトし、自分をさらけ出す変態」って意味だ。
　山田はよだれをたらしながら、リカちゃんをなめるように見ていた。
　リカちゃんの事を、こんなにいやらしい目で見られるとは、ある意味凄いと思うよ。
　人間としては終わっているがな。
　流石にリカちゃんも危険を感じたのか、他の人たちと接する時のように、「お兄ちゃん」とは呼ばず、近寄りもしなかった。
　その後副委員長も自己紹介をしていたが、山田の視線に恐怖するリカちゃんを見ているのが楽しくて、すっかり聞くのを忘れていた。
　萌え萌え委員会の集会も終了し、俺と愛美は帰宅しようと、昇降口に向かう廊下を歩いていた。
　すると偶然を装って、担任の田中が俺たちに話しかけてきた。
「おう、こんなところでどうしたんだ？部活か何かか？」
　まったく何を言っていやがる。
　最後のホームルームが終わってから、ずっと俺たちをつけてきてるじゃないか。
「ええ、まあ似たようなもんです」
　俺が適当にこたえると、田中は少し表情をゆがめた。
「そうか。ところで少し九頭竜に話があるんだが、ちょっと職員室まできてくれないか」
　初めからそのつもりだったのかと、俺は思った。
　だったらどうして、ホームルーム中に言わなかったのだろうか。
　一応、愛美に対しての配慮なのだろうか。
　その配慮の為に、俺たちをずっとつけていたと‥‥
　俺は何かしっくりこないものを感じながらも、他に理由は思いつかなかった。
「は、はい。わ、わかりました」
　愛美はそう言って、先生の申し出に対して、コケそうになりながらも了承していた。
　仕方がない、俺もついていくか。
　先生と生徒が話をするのに、本来は何も心配する必要なんてないのだろうが、以前愛美の家に電話をして、喋るなと言った奴だ。
　また愛美に対して、余計な事を言うのではないだろうかと、俺は不安に思ったから。
「おい、神田は帰っていいぞ？」
　すると先生は、ついて行く俺に対して、すかさず帰るように言ってきた。
　だが当然、そんなものは無視だ。
「いえ、愛美と俺は一心同体少女隊なので、一緒に行きますよ」
　俺は父親に教わった、少し昭和なネタを入れつつ、先生の心を解きほぐそうとした。
　しかし全く通用しなかった。
「だがな、やはり他人には聞かせたくない話もあるだろう」
　先生の言葉に、愛美もすぐに反論する。
「わ、私は、久弥くんだったら、聞かれても大丈夫、です‥‥」

　それでも先生はなかなか折れない。
「先生もな、神田がいたのでは話しにくかったりするんだよ」
　此処まで頑《かたく》なに拒否されると、俺は余計に不安になってきた。
　これはどうしても、愛美と一緒に行かないと。
　俺は伝家の宝刀を抜く事にした。
「先生、何かやましい事があるんですかぁ？無ければ大丈夫ですよねぇ」
　こう言われると、やましい事が無い人なら、自分の無実を証明する為に、大概の人は折れるはずだ。
　俺はニヤニヤとした顔を作って、田中を見つめた。
　すると田中は、明らかに動揺していた。
　なんだ？何かやましい事が、本当にあるのだろうか。
　まさかこいつ、愛美に気があるんじゃないだろうな。
　愛美と二人きりになる為に、職権乱用しようとしているのか。
　そもそも萌えキャラは、より大人に受け入れられる傾向があるからな。
　俺が不審の目で見ていると、田中はようやく居住まいを正し、平静を装ってこたえた。
「バカを言うな。仕方ないな、ついてきていいぞ」
　結果としては、俺の狙い通りだったわけだが、俺は此処までのこいつの行動に、一本の揺るぎない意志を確信した。
　愛美への執着。
　登校初日から、愛美の属性を理解し、喋らないよう勧めてきた。
　廊下から教室内を見ていたり、今日ストーキングしてきたり。
　そして今、話があるからと言って、俺を遠ざけようとする。
　俺は先生が生徒と恋愛する事に対しては、別に否定はしない。
　だが、やり方がいただけない。
　そしてなにより、愛美は俺の彼女だ。
　この田中が、犯罪に走らないとは言い切れない。
　俺は気をつけなければならないと思った。
　職員室には、年輩の先生が一人いるだけだった。
　結構微妙な状況だ。
　田中がホームルームで愛美を呼び出さなかったのは、時間を調整する為か。
　人のいない時間に呼び出す為の。
　俺の不信感はますます高まった。
「じゃあ、まあ座ってくれ」
　俺と愛美は、勧められた椅子に座り、田中と向かい合った。
　不信感をもって田中の顔を見ると、交番前の掲示板に張られているような、指名手配されている犯罪者にも見える。
　当然罪状は婦女暴行。
　ああ、こういう奴がいるから、先生が尊敬の対象にならない時代になったのだろうな。
　くそっ！何だか手足が震えてきやがったぜ。
　俺はドキドキしながら、先生の言葉を待った。
「なあ九頭竜、俺は入学式の日、電話でお前の母親と話をした。で、ドジを治す為の方法として、喋らない事を提案した。以前それでドジがある程度治った生徒がいたからな。だけどどうやら、九頭竜はそれを実践していないようだ。どうしてなんだ？」

俺はすぐにでも反論してやりたかったが、とりあえず少し待ってみた。
しかし愛美が、それにこたえる様子は無かった。
ただモジモジと、俺にラブラブ光線を放っていた。
仕方あるまい、俺が話してやろう。
「先生、代わりに俺が言います。確かに愛美は、喋っているとドジが増えます。しかし、だからと言って、喋るなと言われても、それは素直に受け入れられないでしょう。女子高校生ってのは、喋ってなんぼの人種なんですから」
俺がそう言うと、田中の顔は、無罪が確定した犯罪者が見せるような表情に変わった。
「ふっ、でもな、人に迷惑をかけるわけだから、できる限り改善に向けて努力しないといけないのではないか？」
田中の言葉に俺は再び反論する。
「それは分かっています。だから今、クラスのみんなに迷惑に思われないように、別の方法で愛美は頑張っています」
俺がそう言うと田中は、メスのカマキリに食われている、オスのような顔をした。
「なるほど。それはドジを治すって事ではないようだね。ならば結局、将来九頭竜は苦労するのではないか？」
田中はしつこかった。
俺はだんだん面倒になってきていたが、愛美の為に尚も反論した。
「それは大丈夫です。愛美は史上最強の萌えキャラになる予定です。さすれば、全ての人からチヤホヤされて、どれだけドジでも、幸せな人生を送れる事でしょう」
田中もそろそろ面倒になってきたのか、犬のウンコを踏んでしまったから、砂地で必死に付いたウンコを取ろうとしたのに、どうしても溝に入ったのが取れなくて、途方に暮れたような表情をした。
「ならば俺も、しばらくは何も言うまい。ただ、やはりみんなが迷惑に思っているなら、俺は先生としてこの状況を改善せねばならない。もうすぐ中間試験の一週間前に入る。その時に学級会を開いて、クラスのみんなに、迷惑に思うかどうか尋ねようと思う。そこで迷惑に思う人が誰もいなければ、俺はもう何も言わない。しかし迷惑に思う人が何人かいたら、その時は俺の言う事を考えてみてはくれないか」
俺はそう言われ、結局受け入れる事しかできなかった。
保護者から苦情が来たらどうにもならないとか、先生の立場を考えると、まあ当然の結果か。
ただ、俺が約束しただけで、愛美は何も言っていないんだけどね。
とにかくその日までに、俺たちは成果を出せるように、頑張らなければならなくなった。

愛美、萌えの第二ステージへ

　俺は今まで通り、愛美のドジを止めるのではなく、ドジをしても愛美が笑顔でいられるように、とにかくドジを楽しむ方向で頑張ってきた。
　そしたら、愛美の笑顔や反応に、萌えを感じている男子もいるようで、少しずつ効果は表れてきているようだった。
　しかし、大半は今まで通り、面白くないといった顔をするクラスメイトばかりだ。
　実際は、授業が中断されて嬉しい癖に、素直じゃない奴らめ。
　とは言え、もうすぐ行われる「迷惑投票」では、当然「迷惑」だと言ってくるだろう。
　このままでは、俺たちは田中に勝つ事は不可能に思えた。
　クラスメイトがみんな大人だったら、きっと大丈夫なはずなのに。
　笑顔の愛美を見て、みんななんとも思わないのだろうか。
　確かに、愛美の笑顔を見ると萌えるんだけれど、偶にイラっとくる事もあるんだよな。
　それがある限り、クラスのみんなを萌えさせるのは、不可能という事か。
　俺が悩みのメビウスリングの中で迷っていると、隣の冷子が話しかけてきた。
「いい加減、見ていて面倒くさいわね。一人で悩んで解決しないなら、誰かに相談するとか、変態には思いつかないのかしら」
　なるほど、言われてみれば確かにそうだ。
　流石冷子、伊達にツンデレ委員長目指してないな。
「そうか、では相談させてくれ」
「いやよ」
　・・・・・・・・
　今、冷子はなんて言ったのだろうか。
「そ、相談すればいいと言ったのは、冷子じゃね？」
　パニックの中、俺はなんとか冷子にそう言ったと思う。
　すると冷子は、当然のようにこたえた。
「私に相談して、問題が解決すると思うの？」
　もっともです。
「すみませんでしたー！」
　俺は何故か謝っていた。
　で、とりあえず冷子に相談する事は断念したが、相談するってのはアリだと思う。
　俺は頭の中に、何人かの候補者の姿を思い浮かべた。
　まずは本人である愛美。
　これは当然却下だ。
　愛美に問題が解決できるなら、疾《と》うになんとかなっているはずだからな。
　次に有沢だが、これも駄目だ。
　裏ヤンデレが好きな奴の事だから、きっとアドバイスもそちらに片寄るだろう。
　山田や副委員長も、俺が教える側だし、参考になるアドバイスを貰えるとも思えない。
　となると先輩だが、リカちゃん先輩の萌えは天性のものだから参考にはならない。
「真嶋先輩に相談に行くか」
　俺がそう呟くと、待ってましたとばかりに、冷子が立ちあがった。
「光一先輩のところに行くの？仕方がないわね。私がついていって上げるわ。感謝しなさいよね、この、ブラボ

ー神田くん」
　なるほど、そういう事か。
　しかし冷子も素直じゃないなぁ。
　まあそれが、ツンデレであり、萌えというものなのだろうけれど。
「愛美、真嶋先輩のところにいくぞ。冷子、居場所は知ってるんだろ？案内頼む」
「ガッテンだよぉ。久弥くんと冒険の旅だぁ」
　俺は愛美に声をかけると、三人で真嶋先輩の元に向かった。
　って、冒険の旅じゃないんだけどね。
　そう思って出発したわけだが、冷子もどうやら居場所は知らないようで、キョロキョロと冒険さながらに、真嶋先輩を探しながら歩く事になった。
　真嶋先輩を探す冷子は、正に獲物を探す狼といった感じだった。
「今日はきっと、こっちにいる気がする」
　冷子は不気味な笑みを浮かべていた。
　真嶋先輩が同じ場所に留まっていないこの状況を理解すると、冷子はかなりしつこく、真嶋先輩をストーキングしているようだ。
　そこまでして逃げる真嶋先輩、幸せになってください。
　俺にはそう祈る事しかできなかった。
　ほどなくして、普段は誰も近づかないような校庭の隅で、真嶋先輩を発見した。
　冷子の先輩レーダーも凄いが、学校にこんな所があった事に驚いた。
　そして、こんな所にまで逃げている真嶋先輩が、不憫に思えた。
　まあでも、真嶋先輩の問題は、冷子と二人の問題だ。
　俺たちは俺たちの問題を解決しなければならない。
「真嶋先輩こんちは！ちょっと相談があるんですが、いいっすか？」
「ちょっと待ってくれ。この状況をなんとか受け入れるから‥‥」
　真嶋先輩の人生は決まったな。
　でもこんなに愛されているのだから、うまくやれば幸せになれるだろう。
「良かったな、冷子。真嶋先輩は、お前の事を受け入れてくれるそうだ」
「そうね。でも私と光一先輩が結ばれるのは、一万二千年前から決まっていたのよ」
　どこかの偉いおっさんが、何かを成し遂げるのに一番大切なのは「執念」だと言っていたが、俺はそれを目撃している気がした。
　しばらくして、ようやく真嶋先輩が正気を取り戻した。
「僕に相談とは何かな？ストーカーから逃げる方法以外なら、なんでもこたえるが」
「そうですか。では、最近のアニメにいらないものはなんですか？」
　俺はうっかり、関係の無い質問をしてしまった。
　真嶋先輩が、あまりにも元気がなかったので、好きなアニメの質問をと思ったからだ。
　これで少しでもテンションアップしてくれれば。
　しかしそれは、思いのほか効果があった。
「そんなもの、決まっている！萌えないヒロインだ！だいたいヒロインだからと言って、萌えないのに主人公の心を独り占めするとは、思い上がりも甚だしい！普通に考えれば、ツンデレ委員長の方を好きになって然るべきなのに、どうして何も感じないのだ！」
「あ、そうっすか」
　俺は妙な地雷を踏んでしまったようで、真嶋先輩の暴走は続いた。

　それでも、そんなヤバげな真嶋先輩でも、冷子は愛する目で見つめていた。
　本当に愛しているのだなと、俺は思った。
　俺はなんとなく愛美を見た。
　すると愛美は、俺の事を見ていた。
　その目は、冷子とは違っていたが、とても澄んでいて和むものだった。
　さて、暴走する真嶋先輩を、このまま放っておくわけにもいかない。
　俺は喋り続ける真嶋先輩に話しかけた。
「だいたいロリコンってなんだ！高校生から見れば、小学生も立派な恋愛対象だろうが！たかだか五歳違いで批判される筋合いはないはずだ！」
「はいはいそうですね。ではその萌えについて、少し相談したい事が‥‥」
　俺がそう言うと、真嶋先輩はピタッと喋るのをやめ、怪しい目で俺を見てきた。
「ほう、萌えについての相談？なるほど、そろそろ次のステップに進みたいと、そういう事だな？」
　真嶋先輩の言っている意味はよく分からないが、愛美の萌え化の事だろうか。
「えっとですね、かくかくしかじかというわけで、早急に愛美を、クラスのみんなに認められる萌えッ子にしなければならないのです。良い方法はありませんか？」
「なるほどな。田中先生はそんな手を使ってきたか」
　この真嶋先輩すげぇよ、かくかくしかじかだけで、全てを理解している。
　流石に萌え萌え委員会のリーダーだ。
「神田くん、キミなら既に分かっていると思うが、萌えを真に理解できるのは、心身共に成熟した大人だけだ」
　真嶋先輩の考えは、俺と同じものだった。
「はい、その通りだと思います」
「では、それは何故だと思う？」
　何故かと聞かれて、俺は困った。
　萌えとは、大人の中にある子供っぽさだと俺は思っている。
　そして、それを許せるのが、大人であるという考えだ。
　しかし、どうして子供だと、萌えを許せないと思うのだろうか。
　もしかしたら、それは自分が、萌えられる側だからだろうか。
「自分がむしろ萌えられる側だからでしょうか？」
「ふむ。なるほど、そういう考えもあるな。だがそれは正解ではない。神田くん、キミはまだ大人ではないが、萌える事もあるだろう？」
　その通りだ。
「はい、あります」
「萌える条件というのは、整理すればいくつかにまとめる事ができるんだ。一つは、当然子供っぽいと思える事だ。別の言い方をすると、人間は本能として子供の事を可愛いと思う。即ち一つの要因として、可愛いところに萌えると言えるだろう。しかし、子供っぽいだけではそのものには勝てない。たとえば山田くんが「お兄ちゃん」とか言ってなついてきても、萌える事はないだろ？」
　おいおい、少し嫌な想像をしてしまったぞ。
「はい、当然です」
「まあ子供っぽいだけではなく、ビジュアル的にも可愛さが必要だって事だ。そして他にも必要なものがある。それは、その萌え要素に対して、自分が勝っているという事だ。ドジな九頭竜くんを見て、キミは守ってあげたいと思う。即ち、キミは九頭竜くんよりもドジではないと思っているって事だ。天然ボケに萌える人ってのは、自分の方が知識や見識がまともだと思っている」

　なるほど、確かにその通りだ。
「だから大人の方が、より萌えを理解する事ができるんだ。知識も豊富に持っているし、萌えの対象が、無条件で格下扱いできる、年下である場合が多くなるからね」
　流石真嶋先輩、伊達に萌え萌え委員会やってないぜ。
「流石です、真嶋先輩！」
「うむ。という事で、同級生を萌えさせるとなると、それはなかなか難しい。理由は言わなくても分かると思うが、高校一年生には、多くの知識も、正しい見識も、上の立場に無条件になれる歳も、どれも持ち合わせてはいないからね」
　と言う事は、クラスメイトを萌えさせる事は不可能なのだろうか。
　俺が少し心配していると、真嶋先輩はメガネをキラっと輝かせ、ニヤリと笑った。
「ここまで聞いて、少し不安になっているようだね。だけど、萌えさせる事は不可能ではない。現にキミは、九頭竜くんに萌えているのだろう？」
「はい！」
　俺はハッキリとこたえた。
「ではそれがどんな時か思い出してみたまえ」
　俺はどんな時に萌えていたか、思い出してみた。
「それはやはり、可愛い顔や仕草を見た時でしょうか」
「そうだね。それが萌えの真髄だからね。そしてその可愛さを、九頭竜くんは持っている。萌えて当然だ。だけど、ドジっ子属性の場合、逆に腹が立ったりした事はないかな？それが今回の問題を解決するポイントとなる」
　俺は思い出してみた。
「そうですね。一つには、やっぱりショックで沈んでいる時かな。見ていて可哀相だとも思うんだけど、一緒にこっちまで気分が沈んでいくような気がする。他にも、へらへらして、全然反省していないと思える時も。こっちが迷惑被っているのにって」
「そうだ。一つ目は、萌えの要素である、可愛さが欠落している時って事だ。そして二つ目は、自分がなめられていると思われる時、自分が上である条件を欠落させられた時、という事になる。即ち、自分が大人になれなかった時。最近の九頭竜さんなら、可愛さに関しては、きっともう問題無いはずだ。だとすると、後足りないのは、もう分かるね？」
「はい、わかりました」
　そういう事か。
　だけど、反省しつつ、相手に自分の方が大人だと認識させ、負の感情を伝えないで、可愛さを維持する事は可能なのだろうか？
　俺は疑問に思い尋ねてみた。
「しかし、具体的にどうすればいいのか、俺には分かりません」
「そうだな、一言で言えば、九頭竜くんを、反省している可愛い子供だと認識させる事ができれば、全てが達成されると思わないか？」
「そうですね。でもそんな方法あるんですか？」
「ある。それは言霊だ。擬音、擬態、擬声を使いこなす事で可能になる」
　ほう、なるほど。
　ガンガンとか、モリモリとか、ニャンニャンとか、そういう言葉を使う事で、確かに可愛い子供っぽさはアピールできる。
　それを使って、反省すればいいという事か。

「で、具体的に、どんな言霊を使うのですか？」
「フッ‥‥」
真嶋先輩は、ずれたメガネを中指で押し上げると、その答えを俺に教えてくれた。
俺はその言葉を聞いて、「これならいける！」と、本気で思った。

迷惑投票

　いよいよ、真嶋先輩から教わった事を、実戦する日がやって来た。
　今考えると、本当にこれで大丈夫なのかと思えてくる。
　何故か真嶋先輩と話していると、一瞬気分が盛り上がるんだよな。
　後、別れ際に言った言葉も気になる。
「これで、全てのクラスメイトは萌える事だろう。しかし完全に、九頭竜くんを批判する者がいなくなるわけではない。どうしても解消できない感情、嫉妬はどうにもならないからな。どれだけ綺麗な芸能人でも、アンチファンがいるのはその為だ」
　言っている意味は分かるが、愛美をうらやましいとか、愛美に劣っているなんて思う奴がいるのだろうか。
　まあ確かに顔だけなら、愛美は誰にも負けないと、俺の贔屓目には映るわけだが。
　とにかく、今日まで俺たちは、できる限りの特訓をしてきた。
　特訓は、かなり困難を極めた。
　ドジっ子が、自らドジをして、演技をしなければならないからだ。
　日曜日は、朝から晩まで、愛美の部屋で練習した。
　愛美の両親に白い目で見られていたが、コレも愛美の幸せの為だ。
　そしていよいよ、その時がきた。
　学級会の冒頭で、俺たちの特訓の成果が試される
　ロングホームルームの時間になり、田中が教室に入ってくる。
　そして出欠を取り始めた。
　愛美の名前が呼ばれた時、俺たちの作戦は決行だ。
「神田！」と俺の名前が呼ばれ、俺は「はい！」と返事をする。
　いよいよ次だ。
「九頭竜！」
「はーい！って、あわわわわ～」
　愛美は手を挙げて返事をし、立ちあがった勢いでよろけた。
　よろけたのは、言うまでもなく演技である。
　そして当然、此処までの言葉も、萌えを意識したものだ。
　これは真嶋先輩に教わったものでは無いが、俺はそれだけでは不安だったので、他にも色々アレンジを加えていた。
　愛美はよろけて机を掴み、そのまま机ごと、コケる手はずになっている。
　実は愛美は、ドジは多いが、自分自身に直接被害が出る事はほとんど無い。
　要するに、怪我をしたりする事は少ない。
　だけど今日は演技なので、そのあたり俺は心配していた。
　しかしどうやら、うまい具合にコケたようだ。
　そして被害は全て、俺に来るように計算していた。
　俺は愛美からの、あらゆる攻撃を受けとめた。
「はう～」
　愛美のその言葉を受けて、俺は立ちあがり、感情的に愛美に言葉をぶつけた。
「愛美！迂闊な事をするなといつも言っているだろうが！」
「ふぁい？」
　ヤベッ、少しこの表情と台詞は萌えるぜ。

俺は、気持ちが顔に出そうになるのを我慢して、次の台詞を言う。
「お前はアホの子かよ！」
「ぷっくぅ～そんな事ないもん！」
愛美はそう言って、ほっぺを膨らませる。
だからマズイって。
俺が萌えてどうするんだよ。
とは言え可愛すぎる。
俺はなんとか自分を抑えて、死に物狂いで最後の台詞を言った。
「今日のおやつは抜きだからな！」
すると愛美は、少しだけすねて俯き、真嶋先輩から教わった言葉を言った。
「しょぼーん‥‥」
‥‥た‥‥確かに‥‥コレは、クルものがあるな‥‥
俺は少し顔を赤くして、席に着いた。
チラッと愛美を見ると、絶妙な表情で、倒れた机を元に戻していた。
うん、バッチリだ。
クラスメイトの多くも、完全に愛美に絆された表情をしていた。
これで萌えない奴がいたなら、それはきっと人間じゃない。
俺は萌える気持ちを抑えて、これから始まる判決の時を静かに待った。
愛美の授業妨害も収束し、出欠も取り終えて、いよいよ今日のメインイベント、愛美の事を、迷惑だと思うのかどうかの投票が行われる事になった。
今更ながらに思うのだが、こんな投票をするのって、ある意味ただのイジメじゃないか？
でも逆に、真っ当な高校生なら、迷惑だとか言えない気がするし、俺たちにとってはいいのかもしれない。
いや違うな、更に逆に考えれば、それを言う事が親切だと思う可能性もある。
どっちにしても、投票を今更止める事はできない。
俺は覚悟を決めて、教壇に立って議長を務める山田の顔を見た。
「えっと、今日は、特定の人が頻繁に起こす、授業妨害について話しあうんだな」
つか、山田が議長か。
なら、投票の前に、こちらに有利になるように、話を進めてもらう事もできるんじゃないかな？
俺は期待の視線を山田に送った。
しかし山田は俺の愛を受け入れず、ツンと視線をそらせた。
なんだ？山田にふられたみたいで、俺すっごく駄目な奴みたいなんですが。
「では、学級会を始めるんだな。今日はまず、授業妨害につてなんだな。ある生徒のドジのおかげで、再三にわたって授業が中断してるんだな。それに対して、不満を持っている人がどれだけいるのか、まずは現状を把握したいんだな。正直迷惑に思っている人は、手を挙げてほしいんだな」
いきなりかよ。
こんなやり方じゃ、手を挙げる奴がいて当然だろうが。
何を考えている山田！
もしかして、また先生に取りこまれたんじゃないだろうな。
俺の予想通り、クラスの約半数が、遠慮がちに手を挙げた。
「やっぱりいるんだな。では、この事については解決なんだな。迷惑に思う人がいる場合、本人は先生の言う事を聞いて、改善に全力を尽くすと約束してるんだな」
おい、どういう事だ。

　現在どういう状況なのかとか、一切の説明もさせてくれないのかよ。
「異議あり！」
　俺は此処で、諦めるわけにはいかなかった。
　これには、俺の萌える将来がかかっているのだから。
「約束を破るつもりなんだな？」
　山田は、やはり完全に先生側って事か。
　いいだろう、勝負してやんよ。
「約束？考えてくれと言われたから了解はしたが、考えても、こんなやり方は受け入れられなくてな。まずは俺の話を聞いてもらってからだ」
「でも、こんなにも迷惑に思っている人がいるんだな」
「ふっ、山田よ、なら山田、お前の存在が迷惑だと言われたら、お前は死ぬのか！？」
　山田は一瞬たじろいたが、そんなはずはないと思ったのか、息を吹き返したように、俺に宣言してきた。
「存在が迷惑とか、あり得ないんだな。そんな事になったら、僕は死ぬんだな」
「そうか、なら皆に問う。山田の存在が迷惑な人！？」
　俺がそう言うと、クラスのほぼ全員が、一斉に勢いよく我先に手を挙げた。
　俺はニヤリと笑って、山田を見た。
　山田は愕然とした顔で肩を落とすと、「そんな‥‥」と言って、更に膝を落とした。
「山田！いや、美沙太郎！俺はな、人に迷惑に思われても、美沙太郎は美沙太郎らしく生きる権利があると思うんだ。安心しろ、俺はお前が迷惑だが、決して嫌いじゃないぞ。もう一度、共に手を取り合って、明日に向かって生きようじゃないか」
　俺がそう言いながら山田の前に歩いて行くと、山田は祈るように手を合わせて、神を見るような目で俺を仰ぎ見た。
「神田くん、ゴメン。僕が間違っていたんだな。もう迷わないんだな」
「うんうん」
　俺はそう言いながら、山田の肩を叩いた。
　はい、一丁上がり～
　さて、山田はまあ楽勝だが、問題は、手を挙げた生徒たちだ。
　なんとかして、こいつらの気持ちを変えなくては。
「では、今回の事を説明させていただきます」
　俺は此処までの経緯を、入学式の日の電話のところから、全て順を追って話していった。
　喋らないように言われた事。
　それが愛美の精神に重くのしかかっている事。
　だから別の方法で、ドジを減らす努力をしている事。
　そして今日の、迷惑投票の意味を。
　これらを全て話す事で、多くの同情も得られるだろうし、先生のやり方に疑問を持つ者もいるだろう。
　これでほとんどが、こちらの味方をしてくれるに違いない。
「どうだろう、まだ全ては話していないが、これでもまだ、愛美は先生のやり方を受け入れなければならないと思うか？そう思う人は、何故そう思うのか、意見を聞かせてほしい」
　迷惑投票で全てを決める趣旨からはずれているが、これはもう迷惑投票ではない。
　愛美がどうするべきか、決定する為の議論なのだ。
　思った通り、此処で手を挙げて、意見する者はいなかった。
　マルかバツかと聞かれれば、それに対しては答えやすいが、意見を言えと言われて、それにこたえるには、感

情だけでは駄目だからな。
　どうやら勝ったな、と俺は思った。
　しかし、戦いはまだ終わっていなかった。
　敵の大将、田中が立ちあがった。
　つか、ずっと教室の隅に立って、やり取りを見ていたんだけどね。
「先生にも、一つ言わせてくれ。先生は、何も九頭竜をイジメたいわけじゃないんだ。喋らないように言ったのも、それでうまくドジが治って、今幸せに暮らしている生徒もいる。そう、ドジはちゃんと治るものだし、今つらくても、将来は幸せになれるんだよ。現在九頭竜がやっている方法も、別に否定しているわけじゃない。でも、先生のやり方の方が、よりベストに近いんじゃないかと思うんだけど、みんなはどう思うんだ？」
　実績を言われると、こちらとしてはなかなか厳しい。
　それに今度は逆に、こちら側が感情だけの反論しかできない。
　やりたくないから、やっていないだけだからな。
「どうだ？先生のやり方の方がいいと思う者はいるか？」
　田中がそう言うと、何人かの女子生徒が手を挙げた。
　田中はニヤリと笑って、俺に視線を向けた。
　くっ、また二択に戻して、挙手しやすくされてしまったか。
　そして、そう主張させるだけの理由と建前も、しっかりと与えられている。
　たとえ此処で理由を聞いても、先生の発言をそのままなぞるだけで、全て済んでしまう。
　ドジという病気を治す方法があって、今だけ我慢すれば治ると言われているのだから、愛美の為に治した方がいいと主張もできるからな。
　だが、それを本人は望んでいないし、俺も望んでいない。
　だいたいドジは病気ではなく、萌え要素なのだから。
　それにしても、「喋らないように」って言われて、それがたとえドジを治す為だとしても、それを許容できる奴がいる事に驚きだ。
　それに、本来授業が中断されるのは、学生にとっては実はありがたいはずだ。
　学校の授業なんて、ただ退屈なものの方が多いから。
　進学を目指している奴らはみんな、塾に通ったりして、それぞれ勉強している。
　学校の授業は、形だけのものになってきているんだ。
　それなのに、それを妨害される事が迷惑だと言うのには、建前がほとんどだろう。
　ならば同情をかえば、そんな建前はすぐに取り下げてもらえる。
　現に田中が言うまでは、みんな俺に意見できなかった。
　そう、ぶっちゃけみんなは、この事に対して、どうでもいいと思っているはずなんだ。
　俺もきっと、関係者でなければ、どうでもいいからな。
　なら、彼女たちに手を挙げさせたのは、何が原因だ？
　俺は、真嶋先輩の言葉を思い出した。
　嫉妬‥‥か‥‥
　可愛い愛美に嫌がらせしたいって事か。
　ならば‥‥
「確かに、愛美が先生の言う事を聞いたら、すぐにパーフェクトな女になるだろうな。愛美がドジしなくなったら、元々可愛いし、性格はいいし、実はかなり賢いし、全ての男が放っておかなくなるのか。ああ、俺は俺だけの愛美でいてほしいのに、学園のアイドルになっちゃうかもなぁ〜。俺は勉強嫌いだから、偶に中断して気分転換もいいと思っていたけれど、みんなしっかり勉強したいみたいだし、仕方がないのかなぁ〜」

俺がそう言うと、手を挙げていた女子たちが、少し辺りを見回していた。
そしてそんな女子たちに、他の生徒たちが注目する。
手を挙げていた女子たちは、目当ての男子の反応を見たり、他の生徒から向けられる非難の目にオロオロし始めた。
やはり、クラスメイトの多くは、本心では愛美の事を、迷惑に思っていなかったのだ。
居心地が悪くなってきたのか、手を挙げていた女子たちは、ゆっくりと、挙げていた手を下ろし始めた。
そして間もなく、手を挙げる者は、いなくなった。
どうやら田中も、もう手がないようで、一つ溜息をついてから、窓の外を眺めていた。
俺たちは、なんとか勝利していた。

リカちゃんのテスト勉強

　俺は別に、萌えを推進したいわけではなかった。
　ただ、萌えキャラである愛美に、いつまでも萌えていたかっただけだ。
　だからぶっちゃけ、萌え萌え推進委員会の活動に、興味などはない。
　だけど、何故かここに来れば、俺はやる気に満ちあふれるのだった。
「よし、萌えの為に俺はやってやるぜ！」
　俺たち委員会メンバーは、空き教室に机と椅子を持ってきて、中間試験対策として、一緒に勉強をしていた。
　真嶋先輩は、見た目通り、どうやら勉強はかなりできるようだ。
　美剣先輩は予想通りバカだったが、そもそも萌えキャラでもなんでもないし、委員会での役割も別なので、勉強する必要はない。
　美沙太郎と副委員長は、一応勉強はできるようで、特に俺が手を貸す必要はなかった
　有沢と冷子も、先輩たちを愛する気持ちで、計り知れないパワーを発揮する。
　と言う事で、問題は、愛美とリカちゃんである。
　愛美に関しては、俺にできるのは、無事にテストを受けさせる事だけだ。
　予備の鉛筆や消しゴムの用意、後は遅刻しないようにする事くらいか。
　それらは今できる事ではなく、となると、今なんとかしなければならないのは‥‥
　俺は向かいに座るリカちゃんを見た。
　あどけない顔で、リカちゃんが俺を見つめている。
「お兄ちゃん、リカは何すればいいの？」
　いや、何するって、勉強しろよマジで。
「そうだねぇ～じゃあまずは、数学の例題でも解いてみようか？」
「うん、分かったぁ～」
　まったく、どうして俺がリカちゃんに勉強教えにゃならんのだ？
　いくら俺でも、三年の問題なんて分からんっての。
　まあ教科書があるから、ちゃんと読めば、理解できないものでもないが、俺自身の勉強はどうなるのだろうか？
　でも、リカちゃんに言われると、俺はどうしても断れなかった。
　だって、やっぱり超可愛いんだもん。
　それで勉強を教える事になったわけだが、リカちゃんの学力は、壊滅的なものだった。
　どうやって高校に合格したんだ？
　どうやって進級できたんだ？
　全ては謎だが、間違いなく不正が何処かにあったのだろう。
　リカちゃん自身が不正をする事は考えられないから、それを行った人、お疲れ様です。
　俺は、リカちゃんを思う何処かの誰かに、敬意を表した。
　それにしても、やはり勉強は大変だった。
「お兄ちゃん、この答えなぁに？」
「えっとそれは、この式に当てはめて‥‥Ｘ＝５で、Ｙ＝２だな。って、自分で解かないとダメだよぉ～」
　何故か答えを教えてしまったり‥‥
「お兄ちゃん、リカってやっぱりツインテールが似合うかな？」
「そうだな、怪獣になりたいなら、それもいいかもね」
　と、訳の分からない会話をしたり‥‥

「お兄ちゃん、美沙太郎って気持ち悪いよね」
「奴にだけは近づいちゃダメだよ。妊娠しちゃうからね」
　と、世界の常識を教えたり‥‥
「お兄ちゃん、リカの誕生日はいつだかわかる？」
「一九八二年五月三日かな？」
「それ、前世のリカの誕生日だよぉ～」
　など、とても充実した時間を過ごした。
「これだけ勉強すれば、きっと大丈夫だね」
　俺がそう言うと、リカちゃんは笑顔で大きく頷いた。
　後で振り返ってみると、この時、どうして俺は、大丈夫だなんて思ったのだろう。
　理由は分からないが、とにかくこの時は、なんの心配もしていなかった。

　試験の前日、俺たち萌え萌え委員会のメンバーは、再び集まって、中間試験への最終チェックを行っていた。
　俺はまあなんとか間に合ったし、愛美はトラブルが無ければ楽勝だろう。
　問題は、リカちゃんだった。
　俺が作ってきたテストをやってもらったが、清々しいくらいに丸が一つだけだった。
　おかしい、何故あの時あんなに勉強したのに、こんな事になってしまうのだろうか。
　俺は再び、その辺から参考書を集めて、リカちゃんに勉強を教える事にした。
「えっと、まずは数学だ。けんたくんは、百円持っています。回転寿司屋で、二百円皿のイクラとウニを、四皿ずつ食べました。さて、この後けんたくんはどうなったでしょう？」
「えっとね、うんとね、持っていたスマートフォンでね、店員を殴って逃げた」
「正解！」
　なんだ、問題無いじゃないか。
　こんなに難しそうな、俺には理解できない問題でも、あっさり正解だもんな。
　一応、もう一問出してみるか。
「じゃあ次ね。三角竜とはいったい何の事？」
「そんなの、生まれたばかりの妖精さんでも分かるよ。それは恐竜のトリケラトプスだね」
「正解！」
　やっぱり問題無いな。
　この問題も、俺には数学の問題とすら分からなかったのに、凄いなおい。
　まあ三年の勉強だから、分からなくて当然だけど。
「じゃあ次は、英語の問題ね」
「英語は得意だよ～」
　ほう、そうなんだ。
　リカちゃんだから、お菓子作りが得意なんだと思っていたよ。
「ほにゃららぺらぺらほにゃら～ら、訳すと？」
「私はヤンバルクイナさんが好きです。でも、ニューギニアヒメテングフルーツコウモリさんの方が、もっと好きです、だよ～」
「おお～！正解だ！」
　これはマジで凄い。
　俺なんか、自分が言葉を喋っている感覚すらなかったのに。
　英語も進化してるんだな。

「次は世界史いくよ」
「うん、お兄ちゃん、ドンドンきちゃってｗ」
「西暦、二八〇一年、銀河連邦が成立しましたが、銀河連邦が崩壊したのは、西暦で言うと何年でしょう？」
「えっとね、三一一〇年かな。ちょっと自信ないけど～」
「正解だよ～凄いねぇ～」
　俺は感動して、リカちゃんの頭をなでた。
　リカちゃんって実は、超のつく天才なんじゃね？
　もしかしたら、成長力を全て脳に持っていかれているのかも。
「じゃあ次で最後だ。最後は現国ね」
「現国は苦手だけど、リカ、ばんがっちゃうよ」
　ほう、現国が苦手なのか。
　でも、此処までこれだけ正解したんだから、とりあえず、一番難しそうな問題を出してみるか。
　この問題なんか、俺には問題の意味すら分からないからな。
「あなたは、萌えッ子と言われていますね？」
「うん、言われているよぉ～」
「だから何？」
　さあ、リカちゃんは正解できるのだろうか？
「ん～‥‥髪の色がオレンジのキャラは、空気が読めない、だったかな？」
「おお～すっげぇ～リカちゃん、マジでヤバイよ」
　俺はがむしゃらにリカちゃんの頭をなでた。
　これだけできれば、全教科百点も夢ではないだろう。
　たとえそうならなくても、学年トップは間違いないな。
　俺は確信していた。
　しかし、後日返ってきたテストの点数は、惨憺《さんたん》たるものだった。
　どうしてこうなった‥‥

目覚める二号さん

　無事中間試験も終了し、俺は楽しい学園ライフを満喫していた。
　試験の結果は、俺は学年三位で、愛美はなんと一位だった。
　愛美が順調に試験を受けられれば、これくらいは全く不思議ではない。
　それよりも、俺が学年三位とは、まったくもって不甲斐ない。
　愛美には負けるとしても、まさか美沙太郎にまで負けているとは。
　リカちゃんのせいにはしたくないが、あの勉強会が、俺にとって駄目だった事は疑いようがない。
　まあでも、萌え萌え委員会の目標もクリアしたし、何より愛美の一位が嬉しかった。
　愛美が一位を取れたって事は、致命的なドジをしなかったって事だ。
　これは、パーフェクトドジっ子には、重要な条件と言えるだろう。
　俺も将来を考えると、今までの愛美では不安があったからな。
　この調子なら、結婚も十分視野にいれて付き合えるというもの。
「むふふふ‥‥」
　ヤベっ、喜びが口から出ちまった。
　愛美がこの場にいなくて助かったぜ。
　実は俺は、学校では、と言うか愛美が外出中は、常に愛美の傍にいる。
　理由は、もちろん愛美と一緒にいたいのもあるけれど、放っておくと心配だからだ。
　だけど最近、大きなドジはしなくなってきたし、俺以外にも話しができる友達が、クラスに何人かいる。
　友達と言えるのかどうかは微妙なところだけれど、少なくとも、今までのように、ひとりぼっちになる事はない。
　冷子や副委員長には、感謝しなければな。
　そんなわけで、俺は珍しく一人で、購買部へとおやつを買いに来ていた。
　我が校の購買部は、何故だかわからないけれど、駄菓子が充実している。
　駄菓子なんてものは、子供の食べ物というイメージがあるから、もしかしたら、萌えグッズの一つと言えるのかもしれない。
　のど飴をなめている女子と、サクマスタイルの缶に入った飴をなめている女子と、どちらが萌えるか考えれば、その意味が分かるだろう。
　なのにそれを、この萌芽高校の中で売っているのは、俺にしてみれば、学校の七不思議の次に不思議な事と思えた。
　まあ、七不思議の一つも知らないけれど。
　あえて一つ言ってみれば、「奇怪、廊下に脱ぎ捨てられたジャージ」とかになるのだろうか。
　それとも、「高校に通う幼児、リカちゃん」とか。
　探せば以外と不思議なんて、何処にでも転がっているものなんだな。
　それに比べれば、駄菓子の事なんて、ただ利益を出す為だと推測できてしまう。
　俺は結局、何かを不思議に思う事もなく、駄菓子の横に置いてあった女性用下着を、本能の赴くままに購入していた。
　って、なんで駄菓子の横とか、買いやすい位置にそんな物が置いてあるんだ！
　ついうっかり買っちまったぞ。
　これは俺の、人生最大の汚点となりかねない。
　早急に記憶自体、削除してしまわなければ。
　そう思って、俺は頭を叩きつけるに丁度良さそうな壁を探していると、何処かで見た事のある女子が、俺の

事を、夢見る少女のような目で見つめていた。
　もしかして、ブツを買うところを見られてしまっていたのか！
　俺は死にたくなったが、目の前の女子は、そんな事は全く気にしていない様子で、普通に話しかけてきた。
「あの‥‥私、養殖科の者なんですが‥‥」
　どこかで見た事があると思っていたら、萌え萌え委員会の先輩、二号さんだった。
「あ、二号さん、こんにちは」
　二号さんとは、なんとなく呼び方としては微妙だが、養殖科の方々は、番号によって呼ばれている。
　理由は、真嶋先輩曰く、「天然科の萌えッ子以外、人間として認めない」だそうだ。
　要するに、名前を呼ぶに値しないと。
　俺としては、ちゃんと名前で呼びたいのだけれど、養殖科の人は、萌え萌え委員会のメンバーに、名前を教える事を禁止されているので、呼ぶ以前に、知る事もできなかった。
　って、何でこんな掟があるんだよ。
　養殖科の人達が可哀相じゃないか。
　同じ萌えを愛する者同士、一緒に仲良くすればいいのに。
「あの、私って、どうしたら萌えッ子になれるのでしょうか？」
「えっ？」
　つかいきなり、萌え萌え委員会にとって、核心に迫る質問だな。
　それにそんな事、俺に聞かれてもねぇ。
「俺、まだ委員会入って間もないですし、そういうのは、真嶋先輩の方が詳しいと思いますよ。真嶋先輩に聞いてみたらどうですか？」
　だいたい、萌えを養殖する事なんてできるのだろうか。
　制服萌えとかなら、自分に似合う制服を探したりして可能かもしれないが、目指す萌えによっては、あのメジャーリーグで活躍する日本人選手が、十年連続で二百本安打を達成するよりも難しいし、素質が必要だと思うのだが。
「カイザー真嶋様には、もう相談しました。そしたら、神田二等陸尉に相談するように仰せつかりまして」
　おいおい真嶋先輩、あんた養殖科の人に、カイザーとか呼ばせているのかよ。
　前々から思っていたけれど、完全に変態だよな。
　つか、俺って二等陸尉なんだ。
　一応士官なのは、萌え萌え委員会のレギュラーメンバーとして、とりあえず認められているって事かな。
　全然嬉しくないけど。
「そうですか。で、何萌えを目指してるんですか？」
　聞いて俺にどうこうできるとも思えないが、一応聞かなきゃ始まらないからな。
「はい、メガネ萌えです」
　メガネ萌えね。
　でもこの人、メガネかけてないよね。
「だったら、メガネかけたらどうですか？」
　俺がそう言うと、二号さんが俺を見る目が、「何を言っているんだこのクソガキは？」みたいな目に一瞬変わった。
　俺は何か、間違った事を言ったのだろうか。
「私の視力は、別に悪くないわよ。神田二等陸尉、メガネは視力が悪い人がかけるものなの。ホント、お子様は何も知らないのね」
　どういう事だろう、日本語で話しているはずなのに、俺には、この人が何を言っているのか分からないんだが

。
　だけど少しだけ、萌えを感じてしまったぞ。
　俺を子供扱いしてホクホク顔とか、ちょっとクルものがあるな。
「いやでも、メガネ萌えを目指してるんですよね？だったらメガネをかけないと始まらないんじゃないんですか？」
「プッ、神田二等兵、ちゃんと理解してもらえてないみたいねｗ」
　うわっ、完全に俺を格下扱いしやがった。
　それにしてもなんだこの変わりようは。
　凄く大人しそうで腰の低い感じの人かと思っていたら、ひとたび相手が下だと思うと、一気にポテンシャルあげやがって。
　今俺の顔に、戦闘力を測れるアレがついていたら、きっと爆発しているぞ。
「そ、そうですね。えっと、メガネ萌えについて、詳しく教えていただけませんか？」
　どうやら俺は、メガネ萌えについて、認識が間違っていたようだ。
　その辺り、しっかり確認しなければ。
「何を言っているの？神田練習生頑張れ！メガネに萌える人に決まってるじゃない」
　‥‥なるほど‥‥お前が萌えるんかい！
　俺は声に出してそう言いたかったが、なんとか心の中に押しとどめた。
　しかしそうなると、養殖科にいる必要はあるのだろうか。
　萌え萌え委員会の規定では、萌える側は男子だけって項目は無かったはずだ。
　だったらすぐに、こちら側の人間になれるはずなんだけれど。
「えっと、二号さんは、メガネをかけた男子が好きなんですよね」
　俺は、当然そうなのだろうと思っていたが、一応確認してみた。
　すると、何気にヤバイ反応をした。
「プンプン！久弥さん、何を言っているの？嫌いに決まっているじゃない！」
　じゃあなんで、メガネ萌え目指してるんだよ！
　俺は再び叫びたくなったが、なんとか口の中に押しとどめた。
　これじゃそもそも、萌え萌え委員会に入っている意味がわからない。
　だいたい、「メガネ萌え～」なんて言っている萌えッ子って、想像がつかないぞ。
　つかこの二号さん、このままでも意外に萌えッ子じゃないか？
　萌え萌え委員会に入っているだけあって、もともと顔は可愛いし、これだけのボケをかましているのに、本人全く自覚無しの天然だし。
　それに最初は凄くか弱い感じだったのに、上に立った時のこのギャップ、完全に「姉属性」の萌えッ子じゃないか。
　しかし、嫌いなメガネ萌えの萌えッ子を目指しているわけだから、その辺りの理由を聞いておかないとな。
「どうして、メガネをかけた男子が嫌いなのに、メガネ萌えになりたいんですか？」
　すると少ししょんぼりして、少しすねたように話してきた。
「カイザー真嶋様が、私の事を、素質の無駄使い女って言ったのよ。酷いよねぇ。久弥さんはあんな人のようにはならないでね。ああ、心配だわ」
　‥‥意味不明‥‥
　真嶋先輩の事を嫌いなのは分かった。
　どっちが先かは分からないが、プラスメガネも嫌いだ。
　だからメガネ萌えの萌えッ子になりたいって‥‥

これを好き嫌いで分析すると、今はお互い嫌いな者同士。
或いは、壁のある状態。
それを、お互いに近づいて、仲良くなろうと、まあそういう事か。
だけど、難儀な性格だな。
人間ってのは、嫌いな人から好かれようとか、嫌われているのに好きになろうとか、普通は思わないものだ。
なんせ面倒だし、ストレスもたまるもんな。
好意を持ってくれる人を好きになった方が、手っとり早いし幸せになれるだろう。
もしかしたらこの人は、姉属性以外に、天邪鬼属性もあるのかもしれない。
即ち、広い意味でのツンデレ。
あれ？と言う事は、委員長風ツンデレ属性に近い性質って事か。
なるほど、真嶋先輩にとって二号さんは、正に二号さんになり得る人だったって事か。
いや、きっとその段階では、一号さんにもなり得る人だったに違いない。
今ではもう時既に遅しだが、もしかしたら、真嶋先輩が二号さんに言った言葉の意味は、小学生風の、愛の告白だったのかもしれない。
それで結果的には嫌われたと。
でもちょっと待てよ。
現在二号さんの行動を分析すると、真嶋先輩の事を好きになろうとしていて、そして好かれようとしている事になるんじゃないか？
天邪鬼な二号さんもまた、嫌いは好きって事なのかもしれない。
恋愛は駆け引きとか言う人がいるけれど、本当だったんだな。
真嶋先輩が、後一カ月冷子から逃げる事ができていれば、この人が彼女になっていたのかもしれないのだから。
まだ冷子が真嶋先輩の彼女って、決まったわけじゃないけれど。
「二号さん、あなたがメガネ萌えになりたいのは、真嶋先輩を萌えさせたいからですか？」
俺はそう聞いた瞬間に、しまったと思った。
なんせ二号さんは、天邪鬼属性だから、そうとはこたえてくれないだろうから。
「何を言っているの～？あの人を虜にして、ちゃんと謝れる人にしたいだけよ」
俺はホッとした。
天邪鬼だから否定はしているが、言っている事は同じで、真嶋先輩に好かれたいって事。
それは即ち、二号さんも、真嶋先輩に好意を持っているって事なのだろう。
それにしても、天邪鬼属性、ややこし過ぎるぞ。
ツンデレなら、「あなたの為じゃないんだからね」とか言っても、顔を見ればだいたい分かったりする。
だけど天邪鬼属性は、自覚が全く無いから、話を理解するだけでも大変だ。
ん？自覚が無いから？
そうか、真嶋先輩は、何故自分でアドバイスしなかったか。
それは、真嶋先輩がアドバイスできないから。
しかし俺ならば、第三者なのでぶちまけても大丈夫。
よし、ここは真嶋先輩の狙い通り、二号さんに自覚させてやろう。
「二号さんって、凄く真嶋先輩の事を、愛しているのですね」
二号さんは、顔を真っ赤にして、俺の顔を呆けた顔で見ていた。
やっぱり、そうだったんだな。
「そ、そんなわけ、な、ないじゃない。久弥さん、変な事言うと、お姉ちゃん怒るよ？」

「すみません。お似合いだなぁって思っちゃってｗもう言いません」
「も、もう。久弥さんったら」
二号さんは、挙動不審だった。
目が泳いで、手足を持てあましていた。
天邪鬼属性は、恋を自覚したところから、ツンデレ属性にジョブチェンジするのか。
そして姉属性は、きっと委員長属性に変換可能だ。
冷子、ゴメンな。
俺は、お前のライバルを目覚めさせちまった。
これから始まる三角関係に、俺はとりあえず、笑いが止まらなかった。

　二号さんは、早速真嶋先輩に、「私、あなたの事なんて、なんとも思ってないんだからね」なんて言ってしまったらしい。
　これで確実に、血みどろの戦いが繰り広げられる事になるだろう。
　天然ボケのストーカー、冷子が勝つのか、それとも、全てを否定する天邪鬼、二号さんが勝つのか、はたまたどちらでもない結果になるのか、俺はどうでも良かった。
　とりあえず、とにかく晴れて二号さんは、萌え萌え委員会のレギュラーメンバーに格上げとなった。
　で、ようやく名前を教えてもらったんだけれど‥‥
「私は、メガネ萌えの、真嶋ヒカルよ。皆さん、よろしくね」
「えっ？ま、真嶋？」
　どういう事だ？
　苗字が一緒だけれど、偶々だよね？
「ヒカル姉さん、素敵な女性になりましたね」
　ってやっぱり、姉弟なのかよ。
　しかも真嶋先輩、メガネの奥で輝く目は、正に恋する乙女の目じゃねぇか。
　くっそ、誰か説明してくれぇ！
　俺が頭を抱えて、心の中で叫んでいると、愛美が話しかけてきた。
「久弥くん、良かったね。真嶋先輩、ヒカル先輩と、仲直りできたみたいで」
　って、お前、知ってたのかよ！
「えっと、二人は姉弟って事で良いんだよね？」
「あっれぇ～久弥くん知らなかったの？どう見てもそっくりだよぉ」
　いや、全然似てないし。
　もしもそっくりだって言うのなら、真嶋先輩が可愛いって事になるじゃないか。
　それだけは絶対に認められない。
　ああ～神よ、俺は何を信じて生きていけばいいのですか。
　まあそんな事を思った俺だったが、そもそもどうでもいいと思っていた事だし、俺はあっさりと気持ちを切り替えた。
「で、今日はヒカル先輩の事以外に、何か重要な問題があると聞いたのだが？」
　俺はそう言いながら辺りを見回すと、何故か皆、深刻な顔をしていた。
　いったいどうしたというのだろうか。
　つか、そういえば、リカちゃん先輩の姿が見当たらない。
　いくら小さいとは言え、俺の視界に入らないくらい小さいわけではなかったはずだ。
「今日は、リカちゃんいないね？何処かで迷子になってるのかな？それともお菓子につられて、誘拐でもされちゃったか？」
　俺は、沈む場の雰囲気にいたたまれず、軽く冗談を言ってみた。
　すると真嶋先輩が、今にも狂乱しそうな表情で、ボソッとつぶやいた。
「その程度の事なら、別にどうという事はなかったんだ‥‥」
　おいおい、誘拐されているかもって言ったのに、それがその程度？
　リカちゃんに、何かとんでもない事が起こったのか？
　俺は心配になった。
「リカちゃん、そんな事になってるんですか！なんとかしないとヤバイじゃないですか！」

俺は熱くなっていた。
あの可愛いリカちゃんが、誘拐よりも酷い状況だと聞かされたのだから当然だ。
「おい冷子、お前は知っているのか！？」
俺は、深刻な顔をしている人の中で、一番聞きやすそうな冷子に詰め寄った。
すると冷子は、俺から視線をそらし、少し怒っているようだった。
「ふんっ」
ああ、ヒカル先輩の事ね。
でも姉弟だったんだからいいじゃないか。
「冷子、よく考えるんだ。真嶋先輩と可愛いチワワが仲良くしていて、お前はチワワにやきもちをやくのか？奴らはどれだけ頑張っても、結ばれる事はない。安心しろ」
俺がそう言うと、冷子の表情は一気に晴れわたった。
だがそれを悟られないように、必死に隠そうとしていた。
「そんな事は分かっているわ。ただ、鼻腔内に刺さった鼻毛を、どうやって抜いたらいいか考えていただけよ」
「そ、そうか。それはさぞ辛いだろうな」
「そ、そうよ。決して鼻毛を切る時に、一緒に鼻腔内を切っちゃって、痛いわけじゃないんだからね」
ほう、努力の成果か、だいぶツンデレ風味も板に付いてきたな。
でも俺は、ツンデレよりも、天然ボケの方が好きだけどね。
「で、リカちゃんはどうしたんだ？」
俺は改めて、冷子に疑問をぶつけた。
すると冷子は俯き、言葉を絞りだすように、一言つぶやいた。
「死んだわ‥‥」
「えっ‥‥」
俺はショックだった。
いや、ショックなんてものではなかった。
あんなに可愛くて、あんなに子供で、バカだけどあんなに萌える人、おそらく全世界探しても、きっと他には存在しないだろう。
ある意味天然記念物よりも貴重な先輩だった。
俺は少し涙が出てきた。
くそっ、俺は、結局リカちゃんに、何かしてあげる事ができたのだろうか。
こんな事なら、もっともっと、頭をなでてあげるんだった。
高い高いもしてあげれば良かった。
「そうだな。ある意味死んだと言っていいだろう」
「えっ？」
俺は真嶋先輩の言葉に振り返った。
今の言い方だと、本当に死んだわけではないって事か？
「まったくリカちゃん先輩は、何を考えてるんだ」
美剣先輩は、何故だか怒っていた。
全然話が見えないんですが、説明してください。
「えっと‥‥」
俺が戸惑っていると、ヒカル先輩が俺の前に歩いてきて、そして少しほほ笑んだ。
「久弥さん、あなたにはまだ早いと思うのだけれど、リカちゃんは、大人の世界に行っちゃったのよ」
ええー！それって、アレっすか。

アレっすよね？
おいおい、子供がそんな事していいのかよ。
つか相手は誰だ？
メチャメチャ犯罪じゃねぇか。
「ふふっ‥‥神田‥‥エッチな事考えてる‥‥ふふ」
いやまあ確かにそうだけれど、最近話して無かったのに、いきなり話しかけられると怖いよ、副委員長。
「つか、何があったんですか！教えてくれぇ！」
俺はあふれ出る妄想と好奇心、そして少しの心配から、声を大にして叫んでいた。
すると、教室のドアが明け放たれた。
俺の叫び声と同時に、どうやら誰かが来たようだ。
見るとそこに立っていたのは‥‥
「子供のお化け？」
俺はうっかり言ってしまった。
「神田くんひど〜い。お姉ちゃんに、そんな事言っちゃ、ダ・メ・ヨ！」
‥‥怖い‥‥怖すぎる‥‥
教室に入ってきたのは、リカちゃんだった。
だけどその姿は、今までの、兵器と呼ばれた可愛いものではなかった。
髪をチャバネゴキブリのような色に染め、スカートは全く似合わない超ミニ、極め付けは、誰だか分からなくなるくらいに、顔に塗りたくられた厚化粧。
確かにこれは、みんなが言う通り、誘拐や死よりもヤバイ出来事だ。
どうしてこうなった‥‥
「も、申し訳ありません、リカさん」
俺は何故か敬語になっていた。
いやまあ、どう見ても子供が無茶してるって感じなのだが、なんとも言えないプレッシャーが俺を襲っていた。
今まで全ての人に、マスコットのように可愛がられていたリカちゃんは、今では誰からも話しかけてもらう事ができず、目をあわす事すら憚《はばか》られているようだった。
あの、リカちゃんを大好きだと言った愛美ですら、恐怖に震えていた。
ダメだ、こんな事があってはいけない。
どういった理由でこうなったのかは分からないが、俺がなんとかしなければ。
「リカさん、えっと、す、少し大人っぽくなりましたね」
俺がそう言うと、リカちゃんは不気味な顔をパッと輝かせ、少しだけ子供だった頃の素顔をのぞかせた。
どうやらまだ完全に、汚物の世界には浸っていないようだ。
「ま、まあね。リカももう大人だからね。当たり前な事言わないでよ」
モジモジするリカちゃんは、それはそれは不気味だった。
きっと今夜、俺はうなされる事間違いないだろう。
だけど、リカちゃんの為に、全ての人の為に、俺は前に進まなければならない。
「大人ですか。確かに妖麗でフェロモン出まくりですが、何かあったんですか？」
「そんなの決まってるじゃない。女が美しくなるのは、恋してる時なのよ。キャー！」
リカちゃんはそう言って、手で顔を覆って、恥ずかしそうにしていた。
まるで整形した不細工が、お世辞を言われ真に受けて、恥ずかしがっているようだった。
その行為を見る事は、俺にとってかなりデットゾーンギリギリで、危うく意識が飛びそうだったが、俺は混乱

しながらも、なんとか重要な言葉を聞きとどめた。
「えっ？恋っすか？リカさん、どなたか好きな人でもおられるんですか？」
　俺は心の中で祈った。
　相手は小学生以下でありますように。
　しかし俺の期待は、最悪な方向に裏切られた。
「現国の、佐藤一《さとうはじめ》先生に、恋しちゃったｗ」
　リカちゃんの顔は、見る影も無い不気味なものだったが、そう言って見せる表情は、一人の可愛らしい女性だった。
　俺はいったいどうしたらいいのだろうか。
　悔しくて、やるせなくて、どうリアクションをとればいいのか分からず、俺はただ肩を落として俯いていた。
　すると、真嶋先輩が怪しく俺にウインクしてきた。
　俯いているのに、何故それに気が付いたか、俺自身謎だったが、きっと無意識に、真嶋先輩に助けを求めて、目で訴えようとしていたのかもしれない。
　とにかく、ウインクする真嶋先輩の顔は、悲観に浸っている顔では無かった。
　いや、真嶋先輩だけではない。
　他のみんなも、なんだか肩の荷がおりたような、安心した顔をしていた。
　どういう事だ？俺には理解できなかった。
　だからとりあえず、この場はこれ以上話をするのをやめる事にした。
「そうですか。頑張ってください」
　俺がそう言うと、リカちゃんは満面の笑みを浮かべた。
　俺はリカちゃんの頭をなでようとする欲望を抑えて、精一杯の笑顔を返した。

奪われたリカちゃん

　顔がいくら妖怪のようになっていても、時々見せる、内からあふれ出る萌えはやはりリカちゃんで、俺は萌える気持ちを抑えきれなかった。
　それでもなんとか可愛がりたい衝動を抑えて、萌え萌え委員会の終了を見届けた。
　その後、リカちゃんがいなくなるのを見計らって、真嶋先輩が俺に話しかけてきた。
「神田くん、よくやってくれた。キミのおかげで、この問題は間もなく、解決される事が確定したと言えるだろう」
　その表情は、根拠の無い自信に満ちあふれた、いつもの真嶋先輩だった。
　それでも俺は、一刻も早く安心したかったのかもしれない。
　だから、お預けをくらってよだれを垂らす犬のように、俺は真嶋先輩に詰め寄った。
　いや、別にそこまでは酷くは無いし、詰め寄ってもいなかったが、気分的ノリとしてはそんな感じだった。
「どういう事ですか？俺には話が見えないのですが」
「いや、リカちゃん先輩が、誰か教師に対して恋をしているのは分かっていた。だが、それが誰なのか、皆なかなか聞けなったのだ。それさえ分かれば、対応も可能というもの。神田くん、損な役回りをさせてしまったね。ありがとう」
　なるほど、そうだったのか。
　だったら、メガネに輝きの戻った今の真嶋先輩になら、なんとかできるのだろう。
「しかしマジビビったぜ。あのリカちゃんを最初に見た時はよお。流石の俺でも、鼻からションベンちびりそうだったからな」
　美剣先輩、それはきっと病気です。
　早急に病院に行った方がいいと思いますよ。
　だけど気持ちは分かるな。
　俺も、この世の最後を見た気持ちだったから。
「で、具体的に、どうするんですか？リカちゃんを元に戻す方法があるんですよね？」
　俺は此処まで言って、自分でも気が付いた。
　リカちゃんを元に戻すって事は、恋する気持ちを無くすか、対象を子供にするか、或いは佐藤にフラれるしかない事を。
「どうやら神田くんも気が付いたかな。佐藤先生と言えば、表向きは純和風の大和撫子が好きと言っているが、実は、おっぱいの大きなお姉さんが大好きな人だ。その辺りの情報収集は、十一号くんが調べてくれている」
　真嶋先輩はそう言いながら、養殖科の十一号さんに視線を送った。
「はい、信用筋から得た情報ですので、間違いありません」
「うむ、キミには期待しているよ」
　十一号さんは、最近萌え萌え委員会に入った、養殖科の人である。
　二号さんがレギュラーメンバーになった事で、養殖科が九人になり、キリが悪いとかって理由で、真嶋先輩が洗脳して連れてきた子だ。
　それにしても真嶋先輩って、将来は教祖と呼ばれていそうだな。
　まあでも、萌えを推進しているだけだから、問題は無いはずだけれど。
「では、ただ見守っていればいいんですか」
　どうにもそれだど、しばらくはあのリカちゃんを見なければならず、俺としては精神衛生上良くないと思える。
　だからできれば、早急に解決したい。

「いや、それでは文化祭の人気投票に間に合わないかもしれない。こちらでも早急にフラれるように働きかける」
「そうですか‥‥」
　俺はそれを聞いて、複雑な気分になった。
　この問題が解決すると同時に、リカちゃんがフラれる事になるのだから。
　きっとリカちゃん、凄く悲しむんだろうなぁ〜
「って、文化祭に間に合わない？どういう事ですか」
　俺は一瞬スルーしそうになったが、文化祭って、秋に行われるんじゃないんだろうか。
「神田くん、何を言っているの？萌芽の文化祭は、六月にあるのよ。寝ぼけているなら、早々に叩き起こして上げましょうか」
　そう言う冷子の右手は、怪しく紫色に光っているように見えた。
「いや、それは遠慮しておくよ」
　俺は当然、冷子の申し出を断った。
　それよりも、冷子の言う事が正しければ、文化祭はもうすぐじゃないか。
　つか、むしろ明日から六月だし。
「まあそういう事だ。だが、手はずは既に整っている。キミ達は特に何もする必要はない。今まで通り、萌えに励んでいてくれたまえ」
　流石真嶋先輩、萌えへの行動は早いな。
　そういう事なら、後は真嶋先輩に任せて大丈夫だろう。
　だけど、萌えに励んでいろって言われても、具体的に何をするのだろうか。
　俺の疑問は解消されないまま、みんなはそれぞれの教室へと、笑顔で戻っていった。
　この後、更なる悲劇が起こるとも知らずに。

　真嶋先輩の作戦は、リカちゃんをあおって早急に告白させ、フラれる事により、スッパリ気持ちを断ちきらせようとするものだった。
　作戦はうまくいき、リカちゃんはあっさりと佐藤に告白した。
　子供ってのは、扱いが楽だなぁ〜なんて思って笑っていたわけだけれど、その後の展開は、決して笑えるものではなかった。
　当然此処でフラれて、元のリカちゃんに戻る予定だったのだが、なんという事か、佐藤が付き合いをする事に、前向きになってしまったのだ。
　あの不気味なリカちゃんの告白に対して、否定するどころか、「卒業するまで待っているよ」とか、そんな返事を返したらしい。
　俺たちは早速、リカちゃんを除くメンバーで集まって、緊急会議を開いていた。
「どういう事だ！佐藤先生が子供好きの変態教師だったなんて、僕は聞いてないぞ！」
　真嶋先輩は、いつもの冷静な先輩ではなかった。
　何故か付けているマントを翻し、十一号さんを指差した。
「そんなはずは。確かに生徒会のデータベースには、巨乳好きと書いてありました」
　なんと、生徒会には、そんなデータベースがあるのか。
　先生方もたまったものではないな。
　しかし生徒会か。
　確か生徒会と言えば、萌え萌え委員会の敵だったはず。
　まさか、俺たちは生徒会にはめられたのでは。

俺がそう思った時、教室のドアがノックされた。
萌え萌え委員会のメンバーに、ドアをノックなどと言う、礼儀をわきまえている者などいるはずもない。
どうやら部外者が、この空き教室を訪れてきたようだ。
俺たちは一斉に、ドアの方に注目する。
するとドアの外から、男の声が聞こえた。
「入ってもいいかな？まあ此処は空き教室だから、わざわざことわる必要もないか」
声は聞いた事がないものだった。
しかしどうやら、真嶋先輩を含む先輩方は、その声に聞き覚えがあるようだ。
少し嫌な顔をしてから、みんなはドアを睨みつけていた。
するとドアが、ゆっくりと開かれる。
「おじゃまするよ」
そう言って入ってきたのは、どうやら上級生っぽい、でかい体の男子生徒と、正に大和撫子を絵に書いたような、美人という言葉がしっくりくる女子生徒だった。
「生徒会が、僕達に何か用ですか？」
真嶋先輩の言葉に、俺は納得した。
全く覚えていなかったが、二人の生徒は、生徒会の腕章をつけていたから。
「いやな、萌え萌え委員会のメンバーと、教師が怪しい関係になっていると聞いてな。流石に生徒会としては、それは見過ごせないと思ったからな」
情報が早い。
と言う事はやはり、生徒会が今回の事に絡んでいるのだろうか。
つか、生徒会長は、こんなに怪しい委員会を、何気に認めているのですね。
「なんの事ですか？僕たちには身に覚えが無いのですが」
真嶋先輩がしらばっくれると、生徒会長はニヤリと顔をゆがめた。
「此処に一人、いないメンバーがいるようだな。君たちの委員会のエース、香川リカはどうしたのかな？」
生徒会は完全に把握している。
告白してからまだ間もないと言うのに、どうやって生徒会は知ったのだろうか。
「リカちゃん先輩は、今日は用事があるとかで、これないみたいですが何か？」
真嶋先輩は、動揺を見せないように、あっさりと嘘を言った。
だが嘘はすぐにばれていた。
「ほう、その用事とは、学校中に佐藤先生との関係を触れ回る事なのか？」
本人が触れ回ってるんかい！
「くっ！」
流石の真嶋先輩も、本人が自白して回っているのでは、どうする事もできないな。
萌えッ子は基本天然ボケだから、こんな時はつらい。
「とにかくだ。先生に告白して、尚且つうまくいっていると触れ回るような女子生徒は、この萌芽高校には似つかわしくない。萌えではなく、ちゃんとした大和撫子教育が必要だ。香川リカに関しては、今後我々の管理下に入れるから、一応報告しておく」
なんて事だ。
素早く解決しようとしたために、逆にリカちゃんの立場を危うくしてしまった。
それに今回のこの状況、何かおかしい。
いくら子供好きだと言っても、あのリカちゃんを女として見る事ができる男なんて、この世に存在するとも思えない。

きっと、生徒会と佐藤は、裏でつながっているのだろう。
それで佐藤に、中途半端な返事をするよう、生徒会が要請していた可能性がある。
となると、生徒会のデータベースの情報とか、やはり嘘の情報を流したって事か。
「生徒会に、先生のデータベースがあると噂ですが、本当ですかね？」
俺は独り言のように、しかし生徒会長に尋ねるように、疑問を口にしてみた。
すると生徒会長は、俺の言葉に食い付いてきた。
「そんなもの、有る訳がなかろう。そこにいる女は、どうやら騙されたみたいだがな」
やはり、十一号さんに嘘の情報を流したのは、生徒会側の人って事か。
「すみませんカイザー真嶋様」
十一号さんはそう言って、しなだれ涙を流していた。
なんだか十一号さんが可哀相になってきた。
生徒会に騙され、踊らされていたのもそうだが、真嶋先輩に洗脳されている事も。
「では私はこれで失礼する」
生徒会長はそう言うと、不気味な笑顔をしてから、出口へと歩き始めた。
俺たちはただ、それを見送るしかできなかった。
あの美剣先輩ですら、悔しそうな顔をするだけで、結局一言も発する事はなかった。
まあ確かに、生徒会長強そうだもんな。
ナンパなヤンキーでは、太刀打ちできそうになさそうだ。
他のメンバーは、皆ガックリと肩を落としていた。
そして間もなく、生徒会長たちの姿は、ドアから外へと消えていった。
さて、どうするか。
よく考えれば、俺はぶっちゃけ、萌え萌え委員会がどうなろうと、知った事ではない。
ただ愛美さえ、萌えッ子であってくれればそれでいい。
だけど、リカちゃんがこのまま、大和撫子に改造されるのを見ているのも面白くはない。
だから俺は言った。
「なんとか、リカちゃんを取り戻せないだろうか」
すると、ヒカル先輩が提案してきた。
「リカちゃんに、全てを話してみればどうかしら。大人になったリカちゃんなら、全てを受け入れ、理解できるとお姉ちゃん思うの」
みんな黙っていた。
賛同する者は誰もいなかった。
リカちゃんが、全てを話してもらったくらいで、納得するわけがない。
なんせ本質は子供だからな。
それに、仮に全てを話すとしても、誰がそれをするんだ。
「あなたは佐藤先生に騙されているんだよ」なんて、言えるわけがない。
ヒカル先輩も悟ったみたいで、みんなと同じように俯いた。
仕方がない、ここまでか、俺はそう思った。
その時だった。
声を上げたのは、俺の横にいる愛美だった。
「リカちゃん、今までのリカちゃんが、私は大好きなんだ。だから、大和撫子に改造されるなんて、いやだよぉ〜」
そういう愛美の顔には、悲壮感が漂っていた。

　そう言えば、初対面なのに愛美が仲良くなれたのって、リカちゃんだけだもんな。
　初めて会った時から、大好きだと言った子だった。
　きっと同じ萌えキャラとして、通じるところも、もしかしたら有ったのかもしれない。
　そんな愛美の言葉に、もう忘れかけていたメンバー、有沢が立ちあがった。
「策はある。神田、そして九頭竜さん、君たちに覚悟があるならだが」
　正直、俺には覚悟なんてないのだが、愛美がなんだかやる気に満ちあふれていた。
「教えて。どうすれば、リカちゃんを取り戻せるの？」
　なんだか、凄くどうでもいい事に熱くなっている気もするが、愛美がやる気なら、俺も頑張らないとな。
「有沢、言ってみてくれ。覚悟は無いが、リカちゃんは取り戻したい」
　俺がそう言うと、有沢は頷いて、ゆっくりと話し始めた。
「えっと、九頭竜さんは佐藤先生を、神田はリカちゃんを、攻略すればいいんじゃね？」
　確かに、どちらかが攻略に成功すれば、二人の仲は駄目になり、リカちゃんは戻ってくる事になるのかもしれない。
　って、そのミッション、俺たちである必要が無いだろうが。
　それに、リカちゃんの気持ちを変えるってのはアリだが、佐藤をリカちゃんから奪うって、後々リカちゃんから恨まれるんじゃないか？
　それは愛美も分かっているようだった。
　愛美は、こういう時はちゃんと空気も読むし、理解もしている。
「それをすると、私がリカちゃんに恨まれちゃうかもね。でも、リカちゃんが、あの佐藤とか言うおっさんのものになってしまうより、よっぽどいいよね。それにきっと、リカちゃんは洗脳されているんだよ。目を覚まさせてあげなくちゃ。おっさん攻略なんてキモイけど、私、頑張っちゃうよ」
　愛美、意外と言うね‥‥
　先生つかまえて、キモイおっさん呼ばわりですか。
　でも、愛美がやる気なら、俺はそれを止めるつもりはない。
「よし、やるか愛美！」
「うん、一緒にがんばろう！」
　俺たちは顔を合わせて、このミッションをやり遂げる事を決意した。
　このミッションの先に、とんでも無い落とし穴がある事に、気がつかなかったのは、俺たち二人だけだった。

リカちゃん奪還作戦

　俺と愛美は、次の日から早速作戦を開始した。
　真嶋先輩が自ら調べたところによると、佐藤の好みは、「萌え系の若い子」と言う事だった。
　まあ、萌えを否定する高校で教師をしていても、みんなが萌えを否定しているわけではないって事か。
　その辺りふまえて、愛美は早速、授業で仕掛けていた。
「この問題分かる奴～？」
「はい！」
「お、九頭竜、この問題がわかるか」
「あれ？分かると思ったけど、なんだか間違っちゃったみたい」
　いいぞ愛美、今のはいいジャブだ。
「では、次は～」
「はい、私読みます」
「そうか。では九頭竜、読んでくれ」
「わふぅ～。あわわ、すみません。教科書持ってくるの忘れました」
　よしよし、佐藤の奴、かなり萌えているぞ。
「ではこの主人公の気持ちが分かる奴はいるか？」
「はいはい～！」
「また九頭竜か。まあいい、言ってみろ」
「この生徒は、きっと先生の事が好きなんだと思います。好きじゃない先生の授業なんて、きっと頑張ろうとは思わないですから」
　愛美はそう言って、上目づかいで佐藤を見た。
　カーッ！今のはかなりクルものがあっただろう。
　それにしても佐藤も、なに高校生にときめいてるんだ。
　もう少ししっかりしろよ。
　でも、この調子なら楽勝だな。
　俺が気がつかない間に、愛美の萌えパワーは、かなりアップしているようだった。
　さて、次は俺の番だ。
　俺は時間があれば、リカちゃんの元を訪れていた。
「リカちゃん先輩、今日も大人の色気ムンムンですね」
「そ、そう？知ってるけど～」
　最初はリカちゃんの望むように褒めて‥‥
「リカちゃん、今日も可愛い。俺惚れちゃいそう」
「もう。ダメだよ。私には佐藤先生がいるんだから」
　徐々に褒め方を、可愛い方向へと変化させ‥‥
「最近、愛美が佐藤先生と仲良くやっていて、俺ほったらかしにされているんだよね」
「えっ、そうなの？知らなかった‥‥」
　さりげなく、佐藤と愛美の関係を伝え‥‥
「あ、ごめん」
「えっ？だ、大丈夫だよ」
　つまづいたフリをして、リカちゃんを抱きしめた。
　流石に此処までは、先生にはできまい。

リカちゃんは子供だから、スキンシップに弱いと、本人が言っていたからな。
それにリカちゃんの恋は、幼稚園児が先生を好きになっているようなもの。
より等身大に近い恋愛をすれば、きっと戻ってくる。
恋愛と言えるかどうかは微妙だけれど。
しかしそんな中でも、生徒会はリカちゃんを洗脳するべく、働きかけを続けていた。
リカちゃんの髪の色は黒に戻り、ミニスカートの丈は、前よりも長くなっていた。
果たしてリカちゃんは、何処に進むのだろうか。
萌えッ子に戻るのか、それとも大和撫子か、はたまた不気味星人か。
正直、そろそろ飽きてきていたが、リカちゃんを取り戻す為に、俺は頑張り続けた。
そんなある日、とうとう大きな変化が訪れた。
現国の佐藤と、担任の田中の、仁義なき戦いが始まってしまった。
やはり田中は、愛美の事を気に入っていたみたいで、佐藤と仲良くしているのを見ていられなかったようだ。
それを、佐藤が迎え撃った。
最初の授業で、散々日本語の乱れを嘆いていた奴が、今では日本語乱れまくりの、愛美の虜かよ。
この萌芽高校の理念は、先生個人の気持ちとは、イコールでは無かったって事だな。
もしかしたら、この学校の理念とは、学校と生徒会だけのものなのかもしれない。
とにかく、佐藤はとうとう、リカちゃんにかまっていられなくなった。
まあぶっちゃけ、リカちゃんは女としてはどうかと思うし、あまりに子供だし、最近は化粧を塗りたくって不気味な顔だったし、世間体って意味でも、白い目で見られるもんな。
その点愛美なら、見た目は歳よりも若く見えるかもしれないが、一応高校生で通用する。
佐藤の気持ちが動いて当然だった。
さて、後はリカちゃんが、佐藤に嫌気がさしてくれれば、全てオッケーだな。
だが此処に来て、俺は現状をリカちゃんに伝えられなかった。
「最近、佐藤先生がかまってくれなくなったんだよ。どうしちゃったのかな」
そういうリカちゃんはとても寂しそうだった。
もしも愛美がいなかったら、俺はきっと抱きしめてしまっていただろう。
だけど俺は、自分の理性を総動員し、なんとか欲望を抑えた。
それでも、そんな微妙な状況は、当然長くは続かなかった。
すぐに、佐藤と田中が、愛美を取りあうように授業でチヤホヤしたり、適当な理由を付けて呼び出している事は、リカちゃんの耳に入った。
そしてとうとう、リカちゃんは佐藤にハッキリとフラれた。
「どうして最近、私と遊んでくれないの！？」
「俺は、九頭竜が‥‥好きなんだ」
俺はこの時のやり取りをコッソリ見ていたが、佐藤の事は嫌いじゃないと思った。
教師だって男なのだから、生徒に恋だってするだろうし、ハッキリ言う奴は好きだ。
だけど、先生としては終わった。
間もなくこの話は全校生徒に広まり、（俺が広めたんだけど）当然校長の耳にも入った。
そして佐藤は、職を失う事になった。
ついでに田中も、萌芽高校の教師としては問題有りと判断され、別の高校に行く事が決定していた。
良かった、色々と上手くいって。
俺は緊張状態から解放され、ホッと一息ついた。
しかし、全てが一気に解決したわけだが、一つ誤算があった。

と言うか、これは当然だったのかもしれない。
佐藤にフラれ、傷心のリカちゃんを、俺は放っておけなかった。
「リカちゃん、お兄ちゃんと遊ぼう」
俺がそういうと、リカちゃんは俺にじゃれついてきた。
「お兄ちゃん、大好きだよ～」
リカちゃんは、本来の元気は無かったけれど、元のリカちゃんに戻っていた。
少し大和撫子風味な部分も取り入れ、萌え破壊力はアップしていた。
当然、こんな子をないがしろにもできないし、泣かせるような奴がいたら、それは人間じゃないとさえ思う。
だから俺には、釣りあげてしまったリカちゃんを、リリースする事はできなかった。
ただ救われたのは、愛美がリカちゃんを大好きだった事だ。
この状況を理解して、三人で仲良くしていく事に問題はなかった。
「久弥くんと結婚したら、リカちゃんを子供に欲しいな」
言っている事は無茶だったが、泥沼の三角関係にはなりそうになくて良かった。
「お兄ちゃんはお兄ちゃんだから、お姉ちゃんはお姉ちゃんだよ。ワーイ！」
両手を広げ、嬉しそうにしているリカちゃんを見ながら、俺と愛美は、ただ目の前の萌えを満喫していた。
目前に迫る、新たな仁義なき戦いが始まろうとしている事も知らずに‥‥

萌芽の文化祭

「えっと、明日は文化祭です。休みじゃないので学校に来て下さいね」
　そう言うのは、田中の代わりに我がクラスの担任になった、山崎和歌子《やまざきわかこ》先生だった。
　って、担任が変わる事は聞いていたから、驚きはそれほどなかったわけだけど、明日は文化祭ですって、どういう事？
　普通文化祭と言えば、何週間も前からみんなで計画を立てて、クラスだったり部活のメンバーだったりで、何かするものなんじゃないのだろうか。
　俺は疑問に思いながらも、とりあえず先生の説明を聞いていた。
「で、ですね‥‥萌芽高校美少女コンテストに出る方は、水着を持ってきてください」
　おいおいなんだそりゃ？
　確か真嶋先輩が、女子生徒人気投票で優勝する事が、萌え萌え委員会の目標とか言っていたような。
　と言う事は、その美少女なんたらに、愛美も出る事になっているのだろうか。
　そうするとやはり、愛美も水着を？
　俺が色々と疑問に思っていると、隣の冷子が話しかけてきた。
「そうそう、今日この後、萌え萌え委員会メンバーは、空き教室に集合だから」
　こっちもいきなりだなおい。
　用事があったりしたらどうするつもりだ。
　でもまあ、当然俺に用事なんてあるはずも無いし、疑問はきっと、そこで説明してもらえるのだろう。
「分かった」
　俺はそれだけ言うと、まだ担任に慣れずにオロオロする山崎先生を、面白おかしく眺めながら、愛美の水着姿を想像して、明日への期待を膨らませていた。

　さて、俺たち萌え萌え委員会メンバーは、いつもの空き教室に集合していた。
　正直、俺の学生生活の半分は、この教室で過ごしているのではないだろうか。
　それもまた青春か、なんて意味不明な事を考えていると、真嶋先輩が話し始めた。
「いよいよ明日は、文化祭である。いきなり文化祭かよ！とか、展開が早くね？みたいな苦情は一切受け付けない。何故ならこれは規定路線だったからだ」
　わざわざそんな事を言うということは、何か裏があったと考えるのが普通だろうが、ツッコミは入れない方がいいのだろうな。
　いきなり連載を中止するように言われたのか、ネタが無くなったのか、それとも締切に間に合いそうに無かったのか。
　いずれにしても、今の俺たちには関係がないので、俺はスルーする事にした。
「で、萌芽高校の文化祭というのは、古き良き日本の文化、大和撫子文化と、現代日本が世界に誇る文化、萌え文化との、対決祭りである」
　なるほど、そういう文化祭だったのか。
　どおりで準備期間が全く無かったわけだ。
　と言うか、この学校に入った時から、萌えを推進する我々にとっては、準備が始まっていたって事か。
　そしてその準備は、十分にできていると言えるだろう。
　リカちゃんは元に戻ったし、今では愛美も、クラスメイトから嫌がられる事はない。
　先生二人を地獄に送った萌え能力は、既に一流の萌えッ子と言えるだろう。
　俺の予想としては、女子生徒人気投票にエントリーするのは、リカちゃんと愛美で間違いないかな。

「では、その女子生徒人気投票、正式名称「萌芽高校美少女コンテスト」に出場するメンバーの名前を発表する。エントリーは既に、僕が勝手にやっているので、安心してくれ」
安心してくれって、本人の気持ちは無視かよ。
まあ、この委員会に入った時に聞かされていたから、特に問題はないのかもしれないが。
「まず、香川リカ先輩」
「は～い！ばんがっちゃうよ～」
流石リカちゃん、いい返事だ。
ばんがって、ばんがってｗ
「次に、真嶋ヒカル姉さん」
「しょうがないわね。お姉ちゃんが一肌脱いで上げるわ」
ヒカル先輩も、今や完璧な姉属性だ。
きっと一二年《いちにねん》から、それなりに支持を集める事だろう。
「次は二年生に移り、美剣ツバサくん」
「俺が優勝しちまったら、みんなゴメンな」
「イエス！ツバサせんぱ～い！」
いや、美剣先輩の票数は、一票確定だけどな。
つか有沢、お前は本当に、美剣先輩の前ではキモイな。
まあ他人の人生、とやかく言いたくないが、お前は唯一のバッドエンドルートに入ってしまっているぞ。
「次は一年、九頭竜愛美くん」
「は、はい。不束者ですがよろしくお願いします」
愛美、その返事は、かなり違うと思うぞ。
だけど、グッドだ。
俺は愛美の成長に、流れ出る涙を止める事が出来なかった。
「同じく一年、雪村冷子くん」
「光一先輩がそう言うなら、出てあげてもいいわ。だけど、優勝したら即結婚よ」
冷子が優勝する事はないと思うが、それなりに人気はありそうだ。
さて、後は副委員長だけだが、こいつも出るのだろうか。
「次も同じく一年‥‥」
へぇ～、副委員長も出るんだ。
とりあえず顔は可愛いから、なんとかなるか。
なんて思っていると、真嶋先輩が発表している声をさえぎるように、
「うおっ！」
と、美沙太郎が奇声を上げた。
なんだ？どうしたんだ？
みんなが一斉に美沙太郎に注目する。
すると美沙太郎は慌てて、何やら本を背中に隠した。
なんだか分からないが、こんな時に言う事は決まっている。
俺は大きな声で、美沙太郎に向けて言葉を放った。
「お前今、エロ本読んでただろ！」
「いや、読んでないんだな。見ていただけなんだな」
うむ、百点満点のいい解答だった。
「へぇ～エロ本見てたんだ‥‥」

俺は礼儀として、みんなに聞こえるようにハッキリと言ってやった。
よし、これで萌芽高校の平和は守られる事だろう。
俺の言葉に、自分の行為がばれた事を悟った美沙太郎は、ガックリと肩を落とし、顔のあたりに縦線をいっぱい並べていた。
で、真嶋先輩の発表は、副委員長だったんだよな？
俺がそう思って副委員長を見ると、ニヤリと笑顔を作って話し始めた。
「ふふ‥‥私が‥‥美少女コンテスト‥‥だなんて‥‥地球‥‥滅亡も近い‥‥わね‥‥ふふふっ」
やはりそうだったか。
それにしても、副委員長が言うと、本当に地球がヤバイ気がするから不思議だ。
さて、これで全員かな。
俺はそう思って真嶋先輩を見ると、真嶋先輩はずれたメガネを直し、手元のメモを確認していた。
ん？まだ誰かいるのだろうか？
養殖科の人かな？
俺を含めて、みんなが注目する中、真嶋先輩は再び話し始めた。
「後‥‥一年で‥‥美沙太郎くん、キミの出場も決定している。名前が一瞬女に見えたから、ついうっかり出場届けを出してしまったが、キミなら立派にやれる。頑張ってくれ」
「えっ‥‥」
いや、どう考えても、立派にやれないだろう。
つか男でも出場できるのかよ。
傷心の美沙太郎への更なる追いうちは、美沙太郎の精神を崩壊させるに十分だったようで、彼の顔は、今までに無いくらい、素敵に別世界へと旅立っていた。
「で、後は養殖科のキミたちも、出場決定だ」
「は、はい！汚名挽回します！」
結局、萌え萌え委員会メンバーの、女子プラス美沙太郎、全て出場じゃないかよ。
つか十一号さん、汚名は挽回しちゃったらダメですよ。
でもきっとこの人なら、マジで汚名を挽回するのだろうな。
「うむ。では明日、キミ達の健闘を祈る。解散！」
真嶋先輩はそう言うと、未だにどうして付けているのかわからないマントを翻し、颯爽と教室を出ていった。
俺は愛美と顔を合わせると、何故かやる気に満ちあふれ、頷きあうのだった。

戦士愛美

　文化祭当日の朝、俺が愛美を迎えに行くと、愛美の母親が、
「娘の晴れ姿、これで撮影してきて」
　と言いながら、弟の雄太を差し出してきた。
　いや、いくら俺でも、雄太で撮影するのは無理だって。
　まったく、流石愛美の母親だ。
　天然ボケは母親譲りだったか。
　とにかく俺は雄太を返して、ビデオカメラを代わりに受け取って、愛美と共に学校に向かった。
　愛美は少し緊張しているのか、最近は鳴りを潜めていたドジも、時々顔をのぞかせた。
　だが、これくらいのドジがある方が、きっとみんな萌えるはずだ。
　俺は愛美と笑顔をかわしながら、今までで一番ウキウキする登校を満喫した。
　少し早めに家を出たが、学校についたのは、結構ギリギリの時間だった。
　学校につくと、校門のところでは、今や遅しと真嶋先輩が俺たちを待っていた。
「遅いぞ、神田二等陸尉、そして九頭竜三等陸佐！」
　えっ？愛美の方が階級上なんだ。
「おはようございます。すみません。遅くなりました」
「九頭竜くんは、早急に冷子くんたちと一緒に、最終登録を済ませてきてくれ。神田くんは、僕と一緒に、こっちだ」
「は、はい！」
　って、何故さっきは、階級で呼んでいたのに、今回は普通なんだ？
　慌てると階級で呼んでしまうとか、難儀な設定ではないだろうな。
　まあそんな事はどうでもいいか。
　で、俺はいったい、何処に連れて行かれるのだろうか。
　最近の愛美なら、俺がいなくても、冷子たちがいればなんとか大丈夫だろうが、やっぱり俺の気持ちとしては、愛美の傍にいたい。
　でもどうやら、俺はどんどん、学校内でも人気のない場所へと連れて行かれているようだった。
　まさか、真嶋先輩って、男が好きだとかそんな事はないよな。
　なんて冗談だが、本当に何処に行くのだろうか。
　しばらく歩いていると、いつも集まっている空き教室とは真逆の位置にある、ある教室の前で止まった。
　そこには、生徒会室と書かれていた。
　どういう事だ？
　もしかして、真嶋先輩って、生徒会側の人間だったってオチじゃないよな。
　なんて冗談だが、本当に何の用だろうか。
　なんて、同じネタを頭の中で二回もやってしまった俺は、何故か少し、悲しい気持ちになっていた。
「たのもう～」
　真嶋先輩は、威勢良くそう言うと、ノックもせずにドアを解放した。
　こんな時、ベタな漫画やなんかだと、中で女子生徒が着替えているシーンがあったりするのだが、そんな期待を完膚なきまでに否定するような声が、すぐに中から聞こえてきた。
「おう、来たか」
　そこにいたのは、完全に予想通り、体がでかくてむさ苦しい生徒会長だった。
　そしてもう一人、何処かで見た事のある、初老のじいさんが座っていた。

「校長先生、おはようございます」
　って、校長じゃねぇかよ。
「あ、ほはようございます」
　ヤベッ、アホって言っちゃった。
　でも、そんなオチャメな言葉遊びに、校長や生徒会長が気づくはずもなかった。
　真嶋先輩だけが、笑顔で俺にサムズアップしてきたのは、なんだかとても切なかった。
「で、萌え萌え側のもう一人は、そちらの男子生徒でいいのかな？」
　生徒会長はそう言って、怪しい目で俺の方を見ていた。
　もしかして‥‥
　もうこのネタはやめた方がいいな。
　つか、校長先生、挨拶返してくれねぇ。
　萌え萌え委員会って、そこまで嫌われているのだろうか。
「ああ、この神田くんが、萌え萌え側の、もう一人のコメンテーターだ」
　何の事だ、コメンテーターって？
　俺がおそらく間抜けな顔をしていると、生徒会長が説明を始めた。
「そっちの神田くんとやらは、分かっていないみたいだな。仕方が無い、説明してやろう。コメンテーターとは、コンテストの際、自分の応援している側の生徒に有利になるように、良いところや悪いところを解説する人物の事だ。生徒たちが質疑応答を済ませた後、コメンテーターのどちらかに、その役割が与えられる。分かったかな？」
「ええ、まあ」
　なんだかよく分からないが、よく分かりました。
「よし。では、大和撫子側は、私と校長、萌え萌え側は、真嶋くんと神田くんという事になる。そしてもう一つ言っておく事がある」
　生徒会長はそう言って、少し嫌な笑いをした。
　格好良い主人公が、余裕を見せる時にやる「フッ」って笑いだったが、なんとなく生徒会長がやると、格好がつかなかった。
「もう一つとはなんですか？」
　きっと真嶋先輩は、心の中では生徒会長を笑っているのだろうが、表面上は冷静だった。
「香川リカの事だが、彼女は今、生徒会の管理下に置かれているので、大和撫子側での出場となる。だから当然、香川リカが優勝するような事になれば、こちらの勝ちとなり、萌え萌え委員会は解散となるのでそのつもりで」
　解散ってなんだ？
　それにその理屈は、無理がありすぎじゃないか？
　リカちゃんは萌え萌え委員会のメンバーだし、どう見ても萌えッ子じゃないか。
　こんなのどう見ても、ブラジル人のサッカー選手を帰化させまくって、外国にブラジル人のナショナルサッカーチームを作るようなものじゃないか！
　って、説明が長すぎで分かりにくいかな。
　えっと、もう少し、完結に分かりやすく言うと、アメリカの核ミサイルで、ニューヨークを攻撃するようなものじゃないか。
　うん、コレはわかりやすい。
「って、ええ！そんなんでいいんですか？」
　俺は思った事をそのまま口に出していた。

　それでも生徒会長は、冷静に俺の言葉にこたえてきた。
「まあ、それはあくまで保険だ。私たちは香川リカの力に頼らずとも、萌え萌え側に勝利するつもりだ。ただ、生徒が本当の良さを分からないバカだったら困るのでな」
　何処かの国の国会議員のように、有権者をバカにしまくりだなおい。
「わかりました。では、話はそれだけですか。僕達は準備があるので、これで失礼したいのですが」
　真嶋先輩、いいんですか？
　あのリカちゃんに勝てる人なんて、いませんよ。
「うむ、では、萌え萌え委員会最後の日となる、文化祭を楽しもうではないか」
　いや、最後の日を楽しめって、あんたは日本に核ミサイルが落ちる寸前に、戦争ゲームで楽しめるっていうのかい。
「では失礼します」
「あ、失礼します」
　俺は真嶋先輩の後を追うように、生徒会室を後にした。
　廊下に出るとすぐ、俺は真嶋先輩に、詰め寄り気味に話しかけた。
「いいんですか？解散ってなんですか？リカちゃんに勝つなんて、無理じゃないですか？」
　俺の質問攻めにも、真嶋先輩のメガネのきらめきは、曇っている様子は無かった。
「大丈夫だ。萌え萌え委員会なんて、そもそも存在していないからな。あんなのはただの言葉の遊び。国があっての国民ではない。萌えッ子あっての、萌え萌え委員会なのだよ」
　なるほど、言われてみればそうだ。
　ただ空き教室に、友達が集まってだべっているだけだもんな。
「とは言え、このまま負けるのもしゃくだからな。一応、勝つ為に手は打つ」
　流石に真嶋先輩、伊達にカイザーとか呼ばせてないぜ。
「で、具体的に何をするのですか。まともにやって、リカちゃんに勝てる萌えッ子なんて、存在しないと思うんですが」
「何を言っている。九頭竜くんがいるじゃないか。キミは近くにいすぎて気がついていないかもしれないが、彼女はもう立派な戦士になっているぞ」
　愛美が立派な戦士？
　確かに俺は愛美が好きだし、個人的にはリカちゃんよりも、女性として好きだ。
　だけど、それは彼氏だからだと思っていた。
　それに、ドジっ子属性は、大人じゃなければ理解できないのではなかったか。
「でも、ドジっ子属性は、高校生にはまだ、刺激が強すぎやしませんか？」
「ふっ。そこでだ。キミにはやってもらいたい事がある」
　真嶋先輩は、相変わらず怪しかった。
　だけど、とりあえず面白いから、俺は真嶋先輩の言に従う事にした。

ミッション

　まず俺は、愛美のところを訪れた。
「愛美、今日はドンドンドジをしていいからな。俺はお前を愛している。何も問題はない」
　と言えと言われたわけだけど、コレがどんな意味を持っているのか、俺には分からない。
「うん、久弥くん、私も愛してるから」
　だけど目の前でモジモジする愛美は可愛いし、俺はこれでいいのだなと思った。
　つか真嶋先輩、俺を萌え殺す気ですか。
「じゃあ、また後で」
　俺がそう言うと、愛美はとびきりの笑顔で、力いっぱい頷いていた。
　次に俺は、副会長を探した。
　副会長は昨年の美少女コンテストの準ミスで、生徒会側のエースである。
　その人に会って、俺は言わなければならなかった。
「好きだ！愛している！」と‥‥
　って、しまった、声が出ていたよ。
　それにしっかり、知らない人に聞かれちゃってるし。
「い、いきなりそんな事いわれても、困ります。それに神田くんって、九頭竜さんと付き合っているんじゃ‥‥」
　よく見ると、同じクラスの女子、高橋唯々《たかはしゆいゆい》だった。
　高橋の事は、名前が特徴的だったからってのもあるが、たおやかで優雅な容姿が印象的だったので、クラスメイトをあまり覚えない俺でも覚えていた。
　正直、愛美がいなかったら、きっと最初にロックオンしていた女子だろう。
　そんな子に、俺はいったい何を言っているんだ。
　まあ事故だし、愛美もきっと分かってくれるはずだ。
　此処はとりあえず急いでいるし、傷つかないように、適当に対応しておこう。
「俺は確かに、愛美の事が一番好きだ。だけど俺は、愛が溢れている男だからな。想いも言葉に溢れてしまうんだよ。すまないが今の言葉は忘れてくれ。では」
「う、うん。じゃあね」
　高橋の反応が少し気になったが、時間も無かったので、俺は早々に任務に戻った。
　高橋と別れてすぐ、俺は副会長を見つけた。
　今更だけれど、名前も知らない人に告白しろとか、真嶋先輩、このミッションにはどういう意味があるのでしょうか？
　ミッションに関しては、後で愛美にも説明してくれるらしいから、告白自体はかまわないのだけれど、相手が本気にして、うまくいっちゃったらどうするのかね。
「むふふ‥‥」
　俺は無意味と思われる心配をしながら、副会長の前に立ちはだかった。
　副会長は俺の顔を見ると、それはまぶしい笑顔で、俺に会釈をしてくださいました。
　って、日本語がおかしくなっているぞ。
　萌えとは違うが、確かに大和撫子、恐るべし。
　しかしひるんでばかりもいられない。
　俺は副会長の目を見つめ、ゆっくりと伝えた。
「俺、副会長の事が好きです。でもあたなたは美しすぎるのです。もしあなたに、庶民的な萌えがあれば、俺

はきっと、あなたの事を本気で愛していたでしょう。だけどあなたには萌えがありません。だから、申し訳ありませんが、俺の事は忘れてください」
　俺がそう言うと、副会長はなにやら複雑な表情に変わった。
　そらそうだろう。
　好きでもない相手から、いきなり告白されて、そしてフラれたのだ。
　ビックリするのも当然だ。
　さて、後はそうそうに立ち去ってしまえば、副会長はモヤモヤして、美少女コンテストどころではなくなるだろう。
「夕日が俺を呼んでるぜ」
　俺はそう言うと、その辺に落ちていた葉っぱの付いた木の枝を口にくわえ、「るるる〜るる〜」とか歌いながら、副会長の前から立ち去った。
　よし、これで残るミッションは後一つだ。
　俺はミッション対象の、リカちゃんを探した。
　しかし、何処を探してもリカちゃんは見つからない。
　出場者はこの辺りに待機しているはずなのに。
　ミッションの内容は、リカちゃんに負けてもらう為に、「今日は大人なリカちゃんが見たい」と言って、化粧をしてもらう事なんだけれど、これはかなり重要だ。
　なんせ今のリカちゃんは、完全体だからな。
　百点に勝てる答案がないように、今のリカちゃんには誰も勝てない、かもしれない。
　もし勝てるとしたら、トラブルか、それとも誰かの謀略か。
　散々探し回ったが、結局、コンテストの開始までに、俺はリカちゃんに会う事はできなかった。
　どうやら生徒会が、リカちゃんを拉致していたようだ。
　と言っても、飴とか玩具で釣られただけだろうけれど。
　とにかく、これでリカちゃんとは、ガチンコ対決する事になるのかな。
　だが、全力の戦い、望むところだ。
　何故か俺は、自分が出場するわけでもないのに、一人気分を盛り上げていた。

第三勢力高橋

　萌芽高校美少女コンテストは、あっという間に開始された。
　まず最初は、水着審査だ。
　水着コレクションさながらに、次々に登場する女生徒は、みんないい感じに俺を興奮させていた。
　それにしても、よくもまあ愛美が、こんなコンテストに出る事を了承したものだ。
　と言うか、全く否定するところなく出場って、どう考えてもおかしいよな。
　それに俺も、さっきまで何をしていた？
　むやみに女子生徒に告白していたような気もするが、どうしちゃったのだろう俺。
　それに今までの俺ならば、愛美が出る事すら、否定していたかもしれない。
「俺も大人になったのかな」そんな事を思いながら、俺は壇上に上がる女子たちを、食い入るように眺めていた。
　すると突如、客席から沢山の人の嗚咽、と言うか、嘔吐する声が聞こえてきた。
「おえぇ～」「きもちわりぃ～」「し、しぬぅ～」
　聞こえてくる声は、どれも納得するものだった。
　なんせ壇上に出てきたのは、女性用スクール水着を着た、美沙太郎だからな。
　客席から、一斉にペットボトルが投げつけられる。
　だけどそれをぶつけられた美沙太郎は、何故か嬉しそうだった。
　良かったな美沙太郎、大人気じゃないか。
　俺は美沙太郎の人生の終わりを、一人静かに祝った。
　さて、汚物が立ち去った後は、いよいよ愛美が登場した。
　登場そうそう愛美はコケていたが、ドジっ子属性のつかみとしては、良い感じだろう。
　俺はビデオカメラを構え、カメラ越しに愛美を見た。
　そこにいる愛美は、とても輝いていた。
　って、水着に電飾張り巡らせて、違うだろおい！
「何あの子？バカっぽいけど面白い～」
「いやでもあの子って、あれでああ見えて中間試験学年トップだったらしいぜ」
「マジかよ、賢くてバカって、理想の女の子じゃないか？」
「いや、あの子のドジレベルは、並じゃないらしいぞ。命の危険もあるとか」
「そ、そうか、でも、見るだけなら問題ないな」
　しかし意外に、客席からの反応は良かった。
　次にリカちゃんが出てきた。
　相変わらず凶悪的な可愛さで、スクール水着がとても似合っていた。
　何気にかぶっている、通学用の黄色い帽子とのアンバランスさも、リカちゃんの魅力を損ねるものではなく、むしろパワーアップさせていた。
「どういう事だ？あんな可愛い小学生が、どうして高校に？」
「お前知らないのか？あの子が萌えのカリスマと言われた、リカちゃん先輩だよ」
「へぇ～正に美少女って感じだな。お持ち帰りしたいぜ」
「いや、それは犯罪だろ。やっていいのは、飴を与える事だけだ」
　流石リカちゃん、一般生徒はイチコロのようだ。
「でもあの子、教師に告白して、付き合っていたらしいぜ」
「それでとうの先生は、学校を辞めさせられたとか」

ただ、先日の佐藤との事は、マイナスイメージとして残っているようだった。
次にでてきたのは、冷子だった。
少し照れた感じで歩く冷子は、正に萌えッ子だった。
何故だ？何故ツンデレのデレ部分だけを、こんなに長く維持できているのだ？
よく見ると、冷子がチラチラと、ある方向に視線を送っている事に、俺は気が付いた。
と言うか、対象は当然、俺の隣に座る、真嶋先輩だった。
見ると真嶋先輩は、冷子をガン見していた。
目で女を犯そうとしているかのように、その視線には欲望が溢れていた。
なるほど、真嶋愛で、冷子の萌えを持続させているのか。
真嶋先輩のバックアップがあれば、冷子でも、ひょっとしたらひょっとする結果になるかもしれない。
そう思えた、この時だけは‥‥
次に出てきたのは、美剣先輩だった。
その性質は、萌えッ子と言うにはかなりの問題がある人だけれど、スタイルは良いし、美人コンテストと言うのなら、その出場は全く問題がないだろう。
だけどさ、木刀持って、
「てめえら！俺に投票しない奴は殺すからな！顔覚えてるからな！」
ってのは無いだろう。
多少は投票されてもおかしくはなかったけれど、これで、票数一票が確定だな。
俺はなんとなく、有沢の健闘を祈った。
何人か知らない人が出てきた後、次に出てきた知った顔は、ヒカル先輩だった。
去年はほとんど票を得られなかったそうだが、最上級生となった今年なら、それなりに票は稼げそうだ。
やはり姉属性って、固定ファンがいるからね。
一姫二太郎と言われるのは、ただの言い伝えでは無いって事だ。
それでもそれは、時代の流れに最善ではない。
定番メニューは確かに美味しいが、決してその時代やその時間帯に、一番売れるメニューであるとは限らない。
即ちヒカル先輩には優勝は不可能。
それでも、勝てないと分かっていても、俺はヒカル先輩をそれなりに応援した。
ヒカル先輩が捌《は》けると、続いて副委員長が出てきた。
肩を落とし、姿勢悪く歩く姿は、正直この場所には似つかわしくなかった。
此処まで出てきた人は、正にファッションショーのようなウォーキングをしていただけに、ズルペタ歩きは目立つものだった。
だけど俺には、「これはこれで感じるものがあるな」と思えた。
副委員長の後、満を持して出てきたのは、大和撫子のカリスマ、副会長だった。
副委員長とのギャップが、より一層副会長を輝かしく見せていた。
これはきっと、生徒会側の作戦だろう。
登場する順番は、生徒会側が勝手に決められるらしいからな。
さて、これで概ね、主要どころは全て出そろったと言っていいだろう。
後は適当に見ておくか。
そう思って見ていたら、クラスメイトの高橋が出てきた。
そう言えば、先ほど高橋と会ったのは、出場者の集合場所だったもんな。
それにしても、高橋から伝わってくるプレッシャー、なんだこの凄まじさは。

何故か俺をチラチラ見ているし、冷子のやるそれとは比べ物にならないくらい、高橋のチャームは、俺の胸にしみわたった。
「彼女は誰だ？神田くんを見ているようだが、知り合いか？」
となりの真嶋先輩が、少し焦ったように、俺に詰め寄ってきた。
「ええ、クラスメイトですが」
俺がそうこたえると、真嶋先輩が怒りをあらわにした。
「バカ者！あの子は危険だ。萌え萌え委員会の最大の敵に成り得る。次の質疑応答タイムまでに、萌え萌え委員会に勧誘してこい。あの子が大和撫子側になってみろ、我々は敗北する可能性があるぞ」
こんなに余裕の無い真嶋先輩は初めてみた。
それほどのものなのだろうか。
俺が疑問に思っていると、客席から声が上がる。
「唯々ちゃん！ふぁいと〜！」「僕たちはキミを愛してる！」「萌芽の恋人〜！」
二年と三年の男子から、沢山の歓声が聞こえてきた。
萌芽の恋人？そういう事か。
彼女は、年上男子から好かれる、正に恋人属性の、正統派美少女。
萌えでも無ければ大和撫子でもなく、その全てを兼ね備えた、パーフェクト女子。
「迂闊でした。早速行ってきます！」
「うむ、頼んだぞ」
俺は、高橋が壇上から捌《は》けるのを確認すると、すぐに高橋の元へと走った。
高橋はすぐに見つかった。
しかし、そこには既に生徒会長の姿があり、他にも何人かの上級生が、彼女を守るように取り囲んでいた。
「彼女には素質がある。生徒会の管理下で教育すれば、立派な大和撫子になれるんだ」
「だめだ。俺たちの唯々ちゃんは、今のままが最高なんだ。生徒会には任せられない」
どうやら生徒会長も、高橋を大和撫子側に、引き入れようとしているみたいだった。
しかしそれは、高橋を愛する上級生によって、鉄壁のディフェンスで守られていた。
確かに、高橋は今のままで良いと思う。
萌えにしても、大和撫子にしても、どちらかと言えば、片寄った魅力なのだろう。
でも高橋は、正統派として十分魅力的だ。
そんな子がわざわざ、邪道に入る事もない。
だから俺は、声をかけた。
「高橋！キミはこのままいけばいいと思うよ。大和撫子でも、萌えッ子でもない、そのままのキミでいてほしい！」
そう言った後、俺はいったい何を言っているのだろうかと、自分自身思った。
だけど高橋の、少し頬を赤く染めた顔を見ると、これでいいのだと俺は確信した。
「うん、神田くんがそういうなら」
「うむ」
って、えっ？俺が言うなら？
それに何やら、雲行きが少し怪しくなってきてはいないか？
先輩たちが俺を見る目が、ちょっと怖いんですけど。
俺の本能が、早急に此処から立ち去るように、警笛を鳴らしていた。
「じゃあな高橋、朝日が俺を呼んでるぜ」
俺はそう言って手を軽く挙げると、脱兎のごとく、速やかにその場から撤退した。

高橋や他の上級生が、後ろで何かを言っていたが、俺の耳には届いてこなかった。
ふぅ〜危なかったぜ。
もう少しで、俺はきっと大切な何かを失っていたのだろう。
いや逆か。
貰っても困るような何かを、得てしまっていたのかもしれない。
俺はホッと胸をなでおろし、達成感に満ちあふれて、コメンテーター席に戻った。
「神田くん、御苦労。その様子だと、無事ミッションはコンプリートできたようだね」
席に着くとすぐ、真嶋先輩にそう言われ、俺は何かを忘れている気がした。
だが、何を忘れているのか、すぐには思い出す事ができなかった。
「はい、問題なく、萌えッ子と大和撫子、そして正統派と、三つ巴の戦いになりそうです」
唖然とした真嶋先輩の顔は、俺の記憶に、三日ほど残る事になった。

萌芽美少女コンテスト

　水着審査が終わり、ここで一次投票が行われた。
　ここでの上位八人が、予選通過者として、決勝に駒を進める事になる。
　結果は、まずまず予想通りの結果だった。
　しかし、大きく予想を覆すところもあった。
　一次投票の順位は、一位が高橋だった。
　これは予想はしていなかったが、或る程度納得できるものだった。
　来年や再来年の美少女コンテストで、同じ結果が出るとは思えないが、高橋は上級生からの支持が絶大だった。
　今年のコンテストに限って言えば、高橋は最強と言えた。
　二位は副会長だった。
　リカちゃんが負けたのは予想外だったが、これはきっと、萌えキャラで票を分け合ったせいだろう。
　これも予想外だったが、分析すれば理解できるところだった。
　三位はリカちゃん、四位は愛美、五位は冷子、六位はヒカル先輩、七位は副委員長と、萌え萌え委員会メンバーが名を連ねていて、これを見ても、やはり票を食い合っている事は明らかだった。
　何とかしなければ、俺たちは負ける、そう思った。
　ついでに八位には、美沙太郎が入っていた。
　これはきっと、コンテストを盛り上げてやろうという、おせっかいな生徒たちが、嫌がらせ八割で投票した結果だろう。
　俺は心の中で、そのおせっかい生徒たちに拍手を送った。
「では、質疑応答を始めます。質問はございますか」
　出場者への質問は、各クラスの委員長、又は副委員長が行う事になっている。
　ただし、出場者のいるクラスの者は、質疑応答には参加できない事になっていた。
　進行係の生徒が、手を挙げている生徒の中から、適当に一人を選んだ。
「皆さんに質問です。好みの男性のタイプは？」
　まあ最初は、当然の質問だな。
「では、予選通過順位の順番でお願いします」
　進行係の言葉に、まずは高橋がこたえる。
「はい。正直な人が好きです」
　高橋はそう言いながら、何故か俺の方を見ていた。
　おいおいおいおい～、俺は決して、正直じゃないぞ‥‥
　でもこの状況は、ぶっちゃけ嫌ではなかった。
「それだけですか？あ、そうですか。では次、お願いします」
　次は副会長か。
　どんな男性が好みなんだろうか。
　しかし一向に、副会長の声が聞こえてこない。
　副会長の口は動いているのに、どういう事だ？
　そう思って見ていると、コメンテーター席の会長が、いきなり通訳し始めた。
「わたくしは‥‥男らしく‥‥ぐいぐいひっぱって‥‥いってくれる人が好き‥‥です」
　大和撫子恐るべし。
　多くを語らない女性って事だろうけれど、少しくらいは喋れよ。

「はい、分かりました。次お願いします」
「はーい！お兄ちゃんです！」
　リカちゃん、嬉しい事言ってくれるぜ。
　でも、このこたえだと、萌える人が限定されそうだな。
　リカちゃんには負けてもらわなければならないが、なんとなく俺の中には、頑張って欲しい気持ちもどこかにあるようだった。
「では次、お願いします」
　いよいよ愛美か。
　でも、愛美が言いそうな事は分かる。
　きっと‥‥
「久弥くんです」
　タイプを聞いていても、愛美はこうこたえる奴なんだよな。
　まあ俺ももし、好きなタイプの女性を聞かれれば、愛美とこたえるだろうけれどね。
「そ、そうですか。暑いっすね。では次‥‥」
　こんな感じで、質疑応答タイムは、滞りなく進んでいった。
「あなたのチャームポイントはどこですか？」
「そうね‥‥乳首かしら？」
　冷子、お前このあいだは、膝小僧だって言っていなかったか？
　それにそんな見えないところ言っても仕方が無いだろう。
　つか、出そうとするな。
「どうして美少女コンテストに出ようと思ったんですか？」
「ふふ‥‥可愛いから？‥‥なんてね。ちょっと‥‥死んだおばあちゃんが‥‥夢枕に立って‥‥出るように‥‥言ってきた‥‥だけよ‥‥ふふふっ」
　いや副委員長、マジで怖いから。
「あなたともし付き合ったら、彼氏にはどんな特典がありますか」
「そうね。膝枕して、耳かきしてあげちゃうわよ」
　ヒカル先輩に膝枕かぁ。
　惹かれる男子生徒は、結構多いのだろうな。
「お前はどうして、こんな所にいるの？」
「それは、僕が魅力的だったんだな。女には負けないんだな」
　いや美沙太郎、そろそろ自分が出場している事自体、否定しようよ。
　こうして、質疑応答の時間は、あっという間に終わった。
　さてここで、コメンテーターによる、各出場者の評価を発表する。
　ここでのコメンテーターによる発言は重要だ。
　みんなが思ってもみなかった利点を指摘したりすれば、当然生徒からの評価も上がるし、逆に良いところが言えなければ、離れる生徒もいるかもしれない。
　高校生とは言え、まだ大人ではない。
　他人の意見に影響される部分も、きっと少なからず有るはずだから。
「ではまず、美沙太郎さんの評価をお願いします」
　順番は、予選順位の低い者から行われる事になっている。
　って、もう美沙太郎はいいよ。
　まずは大和撫子側の、校長が話し始めた。

「お前、見苦しい！」
　校長の一言は、美沙太郎を地獄に突き落とすには十分だった。
　アディオス、美沙太郎。
　もう二度と会う事はないかもしれないが、今度会う時は、女だったらいいな。
「では次、反生徒会側の方、評価をお願いします」
「お前、見苦しい！」
　真嶋先輩も、容赦なかった。
　だけど美沙太郎は、くじけてはいなかった。
　どうやら美沙太郎は、生粋のＭのようで、全くショックは無いようだった。
　まあそりゃそうか。
　ペットボトルを投げつけられて、散々罵声も浴びたのに、まだ此処に立っていられるんだもんな。
　俺はほんの少しだけだが、美沙太郎を見直した。
　愛美がいなかったら、俺はもしかしたら、美沙太郎に投票していたかもしれない。
　そんな事も思った。
　この後も、どんどんコメンテーターの評価が発表されてゆく。
「論外だな」
「確かに、こいつは論外だが、良いところも探せばあるはずだ」
　副委員長、散々な言われようだな。
　でも副委員長、こんな時でも笑っているのね。
「何処にでもいる、ただの女子じゃな」
「そうですねぇ。こんなお姉さんがいると、夜は悶々としちゃうかも」
　校長、まあ間違っちゃいないけど、自分の高校の生徒、そんな言い方するなよ。
　俺もまあ、面白くもない、普通のコメントしちゃったけれど。
「何処がどういいのかわからんな。一昨日出直してくるのじゃ」
「冷子の良いところ？無い！」
　校長は相変わらずだし、せめて真嶋先輩、少しくらいは褒めてあげようよ。
「当たってるわね。流石マイダーリン光一先輩」
　お前も納得してるなよ。
　こうしていよいよ、愛美の番がやってきた。
　まずは生徒会長が話し始めた。
「ただのどんくさい女だな。もしかしたらそれも、わざとやって気を引こうとしているのかもしれない。そうなれば腹黒女って事か」
　おいおい、生徒会長がそんな事言っていいのかよ。
　でも、愛美は強くなった。
　そんな事を言われると、今までならきっと、ショックで苦笑いするのがやっとだったはずだ。
　だけど今の愛美は違う。
　本当の笑顔で、軽く生徒会長の言葉を聞き流していた。
　さて、次は俺がコメントする番だ。
　俺は一つ深呼吸してから、愛美の事を話し始めた。
「愛美は、正直昔からどんくさくて、一緒にいる俺は、命の危険を感じる事も多々ありました。だけど、徐々にドジは許せるものへと変わってゆき、周りにいる人達を、笑顔にできる女の子になってきたと思います。まだまだ、完璧な萌えッ子には遠いですが、愛美は俺にとって、最強の萌えッ子です。俺はそんな愛美が、大好き

です」
　俺は動揺していたのかもしれない。
　もしくは、真嶋先輩に洗脳されていたのかもしれない。
　原因は分からないが、とにかく俺は、普通では無かったのだろう。
　だからなのか、俺は、自分でも信じられないくらい、普通に想いを述べていた。
　それを聞いた愛美の頬には、涙が一滴流れていた。
　愛美の評価の後は、特に余韻も残さず、次のリカちゃんの評価へと移っていた。
「かわええ子供じゃな」
「お前ら、まさか子供に投票するのか？こんなのに投票したら、ただの変態だぞ」
　真嶋先輩、敵になったら容赦ないな。
　少しくらいは褒めてあげようよ。
　リカちゃん涙目じゃないか。
　ああ可哀相に、後でなでなでしてあげるから、今は我慢してね。
　俺は使えるはずもないテレパシーで、必死にリカちゃんに電波を飛ばした。
　さて次は、副会長か。
「日本の良き女性像、それは大和撫子。男を立て男に尽くす、正に理想の女。君と結婚できたなら、俺は、俺は、必ず幸せにしてみせる！俺と結婚してくれ！」
　おいおい、ただのプロポーズじゃないのか？
　でもこれは、なかなかいい作戦だ。
　周りも祝ってやろと、盛り上がるからな。
「いやよ‥‥」
　‥‥‥‥初めて副会長の声を聞いたけれど‥‥‥‥
　相当、会長の事が、好きじゃなかったんだろうな。
　俺はあまりの出来事に、副会長の評価を、無意識のうちに話してしまった。
「副会長は‥‥とても美人で‥‥少し冷たく見えるところもあるけれど‥‥実は凄くいい人なんじゃないかと‥‥そんな気が‥‥今しました」
　批判にはならなかったけれど、きっと副会長の優勝は無いと、俺は何故か確信していた。
　そしていよいよ最後の一人、高橋の番がきた。
「‥‥いいんだ‥‥俺なんて‥‥」
　会長は、評価できる状態ではなかった。
　可哀相に、この人はしばらく帰ってこないな。
　俺はそう思ったので、促されるのを待たずに、高橋について話し始めた。
「高橋は、普通にいい子だと思います。萌えもいいですが、普通ってのも、今は評価される時代だし。普通を売りに、芸能界で活躍している女の子もいますからね。でも、俺はやっぱり、愛美がいいかな。だって、愛美は愛美だから」
　ただ、ノロケてしまった。
　高橋には悪いが、応援するわけにもいかないしね。
　俺は少し申し訳ない気持ちで高橋を見た。
　すると何故か、高橋が涙を流していた。
　なんでそうなるの？
　特に悪口を言ったわけじゃないのに。
　観衆からは、ブーイングが巻き起こっていた。

とにかく、上位四人の評価タイムは、誰かが泣くと言う、波乱の展開となった。
まず、高橋の涙の意味はわからないが、コレはプラスに働く涙だろう。
何故なら、観衆から俺に、ブーイングがあったからな。
次に会長の涙、これ自体はプラスに働きそうだが、副会長のイメージが、一気に崩れてしまったので、票は伸びないと思われる。
リカちゃんの涙は、同情を誘うものではあったが、真嶋先輩にああ言われては、投票する人も減るのは確実だ。
で、愛美だけれど、これは微妙かな。
愛美の一途さに心動かされる人は多いだろうけれど、こういう人気投票で、彼氏がいる事は、やはりマイナスだもんな。
目の前でイチャイチャされれば、きっと面白くないだろう。
これは高橋の優勝かな。
俺はなんとなく、大和撫子側との、二位争いに照準を絞っていた。

きっともうすぐ‥‥

　投票が終わり、いよいよ発表の時間がきた。
　発表は、三位から順に、二位、優勝と発表される。
　要するに二位を取れば、俺たちは生徒会との直接対決にきっと勝てる。
　愛美が二位になる事を、俺は祈っていた。
　そしていよいよ、発表が開始された。
「お待たせしました。まずは三位から発表します。第三位は、鈴城環《すずしろたまき》さんです！」
　えっ？誰それ？
　俺がそう思っていると、副会長が雅な佇まいで、ゆっくりと前に歩み出てきた。
　なんだ副会長か、って、副会長が三位って事は、コレは勝ったかもしれない。
　残るライバルはリカちゃんだけれど、この学校の生徒が普通の生徒なら、リカちゃんに投票なんて、もはやできるものではない。
　俺はかなり、勝利を確信していた。
　しかし、次に発表された名前は、俺にとって意外なものだった。
「では、準ミスを発表します。準ミスは‥‥高橋唯々さんです！」
　なんと！俺の予想が外れた。
　となると、当初の予想通り、優勝は昨年のチャンピオン、リカちゃんで決まりか？
　それとも、真嶋先輩が言ったように、愛美に優勝の可能性があるのだろうか。
　オチのあるギャグアニメとかなら、権力のあるお姉さんキャラや、綺麗な先生が優勝をかっさらうところだが、そんなキャラはこの学校には存在しない。
　となるとやはり愛美なのか。
　俺はドキドキしながら、体を硬くして発表を待った。
　準ミスの喜びの挨拶も終わり、いよいよ、ミス萌芽高校グランプリが、発表される時がきた。
　一瞬時間が止まったように、全てが静まりかえる。
　そして、マイクのハウリング音が、辺りに響きわたった。
「えぇぇ、ミス萌芽高校グランプリは、一年梅組‥‥」
　キターーーーーー！
「山田美沙太郎さんです！」
　エーーーーーーー！
　辺りに歓声が響きわたり、生徒達が一斉にざわつき始める。
　よく聞くと、笑い声がほとんどだった。
　ああ、なるほど、俺がしらけるようなコメントしまくったから、マジでしらけて、みんなネタ投票に走ったのか。
　でもなんだか、俺はホッとしていた。
　そりゃ当然、愛美が優勝してくれたなら、俺はきっと喜んだだろう。
　だけど何処かで、俺だけの愛美であって欲しいとも思う。
　我がままな話だけれど、愛美は、俺だけの萌えッ子であればいいのだ。
　まあいずれ、俺だけではなく、みんなから認められる、史上最強の萌えキャラになるのだろうけれど、今日はまだ、その時ではないようだ。
　俺は愛美に駆け寄った。
「愛美、俺にとっては、お前が一番だからな」

恥ずかしい台詞ってのは、一度言ってしまうと、その後は結構言えるものらしい。
「うん、私も、久弥くんが一番好きだから」
ああ、なんだろうか、この萌えるような気持ちは。
目の前の愛美は、とにかく今までで最高に可愛かった。
「まあ今日は負けたけど、明日はきっと、愛美が史上最強の萌えキャラになっているさ」
俺はそう言って、愛美を抱きしめた。
すると後ろから、聞き覚えのある大きな声が聞こえた。
「あぁ！お兄ちゃん、お姉ちゃんとばかり仲良くしないで、リカもかまってよお～」
そう言ってリカちゃんが、俺の背中に飛びついて来た。
すっかり忘れていたけれど、俺にはうっかり釣りあげてしまった、小さくて可愛い妹のような先輩もいたんだっけ。
「わ、私も、仲良くしても、いいですか」
そこにいたのは、高橋だった。
「えっ！あ、あぁぁ‥‥」
俺はどうこたえればいいか、愛美の顔色をうかがった。
愛美を見ると、愛美は笑顔だった。
根拠は無いけれど、愛美はどんな時も俺を信じ、俺には笑ってくれる気がした。
大丈夫だ。
俺は愛美の許可を勝手に得て、高橋の要求にこたえる事にした。
だが俺がこたえる前に、高橋はボソッと、ひとこと言葉を付け加えた。
「愛美さんと‥‥」
って、愛美とかい！！
まあでも、愛美と仲良くしたいって事なら、それは俺も愛美も大歓迎だ。
「仲良くしても、いいんじゃないかな」
「はい！もちろん神田くんも、仲良くしてくださいね」
「そ、そうだな」
俺と愛美はなんとなく、今日から高橋と友達になる事になった。
今度は、俺の服の袖を、引っ張る女子がいた。
副会長だった。
何故に副会長が、頬を赤く染めて、俺の服の袖を引っ張っているんだ？
そろそろこの話もクライマックスだからって、無茶しすぎだろうが。
だいたい俺は、愛美さえいればいいんだから、ハーレム話にしなくていいんだよ。
この状況を見て、当然、冷子も、ヒカル先輩も、副委員長も、そして養殖科の人たちも、俺の周りに集まってきていた。
もうこうなったら、どうにでもなれ！
俺はみんなを手当たりしだい抱きしめた。
「わふぅ～ん。神田くんって、強引なんだな」
お前いつのまに！
俺は誤って抱きしめてしまった、美沙太郎を蹴り飛ばした。
辺りには笑いが溢れていた。
こんな無茶苦茶な一日だったが、この日は俺が、心の底から愛美の事を愛していると、自覚できた日だったかもしれない。

愛美。
中学時代、いつかは萌えキャラになると信じた。
高校入学当初、もうすぐ萌えキャラになれると思った。
そして今は、沢山の笑顔に囲まれて、誰にも負けない、満面の萌えスマイルをしていた。
きっと愛美は明日から、史上最強の萌えキャラになるのだと、俺は確信した。

著者より

「明日から史上最強の萌えキャラ」を読んでくださいまして、ありがとうございます。
この作品は、とりあえず笑える作品を書こうと思って書いたものです。
「萌えとは何か？」みたいなテーマも持っていたりします。
序盤はゆっくり、後半一気に書いたので、やや後半の方が走り気味かもしれません。
実質、１週間程度で書きあげたといっても過言ではない作品です。

２０１２年　秋華

明日から史上最強の萌えキャラ

http://p.booklog.jp/book/48934

著者：秋華
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/kitaneko33/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/48934

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/48934

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社paperboy&co.